

に旦那の手箱の中から取出してね、思ひ切つてやつて見たんだけれども、好い鹽梅に近くで發しただけに狙ひも狂はず行つて、お前が怪我さへ無ければ私はマア有難い斯んな嬉しい事は無いよ。新「何しろ何うせ此事が露顯せずにはゐねえ、甚藏を撲殺して仕舞つてお前と己と一緒に成つてゐられる譯のものぢやアねえから、今のうち身を隠してえものだ。賤「ア、私もね茲にゐる氣はさら／＼無いから、形見分けのお金もあるのだけれども、四十九日まで待つてはゐられないから、少しは私の貯へもあるから、それを持つて二人で直に逃げやうぢやアないか。新「ウム、少しも早く今宵の内に。といふので、是から衣類や櫛笄貯への金子までも一ト風呂敷として跡を暗まし、明近い頃に逐電して仕舞ひました。また甚藏の死骸は絹川べりにありましたが、夜が明けて百姓が通り掛つて騒ぎ、名主へも届けたが、甚藏は平素悪まれもの、何うか死んで呉れ／＼と思つてゐた處、甚藏が絹川べりで鐵砲で撃ち殺されてゐるといふのを村の人達が聞込んで、ア、是からは安心だ、甚藏が死ねば村の者が助かるまでよと歡び、其儘名主様へ届けて法藏寺に葬つたが、投込み同様、生きてゐる中の悪事の罰で、勿論悪徒ですから誰の所業と詮議して呉れる者もありません。新吉お賤の逃去りましたのは固より不義淫奔をしてゐて名主様が没ると、自分達は衣類や手廻りの小道具何や彼やを盗んでゐなく成つたに相違ない。あれは素より浮氣をしてゐた者の墮落だから左もあるべしと、是も尋ねる者もない

ので何事もありませんが、名主惣右衛門の變死は誰あつて知る者は無い。肝腎の知つてゐる甚藏が殺されましたから、惣右衛門は全く病死したのだと心得て居りますが、中には疑つてゐる者もありまして、様々いふが、マア名主の跡目は忤惣次郎、誠に柔和温順の人でお父さんは道樂のみを致しました、それには引きかへ惣次郎は堅くつて内氣ですから他に出たことも無い人でございますが、或時村の友達に誘はれまして水街道へ參つて、麴屋といふ家で一猪口やりました、其時、酌に出た婦人が名をお隅と申しまして、齡は廿歳ですが誠に人柄の好い大人しやかな婦人でございます。

五十四

水街道あたりでは皆枕附といひまして、働き女がお客に身を任せるが多くありますが、此のお隅は唯無事に勤めを致し、餘程人柄の好い立振舞から物の言ひ様、裾捌まで一點の申分のない女ですから惣次郎は麴屋の亭主を呼んで、是は定めし出の宜しい者だらうと聞き合せますと、元は谷出羽守様の御家來で、神崎定右衛門といふ人の子で、お父様と一緒に浪人して此の水街道を通り、此家に泊り合せると定右衛門が生憎病氣で長く煩らつて没なり、後で藥代や葬式料に困つて居ります故、宿の主人が金を出して世話を致しましたから恩報じかたく、此家に奉公致し、外に身寄親類もない心細い身の

上でございますから、何分願ひます、外の女とは違ひまして眞面目に奉公を致して居りますもの、最
 眞にして下さいといふので、惣次郎の氣に入りまして、度々遊びに来る、其頃の名主と申しては中々
 幅の利いた物ですから、名主様の座敷へ出る時は、働き女でも藝妓でも、まア名主様に出たよなど、
 申して見得にしたものでございます。惣次郎もお隅には多分の祝儀を遣はし折節は反物などを持つて
 来てやる事もあるから、男振りといひ氣立といひ柔和温順で親切な名主様と、お隅も大切に致し、何
 うも有難いと思ひ、或日の事、隅「私は外に参る處もない身の上でございますから、何分御最良なす
 つて下さいといふので、惣次郎も近々来る中に、不圖して縁で此のお隅と深くなりました事で、今迄
 堅い人が急に浮れ出すとは是は又格別でございますして、此頃は家を外に致す様な事が度々ございま
 せぬから、お母様も心配する、弟御もございませぬが、是はまだ九歳で、何も役にたつ譯でもございませ
 ぬから、お母様も種々心配なさるが、常に堅い人だから、うっかり意見がましい事もいはれませんの
 で控へてゐる。すると其翌年寛政十年となり、大生郷村の天神様から左に曲ると法恩寺村といふ、其
 法恩寺の境内に相撲があります。此相撲場は細川越中守様御免の相撲場といふことで、木村權六とい
 ふ人が只今以て住んで居ります、縮緬の幕張りを致して、田舎相撲でも立派な者で近郷からも随分見
 物が参ります、此處に参つてゐる關取は花車重吉といふ、先達で私古い番附を見ましたが、成程西

の二段目の末から二番目に居ります。是は信州飯山の人で十一の時初めて羽生村へ来て、名主方に二
 年ばかり奉公してゐる其中に、力もあり體格もいゝので、自分も好きの處から、法恩寺村の場所へ飛
 入りに這入ると、若いにしては強い、此間は三段目の角力を投げたなど、賞められましたから、自分
 も一層相撲に成らうと、其頃の源氏山といふ年寄の弟子となつたが、是より花車が来たといへば土地
 の者が最良にして見物に来る。惣次郎も何時も多分の祝儀を遣はしましたが、今度もお隅を伴れて見
 物しやうと思ひ、相撲は附けたり、お隅に逢いたいからそこへ支度を致しますと、母が心配して、
 母「アノ歸るなら今夜は些と早く歸つて貰へ度え、明日は少し用があるからう。惣次郎「少しは遅く
 成るかも知れませんが、若し遅くなれば喜右衛門どんに何彼と頼んで置いたから御心配は無いが、萬一
 して花車も一杯やり度いななど云ふと、些とは私もやり度い物もありますから、又歸る迄に着物でも
 持たしてやりたうございますし、そんな事で種々又相談も致しますから、若し遅く成りましたら、何
 うかお先にお寝みなすつて下さいまし。母「ハイ遅くならば先きに寝てもいいけれど、まア此頃は
 他へ出ると泊つて来る事もあり、今迄旦那様が達者の時分にはお前が家を明けた事はねえ、あんな堅
 え若旦那様はねえ、今の世は逆さまだ、親が女郎を買つて子が後生を願ふと云ふ唄の通りだ、惣次郎
 様の様なあんな若旦那ア持ちながら、惣右衛門どんはいゝ年いして道樂するなどと村の者がいふから

鼻が高えと思つたが旦那殿が死んで仕舞つて見ると、今ではお前の身代だから、まア家の爲え思つてお前も今迄骨折つて呉れただが、去年あたりから大分泊りがけに出かけるものだから、村の者も今迄は堅え人だつたが、何う言ふ譯だかな泊り歩くが、役柄もしながらハアよくねえこつたア年老つた親を置いて、なんて悪口を利く者もあるで、成だけ他人には能く云はしたいが、是は親の慾だからお前の事だから間違えはなかんべえが成たけまア歸れるだら歸つて貰えてえだ心配だからのう。惣二郎「イエなに、然う御心配なれば參らんでも宜しう、是非參りたい譯ではありません、花車も來た事だから聊かでも祝儀もやりたいと思ひましたがさういふ譯なら參らんでも宜しいので、新右衛門も同道する積もりでしたが、左様なれば往かないでも先方で咎めるでもなし、怒りもしますまい、それでは止めませう。母「さういへばハア困るべえぢやアねえか、行くなアとはいはねえが、出れば泊りがけの事もあるし、歸らねえ事もあるから、それで私が案じるからいふので、行くなアとはいはねえ、行つてもいゝから早く歸つて來うといふのだ、お前は今迄親に暴え言をいひ掛けた事はねえが、此頃は様子が異つて意見らしい事をいへば顔色が違ふからいふだ、私は段々年を取り惣はまだ子供なり、役には立たねえから、お前も堅くつて今まで人に云はれる事もなかつただから、間違えはなからうけれども、若え者の噂にあんなハア美しい女子があるから家へ歸るは厭だんべえ、婆様の顔見るも大儀だらうなどといふ者もあるから、そんな事を聞くと心配で成んねえもんだから、少しも能く思はせてえのが親の慾でござらア、行くなといふ譯ではねえ往つてもいゝから歸れたら早く歸つて來うといふと臆いれてそんたらいくめえなどと、年寄ればハア然うお前にまでいはれて邪魔になるかと思つて早くおつ死てえなどと愚痴も出るものでのう。

五十五

惣次郎「イエ左様なれば早く歸つて參ります、思はず言過ぎて何うも悪いことを申しまして今夜は早く歸つて參ります、大きに餘計な御心配を懸けまして誠に濟みません。母「然うなれば宜しい、機嫌を直して往くがいゝよ、これく多助や。多「ハイ。母「汝行くか。多「へエ、關取が出るてえから行つて見やうと思つて。母「汝口が苛いから人中へ入つて詰らねえ口利いては旦那様の顔に障るから氣イ付けて能く柔和しく慎んで往つてこよう。多「へエ、畏まりました、私が行けば大丈夫だ、そんなら行つて參ります、左様なら。と、惣次郎は是から水街道の麴屋に行つて彼のお隅を連れて、法恩寺村の場所に行かうと思つたが、今日は大した入りだといふから、それよりは花車を他へ招んで酒を飲ました方が宜しい、それに女連で雑沓の中で間違でもあつては成らぬ、殊にお隅を連れて行くは心

配でもあり役柄をも考へたから、大生郷の天神前の宇治の里といふ料理屋へ上り、此處の奥で一猪口遣つてゐると、間が悪い時は仕方のないもので、彼のお隅にぞつこん惚れて口説いて弾かれた、安田一角といふ横會根村の劍術家、自ら道場を建て、近村の人達が稽古に參る、腕前は鈍くも田舎者を嚇かしてゐる、見た處は強さうな、散髪を撫付けて、肩の幅が三尺もあり、腕などに毛が生えて筋骨逞しい男で、一寸見れば名人らしく見える先生でございます。無反の小長いのを帶し、襦袢の袴をだゞッ廣く穿き、大先生の様子に思はれますが、賭博打のお手傳ひでもしやうといふ浪人者を二人連れて、宇治の里の下座敷で一口遣つてゐる、奥に惣次郎がお隅を連れて來てゐる事を聞くと、ぐツぐツと癪に障り、何かあつたら關係を付けやうと思つてゐる。此方では御飯が濟んだから歸り掛けに花車の家に向かうといふので急いで出る、お隅も安田が來てゐるのを認めましたから氣味が悪く早く歸らうと思ふので、奥から出て廊下を來ると、何うしても其處を通らなければ出られないから、安田はわざと三人の刀の鐙を出して置きますと、長い刀の柄前にお隅が躓きましたのを見ると、安「コレコレ待てコレ其處へ行く者待て。惣「へエ〜私でございますか。安「手前何處の者か知らんけれども、人の前を通る時に挨拶して通れ、殊にコレ武士の腰に帶して歩く腰の物の柄前に足をかけて、倉忽でござると一言の謝言も致さず、無暗に參ることがあるか、必死心あつてのことだらう。惣「へい頓と心

得ませんで……お前疎忽だからいけない、お武家様のお腰の物に足をかけて何のことだねえ、へい何うも相済みませんでございました、つい取急ぎまして飛んだ不調法を致しました、當人に成代りましてお詫を申し上げます、何分御勘辨を願ひます。安「なに詫を申すなら何處の者か姓名も云はず、人の物を詫びるには姓名を申せ、白痴め。惣「へエ、手前は羽生村の惣次郎と申す何も辨へませぬ百姓でございます。安「なに、羽生村の惣次郎、うむ名主だ、イ、ヤ名主だ、羽生村にて外に惣次郎といふ名前の者は無い様だ、名主役を勤むる者が人の前を通る時には御免なさいとかお先きに參るとか何とか聊か禮儀會經を知らぬ事もあるまい、小前の分らぬ者などには理解をも云ひ聞けべき名主役では無いか、それが殊に武士の腰の物を足下にかけて黙つて行くと云ふ法があるか、咎めたらこそ詫もするが、咎めずば此の儘行き過ぎるであらう、無禮至極の奴、左様ではござらんか仁村氏。仁「是はお腹立の處御尤も是は何も横合から指出て兎や角いふではないが、今仰せの如く名主役をも勤むる者が、少しは其邊生だつて大したお咎めをなさる譯でもあるまいが、今仰せの如く名主役をも勤むる者が、少しは其邊の心得がなくては勤まらぬ、小前の者が分らん事でもいふ時は、呼寄せて理解をも云ひ聞けべき役柄だ、然るにすん／＼行くといふ法はない、是は、イヤ先生御立腹御尤も是は幾ら被仰つても宜しいお腹立御尤もの次第で。惣「重々御尤もで相済みません、御尤も至極でござります、どうか御勘辨を

願ひます。安「只勘辨だけでは済むまい、苟にも武士の腰とも云ふ大切の物、手前達は何か武士が腰に帯して居る物は人斬庖丁など、悪口をいふのは手前の様な者だらう、人を無暗に斬る刀でないわ、え、戦場の折には敵を断切るから太刀とも云ひ、片手撲りにするから片刀ともいひ、又短いのを鎧通しとも云ふ、武士たるものが功名手柄を致す處の道具、太平の御代に、一事一點間違を致せば直にも切腹しなければならぬ大切の腰の物ぢや、それを人斬庖丁など悪口をいひをるから挨拶もせずに行つたのだ、それに違ひなからう、ナア。連の男「是は先生至極御尤も、怪しからんこと、何だ、え、何うもその、武士たるべき者の腰に帯するものを人斬庖丁などは以ての外だ、太平なればこそよいが若し戰場往來の時是をエ、太刀とも唱へる、片刀ともいふ、今一つ短いのは何でしたツけ、うむ鎧通しともいふ、一事一點間違があれば切腹致すべき尊い處の腰の物、それを何だ無禮至極、どの様に仰しやつても宜しい。惣「重々恐れ入りましたが何分御勘辨になります事なれば、どの様にお詫を致して宜しいか頓と心得ませんが。安「刀を淨めて返せ、淨まれば許して遣はす。惣「どの様に致せば淨まります事か、百姓風情で何も存じませんで。安「知らんといふ事があるか、淨めて返さんうちは勘辨罷相成らぬ。惣次郎もつく／＼困りましたが、お隅は平素から一角は酒の上が悪く我儘なのを知つてをります、また女が出ると柔かになる事も存じてゐるから、却つて斯う云ふ時は女の方が宜からうと思つて、後の方からつか／＼と進み出まして、隅「先生誠に暫く。安「何んだ。

五十六

隅「翹屋の隅でございますが、只今私が旦那様のお供をして来て、つい例の龜忽者で駈出して躓きました、足で蹴たの踏んだのといふ譯ではありませんが、一寸足が觸りましたので、貴方と知つてゐれば宜しいのに、うっかり足が出ましたので、それ故先生様の御立腹で誠に私がお供に来て済みませんから、不調法でございますが何卒御勘辨なすつて下さいな、決して蹴たの踏んだのといふ譯でもなし、お供をして来て不調法があつては、羽生村の旦那様に済みませんし、あの私の龜忽者の事は先生も御存じで入らつしやいますから、お馴染甲斐に不調法の處は重々お詫びを致しますから御勘辨を安「黙れ、なに馴染がどうした、馴染なら如何に無禮致しても済むと思ふか、手前には聊か祝儀を遣はした事もあるが、どれ程の馴染だ、又拙者は料理屋の働女に馴染は持たん、無禮を働いても馴染なら許して貰へると思ふか、鼻を殺ぎ耳を斬つて馴染だから御免とそれで済むか無禮至極な奴、女の足に刀を踏まれては猶更汚れた、淨めて返せ。仁「是は先生至極御尤も、御尤もだが酒も何もまづくなつたなア、是はどう云ふ身分柄か知らんが馴染だから勘辨といふ詫びの仕様はないが、誰かあゝお隅

か妙な處で出會したなア、先生／＼麴屋の隅でございます、能く来たなア、え隅か、是は何うも詫まれ／＼、重々何うも濟まぬ、先生お隅でございます、貴公知らなんだ、あは／＼、どうも鹿相はねえ詫びるより外に仕方がない、詫びて勘辨ならんといふ事は無い、重々恐れ入つたと詫びる、能く来たあの先生、先生／＼勘辨してお遣りなさいお隅でございます。安「何を戯言、勘辨相ならん。と猶更額に筋を出して中々承知しませんから、惣次郎もまさか其儘に逃出す譯にも往かず、困り果てゝをりますと、奥の離座敷の方に客人に連れられて参つて居たは花車重吉、客人は至急の用が出来て歸りましたから、花車は遙に此の様子を聞いて、惣次郎とは固より馴染なり兄弟分の契約を致した花車でございませぬから心配してをります。多「もし旦那様／＼。惣「何だ。多「關取がねえ奥に来てゐるだ、大きに心配してゐるだが、ちよつくら旦那にお目に掛りてえといふが。惣「なに花車が、それは宜かつた關取に詫をして貰はふ、一寸。安「これ／＼逃出す事はならぬ。惣「いえ逃げは致しませんが、主意を立てましてお詫を申上げます暫く御免を。といふのでこそ／＼と後にさがる。此際に宇治の里の亭主手代なども交る／＼詫びまするけれども一向に聞入れがありません。惣「關取は此方かえ。花車「はい。惣「誠にどうも此處で逢ふとは思はなかつた。花「え、今皆聞きました、何しろ相手が悪いがねえ、何か是には仔細があつてだアと鑑定してゐるが、何しろ筋の悪い奴で、是は私がねえなり

代つて詫びて見ませう。惣「何卒、關取なら愛敬を賣るお前だから厭でもあらうが、先の機嫌を直す様に。花「案じねえでもいゝよ。多「私イ宿を出る時に間違へでも出かすとなんねえから、名前に掛るからつてお内儀に言付かつて汝行つて詰らねえ口を利いて間違へ出かしてはなんねえと、氣い付けられたんだが、かうなつては私や出先で濟まねえ事だから關取頼むぞえ。花「心配しねえでもいゝよ私が請合つた宜しい。と落着き拂つて花車、齡は二十八でありますが至つて賢い男、大形の縮緬の單衣の上に黒縮緬の羽織を着て大きな鎖付の煙草入を握り、頭は櫓落しといふ髪、一體角力取の愛敬といふものは大きい形で怖らしい姿で太い聲の中に、何となく一寸愛敬のあるものでさり／＼と歩いて参りまして、花「はい御免なさい、先生今日は。安「何だ、誰だい。花「はい法恩寺の場所に来てをります花車重吉といふ弱い角力取で、何卒お見知り置かれて皆様御最良に願ひます。安「はい左様か、私は相撲は元來嫌ひで遂ぞ見に往つた事も無いが、關取何ぞ用でございますか。花「はい只今承はりますれば、羽生村の旦那様が貴方方に對して飛んだ不調法をしたと申す事だが、何分にもお聞濟みがないので、私は馴染の事でもあるに由つて、重吉手前は顔賣る商賣ぢや、なり代つて詫びてくれと頼まれて、見兼ねて中に這入りましたがねえ、重々御立腹でもございませうが、斯ういふ料理屋で商賣柄の處でございすれば、此家も迷惑なり、お互に一杯づゝも飲まうと思ふに酒も旨くない、先

生も旨うない譯だから、成り代つてお詫しますから、花車に花を持たせて御勘辨を願ひます。安「誠にお氣の毒だが勘辨は致されんて、勘辨致し難い譯があるから、勘辨しないといふは武士の腰物を女の足下に掛けられては此儘に所持もされぬから淨めて返せと先刻から申して居るのだ。花「それは然うでありませう、併し出来ない處を無理に頼むので、出来難い處をするが勘辨だア、然うぢやアありませんか。安「無理な事は聽かれませんよ、お前が仲に這入つては尙更勘辨は出来ぬではないか。

花「はア私が這入つて、なせね。安「花車重吉といふ有名の相力取が這入つては勘辨ならん、是が七八十になる水鼻を半分クツ垂して腰の曲つた水香百姓が、年に免じて何卒堪忍して下されと頭を下れば堪忍する事も出来やうが、立派な相力取、天下に顔を賣る者に安田一角が勘辨したとあれば力士に恐れて勘辨したと云はれては、今井田流の表札に關はるから猶更勘辨は出来んからなあ。花「それは困りますねえ、それぢやア物に角が立ちます、先生私は天下の力士でも何でも無いわ、まア長袖の身の上で、皆さんの最良を受けなければならん、裸體で、お前さん取まはし一つでもつてから大勢様の前に出て、まア勝つも負るも時の運次第でござろ、砂の中へ轉がつて着物を投つて貰ひ勝つたとか負けたとかいふ處が愛敬ぢやア、然うして見れば皆様の御最良を受けなければならん、貴方が勘辨して下されば、それ花車彼奴は愛敬者ぢやア、先生が勘辨出来ない處を花車を最良なればこそ勘辨し

たといへば、それで私は先生のお蔭で又賣出します、さうぢやアございませんか、勘辨しておくんなさい。安「勘忍は出来ぬ。花「出来ぬでは困ります。安「イヤ勘辨出来ぬ、武士に二言はないわ。

五十七

花車「そんな事云うて對手が武士か劍術遣ひなれば兎も角も、高が女の事だからよ、大概にしるよ。安田「大概にしるよとは何だ。花「これは言損つた、これは角力取はかういふ口の利きやうでうっかり云つた、勘辨しろよう。安「勘辨しろよとは何だ。花「ほいまた言損つた。安「勘辨しろよとは何だ手前も大名高家の前に出てお、盃を頂く力士では無いか、挨拶の仕様を存ぜぬ事はない、大概にしるの勘辨しろよのといふ云ひ様があるか、猶更勘辨ならん、無禮至極不埒な奴だ。と側にある飲冷しの大盃を把つてほんとと放ると、花車の顔から肩へ掛けてびつしより埃だらけの酒を浴せました。花「先生お前さん酒を打掛けたね、ぢやアどうあつても勘辨出来ないといふ極めたか、それでは仕方がないが、先生私も花車とか何とか肩書のある力士の端くれ、人に頼まれ、中に這入つて勘辨ならん、はアさうでございませうかと指をくはへて引込む事は出来ぬ、私は馬鹿だ智慧が足りねえから挨拶の仕様を知らぬ、何卒かうせいと教へて下せえ、お前のいふ通りやりませう、ねえ、どうなとお顔を立てやうか

ら斯うしりと教へて下せえ。安「これは面白い、予の顔を立てる、主意を立てるなれば勘辨致す、無禮を働いたお隅と云ふ女は不届き至極だから、あの婦人を惣次郎から貰ひ切つて予に引渡して下さい、道場に連れて参つて存じ寄り通りにする。花「それは出来ない、あれは御存知の水街道の麴屋の女中で、高い給金で抱へて置く女だ、今日一日羽生村の名主様が借て来たんだ、それを無禮した勘辨出来ないといつて道場へ連れて行く、はいと云つてやらね、私にしてもさうです、道場へ引かれれば煮て喰ふか焼いて喰ふか頭から鹽をつけて喰はれるか知れぬものを、それは出来ない相談、それぢやア仕様がねえわ。安「それぢやアなぜ主意を立てるといつた、お前は力士、たゞの男とは違ふ、一旦云つた事を反古にする事はない、武士に二言はない、刀に掛けても女を貰ひませう。花「是は仕様がねえ、ぢやア、まアお前さんが劍術遣ひだから刀に掛けても貰はふといふなら私は角力取だから力に掛けてもやる事は出来ぬと極めた、それより外は出来ませんわ。といふと一角も額に青筋を張つて中聴きませぬ。此家へお飯を喫べに這入つた人達も驚きましたが、中には角力好で江戸の勇み肌の人も居りまして、客「どうだもう歸らうぢやアねえか、因業な武士だあの畜生。客「ウム己達が彌平どの處へ来るたつて深い親類でもねえが、場所中關取が出るから來てゐるのだが、本當に好い關取だなア、體格が出來て愛敬相撲だ、一寸手取で、大概角力取が出れば勘辨するものだが、彼奴め酒を打

掛けやアがつて酷い事しやアがる。客「相手の武士は三人だ、關取がどつと起つて暴れると根太が抜けるよ。客「斯うしやうぢやアねえか、折をさういつても間に合ふめえし残していつても無駄だから、此の生鮭と玉子焼とア持つて行かう。など、横着な奴は手拭の上に紙を布いて徐々肴を包み始めた。花「ぢやア先生かうしませう、此處の家でこたすたいつた處が此家へ迷惑かけて、外に客があるから怪我でもさしてはなりません、戶外に出て廣々とした天神前の田圃中でやりませう、私も男だ逃げ隠れはしません。安「面白い出る。といふので三人づんと起つた。客「喧嘩だア。と他の客はバラバラ逃げ出したが、代を拂つて行く者は一人もない、横着者は刺身皿を懷に隠して持つて行く者もあり、中には料理番の處へ駈込んで、生鮭を三本も持つて逃げ出す者もあり、宇治の里では驚きましたが、安田一角は二人の助けを頼みとして袴の股立ちを取つて、長いのを引抜き振翳したから、二人の歩士も義理で長いのを引抜き三人の武士が長い閃つくのを持つて立並んでゐるから、近邊の者は驚きました。惣次郎は猶更心配でございますから、惣「關取お前に怪我をさせては親方に濟まぬから。花「いゝよ、親方も何も無い、お前さん彼方へ行つて下せえよ、己が引受けたからは世間へ顔出しが出来ませんから退く事は出来ない、何卒事なくやる積りで、お前さんは心配をしねえでいゝよお隅さん連れて構はずいつて下さい、多助さんも行つて下さい、旦那様が茲にゐては悪いから歸つて下さい。

惣次郎は歸れたツて歸られませんし、此儘にはされず、怖さは怖しどうしやうかとおどくして居ると、花車はスツと羽織と單物を脱ぎましたが、角力取の喧嘩は大抵裸體のもので、花車は衣服を脱ぐと下には取り廻しをしめてゐる、ウーンと腹を揺り上ると腹の大きさは斯様になります、飴細工の狸みた様で、取廻しの處で、取廻しの處へ銀拵への銅金の刀を帶し白地の手拭で向ふ鉢巻をして飛下りると、ズーンと地響きがする、腕などは松の樹の様で腹を立つたから力は満ちて居る、スーと飛出すと見物人は「ワァー關取しつかりしろ」といふ。安田一角は袴の股立を取つて、安「サア來い。と長いのを振上げてゐる、此の中へ素裸で、花車重吉が飛込むといふところ、一寸一ト息吐きまして。

五十八

引續きまして角力と劍術遣ひの喧嘩で、角力といふ者は愛敬を持ちました者でございまして、只今では開けた世の中でございすから、見識を取りませんで、關取衆が藝者の中へ這入つて甚句を踊り、或は鑼聲で端唄をやるなどと開けましたが、前から天下の力士といふ名があり、お大名の抱へでありますから、だんく承はつて見ますと、菅原家から系圖を引いて正しいもので、幕の内と稱へるは、お大名がお軍の時、角力取を連れて入らしつて旗持にしたといふ事でございます、旗持には力が

要りますので力士が出ます者で、お見附などの幕の内には角力取が五人ぐらゐつゝ勤めて居ります。其の幕の内に居たから幕の内といふ、お辨當を喫つて居るのが小結といふ、さういふ譯でもありますがまいが、見た處は見上げる様で、胸毛があつて膏藥の痕などがあつて怖らしい様であります、愛敬のあるものでございます。一寸起つて踊りますと、重い身體で軽く甚句などを踊りますと姉さん達は、綺麗ぢやアないか可愛いぢやアないか、踊る姿が好い事、あれで角力を取らないと宜い事など、それでは角力でも何でもありません。芝居でも稻川秋津島などいふといふ俳優がいたします、極むかし二段目三段目ぐらゐに立派な角力がありました、花車などは西の方二段目の槌か末から二三枚目にをりました、其頃愛敬角力で最良もあります角力上手でございすから評判が宜い、今に幕の内に登るといふ噂がありました、花車重吉は誠に固い男、殊には羽生村の名主の家に三年も奉公して、角力になりましたからは大して惣次郎も最良にして小さい時分からの馴染で、兄弟分の約束をして酒を飲み合つた事もありますから恩返しといふので割つて中へ這入りました、劍術遣ひは重ね厚の新刀を引抜いて三人が大生郷の鳥居前の所へひらつくのを提げて出ましたから、大概な者は驚いて逃げるくらゐであります、逃げなどはいたしません、ズツと出て太い手をつけて斯う拳を握り詰めますと、力瘤といふのが腕一ぱいに満ちます、見物は今角力と劍術遣ひとの喧嘩があるといふので近村の者

まで喧嘩を見に参る、田甫の處畦道に立つて踏上つて見てゐる。花「先生此處は天神前で、私はお前さんと喧嘩する事は、斯うなつたからは私は引くに引かれぬから、お前さん方三人に掛られた其の時は是非が無え事ぢやが、御朱印付の天神様境内で喧嘩してもお前さんも立派な先生、私も角力の端くれ、事譯知らぬ奴ぢや、天神様の社内を穢した物を知らぬといはれてはお互に恥ぢや、ねエ死恥かきたくねえから鳥居の外へ出なせえ。是は理の當然で、安「うん宜しい、よく覺悟して……鳥居外へ参らう。と三人出たから見物は段々後へ退る、抜刀ではどんな人でも退る、豆藏が水を撒くのは違ふ、怖かないからはらはらと人が退きます。見物「どうだ本當に力士でえ者は感心ぢやアねえか、たつた一人に三人掛りやアがつて、大概に彼奴勘辨しやアがるが宜い、何だいと詫言したら恥ぢやアあるめえし畜生、關取確かりやつて、已アお前の角力を見に來たので、お前が喧嘩に負けると江戸へ歸れねえ、冗談ぢやアねえ劍術遣ひを踏殺せ。安「何だ。見物「危険だ、確かりやつて呉れ。花「逃げも隠れもしねえ、長崎へ逃げやうと仙臺へ逃げやうと花車重吉驅落は出來ぬから卑怯な事はしねえが、茲でお前さんに切られて死ねばもう湯も茶も飲めません、喧嘩は緩くら出來ますから一服やる間暫く待つて。安「なに、これ喧嘩する端に一服やるなどと、何だ愚弄するな。花「心配ありません末期の煙草だ、死んだら呑めませんワ、一服やりませう、誰か火を貸しておくんなせえ。見物の中から煙草

の火をあてがふ奴がある。パクリ／＼脂下りに呑んで居る。花「まア緩くりやりませう、エ先生逃げ隠れはせぬぜ。とパクリ／＼と吸つて居る。見物は、見物「氣が長えぢやアねえか、喧嘩の中で煙草を呑んで沈着いて居る豪えぢやアねえか。見物「豪えばかりでねえ、己の考へぢやア關取は伶俐だから、對手は劍術者遣で危ねえから怪我アして詰まらねえ、關取が手間取つてゐるうち、法恩寺村場所へ人をやつたらうと思ふ、若しさうだと二十人も角力取が押て來れば踏潰してしまふ、さうだらうよ。花「サア先生、喧嘩いたしますが、私も一本帯してゐるから劍術は知らぬながらも切合をいたすが、私が鞘を拂つてからお前様方斬つてお出でなせえ。安「尤も左様だ、卑怯はしない、サア出る。花「へエ出ます、まア私も此近邊で生立つた者ぢやアが、此の大生郷の天神様の鳥居といつたら大きな者ぢやア。と見上げ、花「これまア私が抱へても一拘へある鳥居、此の鳥居も今日が見納めぢやア。と鳥居を抱へて、花「大きな鳥居ぢやアないか。と金剛力を出して一振すると恐ろしい力、鳥居は笠木と一文字が諸にドンと落ちた。劍術遣ひが一刀を振上げて居る頭の處へ眞一文字に倒れ落ちたから驚きましたの驚きませんのと、膽を挫がれてパツと後へ退る。見物はわい／＼いふ。其勢ひに驚きどのくらゐの力かと安田は逆も敵はぬと思つて抜刀を持つてばら／＼逃げると、彌次馬に、農業を仕掛けて居た百姓衆が各々鋤を持つて、百姓「撲殺してしまへ。とわい／＼騒ぐから、三人の劍客者は

雲霞と林を潜つて逃げました。

五十九

花車「ハ、逃げやアがつた弱え奴だ、サア案じはねえ、私が送つて行ませう。と脱いだ衣服を着て煙草入を提げ、惣次郎を送つて自分は法恩宇村の場所へ歸つた。角力は五日間首尾能く打つて歸る時に花「鳥居の笠木を落したから、旦那様鳥居を上げて下さらんで困る。と云ふので惣次郎が金を出して鳥居を以前の通りにしました、其の鳥居は只今では木なれども花車の納めました石の鳥居は天神山に今にあります。場所をしまつて花車は江戸へ歸らんければならんから、歸つてしまつた後は惣次郎は怖くつて他へは出られませんが、安田一角は喧嘩の遺恨、衆人の中で恥を掻いたから惣次郎は助けて置かぬ、などと嚇しに人に逢ふと喋べるから怖くつて惣次郎は頓と外出を致しません、力に思ふ花車がおろないから村の者も心配してをります。餘り家に許り整してをりますから、母も心配して、惣次郎が深く言交した女故間違も出来、其の女の身の上はどうかと聞くに、元武士の娘で親父もろ共浪人して水街道へ来て、親の石塔料の爲奉公してゐると聞き、其頃は武士を尊ぶから母は感心して、然ういふ者なれば金を出して、當人が氣に適つたならどうせ嫁を貰はんでならんから貰ひ度いと、水街道の

麴屋へ話してお隅を金で身受して家へ連れて来てまづ様子を見るとしとやかで、器量といひ、誠に母へもよく事へます故、母の氣にも適つて村方のものを聘んで取極をして、内祝言だけを濟まして内儀になり、翌年になりますと、丁度この眞桑瓜時分下總瓜といつて彼方は早く出来ます。惣次郎の瓜畑を通り掛つた人は山倉富五郎といふ座光寺源三郎の用人役であつて、放蕩無頼にして親には勘當され其座光寺源三郎の家は潰れ、常陸の國に知己があるから金の無心に行つたが當は外れ、少しでも金があれば素より女郎でも買はふといふ質、一文なしで腹が空つて怪しい物を着て、小短いのを帯して心の出た二重廻りの帯をしめて暑くて照り付くから頭へ置手拭をして時々流れ川の冷たい水で冷して載せ、日除に手を出せば手が熱くなり、腕組をすれば腕が熱し、仕様がなくぶらりと参りました。富「あゝ、進退茲に谷まつたなア、どうも世の中に何がせつないといつて腹の空るくらゐせつない事はないが、どうも鳥目がなくなつて食へないと猶更空るねえ、天草の戦でも、兵糧責では敵はぬから、高松の水責と雖も彼も兵糧責、天草でも駒木根八兵衛、鷲塚忠右衛門、天草玄札などといふ勇士がゐても兵糧責には叶はぬ、あゝ大きな聲をすると腹へ響ける、大層眞桑瓜がなつてゐるなあ、眞桑瓜は腹の空いた時の凌ぎになる、腹に溜る物だが、うつかり取る處を人に見られれば、野暴の刑で生埋にするか川に簀巻にして投げ込まれるか知れんから一個揉ぎつて食ふ事も出来ぬが、大層なつて熟してゐる

けれども、眞桑瓜を黙つて持つて行くはよろしくないといふが、一寸此處で食ふ位の事は何も野暴しでもないからよからう、一つ揉ぎつて食はうか、と怖々四邊を見ると、瓜番小屋に人もゐない様だから、まア好い鹽梅と腹が空つて堪らぬから眞桑瓜を食しましたが、庖丁がないから皮ごと喫り、空腹だから續けて五個ばかり喫べ、それで往けば宜しいのに、先へ行つて腹が空つてはならんから二つ三つ用意に持つて行かうと、右袂へ二つ左袂へ三つ、懐から背中へ突込んだり何かして、盗んだなりかう起つと、向の畑の間から百姓がに、こりと出た時は驚きました。百姓「何んだか、われは何んだか富「へエ、誠にどうも厳しい暑さでお暑い事。百「此野郎め、まア生空遣やアがつて、此處を瓜の皮だらけにしやアがつた、汝瓜食つたな。富「どう致しまして、腹痛でございませうから押へて少し屈んでをりましたが、暑氣に中つてをりますので、先から瓜の皮はありますが、取りは致しませぬ。

百「此野郎懐へ入れやアがつて、生空つかやアがつて、瓜盗んでお暑うございませうなどと此野郎ボカリ撲倒しますと、富「あ痛たゝ。と躓ける途端に袂や、懐から瓜が出る。其内に又二三人百姓が出て来て、忽ち山倉は名主へ引かれ、間が悪い事に名主の瓜畑だから八釜しく、庭へ引かれ、麻繩で縛られますと、廢せばよいに名主惣次郎は情深い人だから縁側へ煙草盆を持ち出して參つて、惣「此奴かノ眞桑瓜を食つたのは。男「へエ此野郎で、草むしりに出てをりますと、瓜畑の中から、こりと起

ちアがつたから、何するといつたら厳しいお暑さなんてこきアがつて、誰もゐやすめえと思つて、瓜の皮があるから盗んだんべえと撲つと、懐からも袂からも瓜が出たゝ何處の者か江戸らしい言葉だ。惣「お前が眞桑瓜を盗んだか。

六十

富「へエ、恥入りました事で、手前主名は明し兼ねますが、胡亂と思召すなれば主名も申し上げまするが、手前事は元千百五十石を取つた天下の旗下の用人役をした山倉富右衛門の倅富五郎と申す者主家改易になり、常陸に知己がある爲是へ金才覺に參つて見るに、先方は行方知れず、餘儀なく、旅費を遣ひ果してより、實は食事も致しませんで、空腹の餘り悪い事とは知りながら二つ三つ瓜を盗みたべました處をお咎めで、何とも恥入りました事で、武士たる者が繩に掛り、此上もない恥で、どうか憫然と思召してお許し下されば、此後は慎みまする、どうかお情をもつてお許しを願ひたく存じます。惣「眞桑瓜を盗んだからといつても何も殺しはしない、眞桑瓜と人間とは一つにはならん、殺しはせんが、茲で助けても、是から何處へ行きなさる、當所がありますかえ。富「へエ、何處といつて當も何もないので、といつてすこゝ江戸表へ立歸る了解もございませぬ、空腹の餘り悪いと

知りながら斯様な事をして恐れ入ります。惣「ちやア茲で許して上げてても他へ行つて腹が空るとまた盗まなければならん、私の村で許しても外では許さぬ、今度は簀巻にして川へ投げ込み、生埋にするか知れぬから、私が茲で助けても親切が届かんで話らん、お前さんの言葉の様子では武家に相違ない様だが、私の處は秋口で書物などが忙がしいが、どうだね、許して上げますが、私の家に恩報しと思つて半年ばかり書物の手傳ひをしてゐて貰ひ度いがどうだね。富「へエどうも恐入りました事で、斯様などうも罪を犯した者をお助け下さるのみならず、半年も置いてお養ひ下さるとは、何ともどうも恐れ入りました、此の御恩は死んでも忘却は致しません、何の様なる事でも實に寝る眼も寝ずに致しますから、何卒お助けを願ひます。惣「よろしい、繩を解け。と解かしまして、惣「お腹が空いたらう、サア御膳をお喫り。とサア是から富五郎が食つたの食はないのつて山盛にして八杯ばかり食置をする氣でもありませんが澤山食へました。書物を遣らして見ると帳面ぐらゐはつけ、算盤も遣り調法でべんちやらの男で、百姓を武家言葉で嚇しますから用が足りる、黒の羽織なぞを貰ひ一本帯して居る、其のうち、富「古い袴が欲しい、小前の者を制しますには是でなければなどべんちやらをいふ。惣次郎の顔があるから富さん〜と大事にする、段々臂が暖まると増長して、素より好きな酒だから幾ら止めるといつても外で飲みます。すると或日の事で、つぶろくに酔つて歸ると、

惣次郎はをりません。母は寺参りに往つてお隅が一人奥で裁縫をしてゐる。富「只今歸りました。隅「おやまア早くお歸りで、今日は大層酔つて何處へ。富「へエ、水街道から戸頭まで、早朝から出まして一寸歸りに水街道の麴屋へ寄りましたら能く來たといふので、彼の麴屋の亭主が一杯といふので有物で馳走になりましたに遅くなりました。隅「大層眞赤に酔つて、旦那様はまだお歸りはありますまい、お母様は寺参りに。富「左様で、御老體になりますとどうもお慕参りより外樂みはないと見えて毎日いらつしやいますか恐入ります、また旦那様の御様子でえなねえ、誠にド、どうも恐入りますねえ、あんたはお家で柔和しやかに裁縫をなすつていらつしやるは、どうも恐入りますねえ。ド、どうも富五郎どうも頂きました。隅「大層眞赤になつて些とお寝みな。富「中々寝度くない、一服頂戴、お母様はお寺参り、また和尚さんと長話し、和尚様はべらべら有難さうにいひますね、だが貴方がお縫裁姿の柔和しやかなるは實に恐れ入りますねえ。隅「少しお寝みよ、富さん。富「へエ〜寝度くないので、貴方は段々承はると然るべき處の、お高も澤山お取り遊ばしたお武家の様様だが、御運悪く水街道へいらつしやいまして、御親父様がお歿れになつて、餘儀なく斯ういふ處へ入らつて、其内彼いふ杜漏な商賣の中にて貴方が正しく私は武士の娘だといふ行ひを、當家の主人がちやんと見上げて、是こそ女房といふ譯で、此方へいらつたのだが、貴方だつてもまア私の考へが

間違つたか知れんが、武士たる者の娘が何も生涯といふ譯ではなし、此家は眞の腰掛で、詰らんといつては濟みませんが、けれども貴方生涯此家にゐる思召はありますまい、手前それを心得て居るが、拙者も止むを得ず此處にゐる、致し方がないから、半年も助ろ、來年迄ゐるよ、有難うと御生命でね長く居る氣はありません、貴方も眞の當座の腰掛でいらつしやるが口に出せんでも心中に在るね、内祝言は濟んでも別に貴方の披露もなし披露をなさる譯もない、貴方も故郷懐しうございませう、故郷忘じ難し、御府内で生れた者はねえ、然うではございせんかね。隅「それはお前江戸で生れた者は江戸の結構は知つてゐるから、江戸は見度いし懐かしいはね。富「有難い、其のお言葉で私はすっかり安心してしまつた、それがなければ詰らんで、ねえ武士の娘、それそこが武士の娘、手前ども少祿者だけれども、此處にへえつくしてゐるが世が世なればといふ譯だが……お母様はまだ……法藏寺様へお参りに入らしたので……ですがねえ貴方、此家にかう遣つて腰掛けで居るは富五郎心得てをります、故郷は忘じ難し、江戸は懐しうございませう。隅「あいよ、懐しいは當然だわね。

六十一

富「下何うも有難い、それさへ聞けば私は安心致すが、誰でも然うで私も早く江戸へ行き度いが

マアお隅さん 私が少し道樂をして出まして、親類もあるけれども、私が道樂を行つたから私の身の上が定まらんで世話は出來ぬといふので、女房でも持つて、斯ういふ女と夫婦になつたと身の上が定まれば、御家人の株位は買つてくれる親類もあるが、詰らん女を連れて行つては親類では得心しません、是はかういふ武士の娘、かういふ身柄で今は零落て斯う、心底も是々といふので、私が貴方の様なる方と一緒に何すれば親類でも得心致します、お前さんの御心底から器量は好しかういふ人を見立て、來る様になつたら富五郎も心底は定まつた、然うなれば力になつて遣らうといふので、名主株位買つてくれますよ、構はずスーツと。隅「何處へ。富「何處つて、だが貴方ア腰掛けて居る、故郷は何うしても懐しうございませう。隅「何だか分りません、一つ言をいつて故郷の懐しい事は知れて居ります。富「まア、宜しい、それを聞けば宜しい一寸く。隅「何だよ。富「いゝぢやアありませんか二人でズーツと。隅「いけないよ、其様な事をして。富「それ、然ういふお堅いから二人で夫婦養子にどんな處へでも可なり高のある處へ行けます、お隅さん。と何と心得違ひをしたか富五郎、無闇にお隅の手を取つて髻だらけの顔へ押付ける處へ、母が歸つて來て、此體を見て驚きましたから、傍にある龜朶を取つて突然ボンと撲つた。富「これは痛い。母「呆れかへつた奴だ。隅「よくお歸りでございまして。母「今歸つて來たが、彼の野郎ふざけ廻りやアがつて、富五郎茲へ

出る。富「へエ、これは恐れ入りました、どうも些ともお歸りを知らんで、前後忘却致し、どうも何とも誠にどうも、何で御打擲ですか薩張りません。母「今見ておれば何だお隅にあの舉動は何だ、え、厭がる者を無理にかじり付いて、髯だらけの面を擦り付けて、お隅をどうしやうといふだ、お隅は何だえ、惣次郎の女房といふ事を知らずにあるか、汝知つてゐるか、返答ぶて。富「どうも私前御忘却致し、酔つてをりまして、はつといふとお隅さんで、恐れ入りました、無暗に御打擲で血が出ます。母「頭ア打碎いても構はねえだ、汝恩を忘れたか、此夏の取付に瓜畑へ這入つて瓜イ盗んで生埋にされる處を、家の惣次郎が情深えから助けて、行く處もねえ者に羽織イ着せたり、袴ア穿かして、脇へ出ても富さん〜といはれるは誰がお蔭か、皆惣次郎が情深えからだ、それを惣次郎の女房に對して調戲つて絶付いて、まア何とも呆れて物ういはれねえ、義理も恩も知らねえ、幾ら酔ばらつたつて親の腹へ乗る者ア無えぞ呆れた、酒は飲むなよ好くねえ酒癖だから廢せといふに聽かねえで酔ばらつて歸つて來やアがつて、只た今逐出すから出ろえ、怖ねえ、お前の様な者ア間違を出かします、こんな奴は只た今出て行け。富「お腹立様では何ですが、お隅様は只今の様な事をしたのは富五郎本心でしたと思召しての御立腹なれば御尤もでございます。母「尤もと思ふなら出て行け。富「私は大變酔つてはをりますが富五郎も武士で、御當家の旦那様に助けられた事は忘却致しません、あ

あ有難い事であ、簀巻にして川へ投り込まれる處を助けられ、斯の如く面倒を見て下すつて、江戸へ歸る時は是々すると仰しやつて、實に有難い事で、江戸へ行つても御當家の御恩報じお家の爲になる様心得てをります。母「さう心得てをるなればなぜお隅にあゝいふ舉動エする。富「其處を申します其處が旦那様のお爲を思ふ處、旦那様は世間見ずの方、江戸へも餘り入らした事もない、殊にはあなた様は其通り田舎氣質の結構な方、惣吉様は子供衆で仔細ないが、お隅様も結構な方でございますが、前々承はれば、水街道の麴屋で客の相手に出た方、縁あつて御當家へいらつしやつたが、お隅様のまへで申しては済みませんが、若しお隅様が不實意な浮氣心でもあつては惣次郎様のお爲にもならぬと思つて、どういふ御心底か一寸只今氣を引いた處、どうもお隅様の御心底には實に恐れ入りました、富五郎安心しましたが、處をどうも薪でもつてボンと頭をどうも情ない思召しと思ふ。母「あ云ふ言拔を吐きやアがる、氣を引て見たなど、猶更置く事が出来ねえから出て行け。隅「お母様お腹立でございませう、御氣性だから、富さん、お前は酒が悪いよ、お酒さへ慎めば宜しい、旦那様のお耳に入れない様にするから。富「エ、もう飲みませんとも。母「まアお前彼方へ引込んで、私が勘辨出来ぬ、本當なればお隅が先へ立つて追出すといふが當然だが、かういふ優しげな氣性だから勘辨といふお隅の心根エ聞けば、一度は許すが、今度彼様舉動エすれば直ぐ追出すからさう思へ。富「恐

れ入りました。と是からこそく部屋へ這入つて、と見ると頭に血が染みしました。富「隅は萬更でもねえ了簡であるのに、あゝ太え婆アだ。なに自分が太い癖に何卒してお隅を手に入れ様と思ふうち、ふと思ひ出して胸へ浮んだのは、噂に聞けば去年の秋大生郷の天神前で、安田一角と花車重吉の喧嘩の起因はお隅から、よし彼奴を力に頼んでと是れからべらくくの怪しい羽織を着て、ちよこく横會根村へ来て安田一角の玄關へ掛り、富「お頼み申すく」。

六十二

門弟「どういれ、何方から。富「手前は隣村に居る山倉富五郎と申す浪人で、先生御在宅なれば面會致し度態々参りました、是は此方様へほんのお土産で。門「少々お控へなさい、先生。安田「はい。門「近村の山倉富五郎と申す者が面會致し度いと、是は土産で。安「山倉とは知らぬが、此方へお通し申せ。門「此方へお通りなすつて。富「成程是は結構なお住居で、成程是は御道場ですな……ようがすな御道場の向ふが……丁度是从から畑の見える處が……是はともまた違ひますな。安「さアくはへ、何卒、是はく。富「え、山倉富五郎と申す疎忽者此後とも御別懇に。安「拙者が安田一角と申す至つて武骨者此後とも、えー只今はお土産を有難う。富「いゝえ話らん物で、ほんのしるしで

御笑納下さい、大きに冷氣になりましたが日中は餘程お暑い様で。安「左様で、今日はまた些とお暑い様で、よくお出で、えー何か御用で。富「はい少々内々で申し上げ度い事かあつて、彼の方は御門弟で。安「はい。富「少々お遠ざけを願ひます。安「はい、慶治御内談があつて他聞を憚ると仰しやる事だから、彼方へ行つてをれ、えー用があれば呼ぶから。慶「へえ左様で。富「え、もうお構ひなく、先生お幾歳でです。安「手前だけですか、もういけません、何で、四十一歳で。富「へえお若うげすね、御氣力がお儘かだからお若く見える、頭髮の光澤も好し、立派な惜しい先生だ、此方に置くのは惜しい、江戸へ入らつしやれば諸侯方が抱へます立派なお身の上。安「何の御用か承はり度い。富「手前打明けたお話を致しますが、只今では羽生村の名主惣次郎方の厄介になつてをる者でござるが、惣次郎の只今女房といふ譯でない、まア妾同様のお隅と申す婦人、彼は御案内の水街道の麴屋に奉公致した酌取女、彼の隅なるものに先生思召があつたのですな、前に惚れていらしたのでげすな貴方。安「これは初めてお出で、他人の女房に惚れてゐるなどといや挨拶の仕様がな、麴屋にゐた時分には最良にした女だから祝儀も遣つて随分引張つて見た事もあるのさ。富「恐れ入つたね、それが然う云へぬもので恐れ入りました、其處が大先生で、えーえらい。安「何しにお出でなすつた、安田一角を嘲弄なさりにお出でなすつたか、初めてお出で、左様な事を仰しやる事がありま

すか。富「御立腹ではどうも、中々左様な譯ではない、手前剣道の師とお頼み申し、師弟の契約をした
たい心得で罷出ましたので、實は彼のお隅と申すは同家にゐるから、段々それまア江戸子同士で、打
明けた話をするとお前さん此處に長くゐる氣はあるまい、此處は腰掛だらう、故郷忘じ難からう、私
と一緒に江戸へ、といふと、私も實は江戸へ行き度い、殊に江戸には可なりの親類もあり、假令名主
でも百姓の家へ縁付いたといはれては親類の聞えも悪い、然うなればといつて御新造といふ譯ではな
し、へえ／＼云つて姑の機嫌も取らなければならんから實は江戸へ行き度いといふから、然うなれば
何故一角先生の處へいかぬ、向は何でも大先生、弟子衆も出遣入り、名主などは皆弟子だから、彼處
へ行つて御新造になれば江戸へ行つても今井田流の大先生、彼處の御新造になれば結構だになぜ行か
ぬといふと、夫には種々義理もあつて、親父の借金も名主惣次郎が金を出してくれた恩もあるから、
先生の處へ行かれもしないといふから、それなら先生が斯うと云つたらお前行く氣があるかと云つた
ら、私は行きたいが、先生には色々綾があるから行かれないといふから、然うなれば私が行つて話し
私も江戸へ歸る土産に劍道を覚えて歸りたい、よい師匠を頼まうと思つてゐた處だといふので、然う
なればと頼まれて參つたので、先生彼を御新造になさい、どうでげす。安「お歸んなさい、何だお前
は、これ汝は何だ、惣次郎方の厄介になつてゐる者なれば、惣次郎がどうかして安田を馬鹿にして

遣れといふので来たな、初めて逢つて他人の女房を貰へなどと、はい願ひますと誰がいふ、殊に惣次
郎には、去年の秋聊かの間違で互に遺恨もあり、私も恨みに思つてゐる、其の敵同士の處へ来て女房
に世話をしませうなどと、はい願ひますと誰がいふ、白痴め、歸れ／＼。富「成程是は至極御尤も、
どうもお氣分に障るべき事を申したが、まア。安「騒々しい、歸れつたら歸れ。富「まア／＼重々御
尤も、是には一つの譯がある、ようがすか、手前が打明けた話を致しませう、手前も武士で二言はな
い、手前は本所北割下水で千百五十石を取つた座光寺源三郎の用人山倉富右衛門の倅富五郎、主人は
女太夫を奥方にした馬鹿ですから家は改易、仕方なし、手前は常陸の知己があるから參つたが、ふと
した縁で惣次郎方の厄介、處が惣次郎人遣ひを知らず、名主といふを權にかつて酷い取扱ひをするは
如何にも心外で、手前は浪人でも土民なぞにへえつくする事はない、残念に心得てゐるが、打明話を
致すが、江戸に親類ども、ある身の上、江戸へ歸るにも何か土産がないが、實は今まで道樂をして親
類でも採り上げませんから、貴方の内弟子になつてお側で劍道を教へて頂いて、免許目録を貰つて歸
ると、親類でも今まで放蕩をしても田舎へ行つて、是々いふ先生の弟子になつてと書付を持って歸れ
ば、それが價値になつて何處へでも養子に行かれる、處が、御門人といつても、月々の物を差上げ
る事も出来ません身の上でございますが、それを承知で貴方の弟子に取つて下さるなれば、私は弟

子入の目録代りに、御意に適つたお隅を、御新造に、長鬘斗を付けて持つて來ませう。

六十三

安田「是は面白いぞ、惣次郎といふ主のある者をどうして持つて來られます。富「惣次郎があつてはいけません、惣次郎を一刀に斬つて下さい。安「黙れ、馬鹿をいふな、歸れ、歸れ、汝は惣次郎と同意して手前の氣を引き來たな、うゝん歸れ」。富「これは成程、至極御尤もですが、まア。安「騒々しい行け」。富「ぢやア有體に申します、正直なお話を致しますが、貴方の遺恨ある角力取の花車重吉が來て、法恩寺村の場所が始まるので、去年の禮といふので、明晩になりますと、惣次郎が金三十兩遣ると、ようがすか、用をしまふのは日の暮方まで掛りませう、帳合などを致しますからな、用が終つて飯を食つてはどうしても夜の六つ過になります、其處で三十兩持つて出掛ける、富五郎がお供でけす、すうつと河原へ出て、それから弘行寺の松の林の處へ出て黒門の處までは長い道でございませうから其處へ出て來ましたら、貴方は顔を含んで芒疊の影に隠れてゐて、手前が合圖に提灯を消すと、途端に貴方が出てすぶりと遣り、惣次郎を殺すと金が三十兩あるから持つて宅へ歸り、構はず寝て入らつしやい、まアさお聞きなさい、手前は面部へ疵を付けて歸つて、今狼藉者が十四五人

出て、旦那も切合つて私も切合つたが、多勢に無勢敵はぬ、早く百姓をといふので大勢來て見ると、貴方は宅へ歸つて寝て居る時分だから分らぬてえ、氣の毒なといつて死骸を引取り、野邊送りをしてしまつてから、ようがすか、其後は旦那様が入らつしやりませんでは私がゐても濟みません、殊には彼アいふ處へお供をして、旦那が彼アなれば猶更どうも思ひ出して泣く許りでございませうから、江戸表へといふ、惣次郎が死ねばお隅さんも旦那様がゐなければ此家にゐても餘計者だから私も江戸へ歸るといふ、江戸へ行くなれば一緒にといふので、お隅を連れて來てすうつと貴方の處へ長鬘斗を付けて差上げる工風、富五郎の才覺、惚れた女を御新造にして金を三十兩只取れるといふ、是迄種を明してこれでも疑念に思召すか、えゝどうでけす。安「成程是は面白い、それに相違ないか。富「相違あるもないも身の上を明してかくお話をして、是をどうも疑念でえ事はない、宜しい手前も武士で金打致します……今日はいけません……木刀を帶して來たから今日は金打は出來ませんが、外に何の様な證據でも致します。安「ぢやア明晩酉刻といふのか。富「手前供を致します、彼處は日中も人は通りませんから、酉刻を打つて參り、ふツと提灯を消すのが合圖。安「よろしい、相違なければ。と約束して歸りました。安田一角は馬鹿でもない奴なれども、お隅にぞつこん惚れてゐるから、全く然ういふ了簡で連れて來るのではないかと思ひ、是から胸に包んで翌日仕度をして早くから家を出て、諸

方を廻つて、夜に入つて弘行寺の裏手林芒疊へ蹲んで待つてゐる事とは知りません、此方は富五郎が、お隅を手に入れるに惣次郎が邪魔になります、惣次郎は剣術も心得てをりますから、自分に殺す事が出来ぬから、一角を欺して惣次郎を殺させて後、お隅を連出して女房にしやうといふ企でございます、實に悪い奴もあるものでございます。富五郎は書物が分りませんから眼を通してと、惣次郎へ帳面を見せ、態と手間取るから遅くなりませう。是から夜食を食べて仕度をして提灯を點けて出かけやうとする、何か虫が知らせるかして母親もお隅も遣りたくない、隅「何だか遅いから、明日先方から参りますから今日はお止めなさいな。惣「なアに直ぐ歸るから。隅「さうでございますか、富五郎お前一緒にどうか氣を付けておくれよ。富「へエ大丈夫、どんな事があつても旦那様にお怪我をさせる様な事はございません、手前も剣道を心得てをりますから。と空を遣つて惣次郎の供をして出掛けましたが、笠阿彌陀を横に見て、林の處へ出て参りますと、左右は芒疊で見えませんが、左の方の土手向ふは絹川の流れドウ／＼とする、ほつり／＼と雨が顔にかゝつて来る。惣「富五郎降つて来たやうだ。富「大した事ありません、恐れ入りましたが一寸小用を致しますから。惣「小便をするならば提灯は持つてゐて遣る、これ／＼何處へ行く提灯を持つて行つては困る。といふ中富五郎はふつと提灯を吹消しました。惣「提灯が消えては眞暗でいかぬのう。富「今小用を致しますから。といふ折

から安田一角は大松の蔭に忍んでをりましたが提灯が消えるを合圖にスツクと立つて透し見るに、眞暗ではございますが、見つく長いのを引抜いてかゝ透して居ります。惣「富や、おい富／＼、何んだかこそ／＼して後にゐるのは、富や／＼。といふ聲を當にして安田一角が振被る折から、向の方から来る者がありますが、大きな傘を引擔いで、下駄も途中で借りたと見えて、降る中を此處に來合はせましたは、花車重吉といふ角力取でござります。是からは芝居なればだんまり場でございます。

六十四

引き續きお聞きに入れまするは、羽生村の名主惣次郎を山倉富五郎が手引をして、安田一角と申す者に殺させます。是は富五郎が惣次郎の女房お隅に心底惚れてをりましたも、惣次郎があるので邪魔になりませうから、寧ろかたづけして自分の手に入れやうといふ悪心でござりますが、田舎にゐて名主を勤めるくらゐであるから惣次郎も剣術の免許ぐらゐ取つて居ります。富五郎は放蕩無頼で屋敷を出る位で、少しも剣術を知りませんから、自分で殺す事は出来ません。茲で下手でも安田一角といふ者は剣術の先生で弟子も持つてゐるから、丁度お隅に惚れてゐるのを幸ひ、一角をおひやつて惣次郎を殺し、惣次郎の歿い後にお隅を無理に口説いて江戸へ連れて行つて女房にしやうといふ企みを考へ、や

まで嚇して上手に見えるが田舎廻りの劍術遣ひだから、安田一角が惣次郎より腕が鈍くて、若し惣次郎が一角を殺すやうな事になれば、此の企は空しくなるといふので、惣次郎が常に帯して出ます脇差の鞘を拂つて、其中へ松脂を詰めて止めを致して置きました、實に悪い奴でございませぬ。惣次郎は神ならぬ身の、左様な企を存じませぬから富五郎を連れて、彼の脇差を帯して家を出て、丁度弘行寺の裏林へ掛りますと、富五郎がこそ／＼匍つて行くやうですから、なぜかと思つて後を振り返る、とたんに出たのは安田一角、面部を深く包み、端折を高く取つて重ね厚の新刀を引き抜き、力に任せてブスリ一刀をあびせ掛けましたから、惣次郎もひらりと身を轉じて、脇差の柄に手を掛け抜かうとすると、松脂をつぎ込んでから一日たつて居るので粘つて抜けない、脇差の抜けませんのにいら立つ處を又一刀バツサリと骨を切れるくらゐに切り込まれて、向へ倒れる處を、又一刀あびせたから惣次郎は残念と心得て、脇差の鞘ごと投げ付けました、一角がツと身を交すと肩の處をすれて、薄の根方へづぼんと刀が突ツ立つたから、一角は血を拭いて鞘に収め、懐中へ手を入れて三十兩の金を胴巻ぐるみ盗んで逃げやうとすると、向の方から蛇の目の傘を指し、高足駄を穿いて、花車重吉といふ角力が参りました時には、一筋道で何處へも避けることが出来ません、一角は狼狽して後へ歸らうとすれば村が近い、仕方がないからさつさつと側の薄臺の蔭に身を潜め、小さくなつて隠れて居ります。此方は

富五郎はバツサリ切つた音を聞いて、直に家へ駈けて行く、其の道すがら茨か何かで態と蚯蚓膨れの傷を拵へましてセツ／＼と息を切つて家へ歸り、富「只今歸りました。といふ。處が富五郎ばかり歸つたから悔りして、隅「おや富さんお歸りかい何うかおしかえ。富「へエもう騒動が出来ました、あの弘行寺の裏林へ掛つたら悪漢が十四五人ででて出まして、二人とも懐中の金を出せ身ぐるみ脱いで置いて行けと申しましたから、驚いて旦那に怪我をさせまいと思ひまして、松の木を小楯に取りまして、不埒至極な奴だ、旦那を何と心得る、羽生村の名主様であるぞ、粗相をすると許さんぞといふと大勢で得物／＼を持つて切つて掛るから、手前も大勢を相手に切り結び、旦那も刀を抜いて切り結びまして、二人で大勢を相手にチョン／＼切結んでをりましたが、何分多勢に無勢旦那に怪我があつてはならぬと思つて、やつと一方を切り抜けて参りました、此通り顔に傷だらけにして……早くお若い衆早く／＼と誠しやかにせえ／＼息を切つていひますから、お隅は驚いて、それ早く／＼といふので、村の百姓を頼んで手分をしてどろ／＼押して参りましたが、もう間に合ひは致しません、斬つた奴は疾うに家へ歸つて寝てゐる時分、百姓衆が大勢行つて見ると、情ない哉惣次郎は血に染つて倒れてをりますから、百姓衆も氣の毒に思ひ、死骸を戸板に載せて引き取り、此事を代官へ訴へ、先づ檢視も済み、仕方なく野邊送りも内葬の沙汰で法藏寺へ葬りました。是程の騒ぎで村の者は出掛けて追討の

行方を詮議致し、又四方八方八州の手が廻つたが、殺した一角は横曾根村に枕を高く寝てをりますので容易に知れませんが。惣次郎と兄弟分になつた花車重吉といふ角力は法恩寺村にゐて、場所を開かうといふ處へ此騒ぎがあるのに、とんと悔みにも参りませんから、母も愚痴が出て、母「あゝ家の心棒がなくなれば然うしたもんか、情ないもの、と愚痴たらしく。さうかうすると九月八日は三七日ござります、花車重吉が細長い風呂敷に包んだ物を提げて土間の處から這入つて参りまして、花「はい御免なせい。多「いやお出でなさいまし。花「誠に大分御無沙汰致しました。多「家でもまア何うしたかつてえねえ、一寸知らせるだつたが、家がまア忙しくつて手が廻らないで、まア一人で歩いてることも出来なえから誠に無沙汰しました、旦那様ア殺された事は貴方知つて居るだね。花「誠にまア何とも申さう様はございせんが、知つて居りましたが旦那様とは別懇の間柄だから、私が行つて顔を見ればお母様やお隅さんに尙更敷きを増させるやうな者だから、夫故まア知つてゐながら遅くなりました、多助さん、飛んだ事になりましたね。多「飛んだにも何にも魂消てしまつてね、お内儀様はハア年い取つてるだから愚痴いふだ、花車は内に奉公をした者で、殊に角力になる時前の旦那様の御丹精もあるとねえ、惣次郎とは兄弟ぢやアねえか、それで此の騒ぎが法恩寺迄知んねえ譯ア無え、知つて來ないのは不實だが、それとも知んねえか、江戸へでも歸つた事かとお内儀さんあんな様もございせん、さぞ御愁傷様でございませう。

六十五

たの事をば云つて、たゞ騒いでゐるだ、どうか行つて心が落ち着くやうに氣やすめを云つて下さえ、泣いてばりゐるだからねえ。花「はい、來たいとは思ひながら少し譯があつて遅く参りました、まア御免なせえ。多「さア此方へお這入りといふので風呂敷包を提げたなり奥へ参ります。來てみると香花は始終絶えませぬから其處らが線香臭うございせん、多「お内儀さん法恩寺の關取が参りましたよ。母「やア花車が來たかい、さア此方へ這入つておくんせえ。花「はい、お内儀さん何とも此度は申さう様もございせん、さぞ御愁傷様でございませう。

母「はい只どうもね魂消てばいゐます、お前も知つてゐる通り小せえ時分から親孝行で父様アとは違つて道樂もぶたなえ、こんな堅い人はなえ、小前の者にも情を掛けて親切にする、あゝいふ人がこんなハア殺され様をするといふは神も佛もないかと村の者が泣いて騒ぐ、私もハア此年になつて跡目相續をする大事な件にはア死別れ、それも疊の上で長煩ひして看病をした上の臨終でないだから、何たる因果かと思えましてね、愚痴い出て泣いてばいゐます、それにお隅は自分の部屋にばい這入つて泣いて居るから、此間もお寺へ行つたら法藏寺の和尚様ア因果經といふお經を讀んで聽かせて、因果と

いふ者アあるだから諦めねばなんねえて意見をいはれましたが、はアどうも諦めが付かなえて、只ども魂消てしまつて、どうかまアかういふ事なら父アんの死んだ時一緒に死なれりやア死にたかつたと思えますくらゐで。花「はい、私もねえお寺詣りには度々参ります、それも一人で、實は人に知れない様に参りました、是には深い譯のあることで、私が不實で來ないと思つて定めて腹を立て、お出でなさるとは知つてゐますが、少し來ては都合の悪い事があつて來ませぬ、お前さん私は今まで泣いたことはありません、又大きな身體をして泣くのは見つともねえから、めろ／＼泣きはしませんけれども、外に身寄兄弟もなし、重吉手前とは兄弟分となつて、何んでもお互に胸にある事を打ち明けて話をしやう、力になり合はうといつておくんなさいました、其のお前さん力に思ふ方に別れて、實に今度ばかりは力が落ちました、墓場へ行つて花を上げて水を手向けるときにも、どうも愚痴の様だけでも諦めが付かないでつひはア泣きます、まア何んともいひ様がありません、嗚お前さんには一通りではありますまい、お察し申してをります、お隅さんも嗚御愁傷でせう。母「はい私の泣くのは當り前のことだが、あのお隅は人にも逢はなえて泣いてばいをるから、さう泣いてばいゐると身體に障るから、些と氣い紛らすが宜え、幾ら泣いても生返る譯でなえといふけれども、只彼處へ蹲んで線香を上げ、水を上げちやア泣いてるだ、誠にハア困ります。花「はいお隅さんを一寸茲へお呼びなす

つて下さい。母「お隅やちよつくり此處へ來うや、關取が來たから來うや。隅「はい／＼。母「さア此處へ來や、待つてるだ。隅「關取おいでなさい。花「はいお隅さんまア何んとも申さう様はありません、とんだことになりました、嗚ぞお力落し下さいませう。隅「はい、もうね毎日お母さんと貴方の噂ばかり致しまして、どうしておいでなさいませんか、何かお心持でも悪いことがありはしまいか、よもや知れない事もあるまいが、何か譯のある事だらうと、お噂を致してをりましたが實に夢の様な心持でございましてねえ、それは貴方とは別段に中が好くつてねえ、旦那が毎も疝癢を起しておいでなさる時にも、關取がおいでなさいませと、直に御機嫌が直つて笑ひなさる、かうやつて關取が來ても旦那様がお達者でゐらしたら嗚お喜びだと存じまして、私は旦那の笑顔が目につきます。母「これ泣かないが宜え、さう泣かば病に障るからといふのに聞かなえて、彼の様泣いてばいゐるか、汝が泣くから己がも共に悲しくなる、泣いたつて生返る譯エなえから諦めろといふだ、ねえ關取、花「へエ、御愁傷の處は御尤でございませが、お隅さん、旦那をば何者が殺したといふ處の手掛は些とはございませるか。隅「もう關取の處へ早く行きたいといふのが、御用があつて二日ばかり遅くなりましたから、是から富五郎を供に連れて關取にお目に掛りに参ると仰しやるから、今日は大分遅いから明日になすつたら好からうといつても、是非今日はといつて、どういふ事か大層急いでお出でになり

ました、處が丁度弘行寺の裏林へ通り掛りますと、十四五人の狼藉者が出まして、得物／＼を持って切り付けましたから、旦那はお手利でございますから直に脇差を抜いて向ふと、富五郎も元は武士で劍術も存じてをりますから、二人で十四五人を相手に切り結んだけれども、幾ら旦那が御手練でも向は大勢でございますから、仕方なく、富五郎が旦那にお怪我をさしてはならぬとやつと切り抜け駆け付けて來ました、直に村の若い衆も大勢参りましたけれども、其の甲斐もなくもう間に合ひませんで誠に情ないことでございます。花「ぢやア富五郎さんが一緒に附いて行つて弘行寺の裏林へ掛つた處が十四五人狼藉者が出て取巻いたから、旦那も切結び、富五郎も切り合つたといふ處を誰も見た者はないので、富五郎が歸つて其事を話したのですね。隅「左様でございます。花「うん、富五郎といふ人は内にをりますか。隅「お母さん、今日は富五郎は何處かへ使ひに参りましたか。母「今何まで使に遣つた、何處まで行つたかのう、又水街道の方へ廻つたか知んなえ、ぢき横會根まで遣つたがね。花「御新造さん、留守かえ、そんなら話をしますが、あの富五郎といふ奴は、べちやくちや世辭をいふ口前の好い人だね、實は私はね、人には云はれないが旦那の殺されたばかりの處へ通り掛つた處が、丁度廿五日で眞暗だ、私がつん／＼行くと、向から頭巾を被つた奴が來やアがる様子だから、はて斯んな林に胡散な奴がをる、ことに依つたら盜賊かと思つたから、油斷せず透して見ると、其

奴が脇道へ曲つて、向へこそ／＼這入つて行くから、何でもこれは怪しいと思ふて、急いで來ると、私の下駄で蹴付けたのは脇差ぢや、はて是は脇差ぢやがどうして此處に在るかと思つて、見ると向からワイ／＼とお百姓が來まして、高聲上げて、あゝ情ないもう少し早かつたらこんな事にはならぬ、無慘なことをした、情ないことをしたといふから、こいつしまった、そんなら頭巾を被つた奴が旦那を殺したと思つて、其事を皆の中で話をしやうかと思つたが、旦那と私と深い中のことは知つて居るし、若し角力が加勢をすと思つて、遠く逃げてしまはれたら手掛はないから、是は知らぬ積りで家へ歸つてからは何處へも出ず、外の者にも黙つてろと知らぬ積りでゐるといひ付けて來ずにゐましたが、今日は斯うして脇差を持つて來ました。母「あれまア、どうも不思議なこんだ、殺された處へ通り掛つて脇差を拾つたつて、其の斬つた奴は何様奴だかね。花「お隅さん、それはね此脇差はどうしたのか知れないが、ちよつくり抜けない、私の力でもちよつくり抜けない、何でも松脂か何か附いてると見えて粘ば／＼してるから、ひつついて抜けないが、これは旦那の不斷差す脇差で私も能く知つてをります。母「あれやまアどうも、お前が知つてるのが手に這入るのは不思議だね。

隅「お母様、もう少し關取が早かつたら助かりましたものを。花「此通り抜けない、抜けないから脇差を投げ付けたのを盗賊が置いて行つたか、其處は分らんが、今富五郎が私も切り合ひ旦那も切合つたが、相手が太勢で敵はんといふので駈付けて来て知らしたといふのは、それはどうも私は胡散なことをと思ふ、假令相手が多からうが少なからうが、旦那様が危いのを一人措いて逃げて來るといふ譯はないねえ、さうぢやないか、大切な主人と思へばどこ迄も助けるには側にゐなければならぬ、それを措いて來るとは、怖いから逃げたと思へない、旦那が脇差を抜いて切合つたといふが抜けばいい、ねえ、どうしても抜けない刀を抜いて切合つたといふ道理がないから、どうも富五郎といふ奴が怪しい、といふ譯は、お隅さん去年の秋大生郷の天神前で喧嘩を仕掛けた奴がお前さん麴屋に居た時分お隅さんに惚れて居て冗談をいつた奴がある、處がお隅さんは堅いから、いふ事を聞かんで撥付けたのを遺恨に思うてゐるといふことを知つてゐる、事に依つたら安田一角が旦那を切つて逃げやアしないかと考へた、就ては山倉富五郎といふ野郎は、口前は好い奴だが心に情のない慾張つた奴だから事に依つたら一角にお出でをされて鼻薬を貰うて、一角の方に付いて、彼奴が手引をして殺させやアせんかと思ふ、それ此通り抜けぬのに抜いて切合つたといふのが第一をかしいぢやないか。母「あれやまア其處らには氣が付かんで、只まア魂消てばいゝました、ほんにさうかもしんなえよ、其の頭

巾冠つたのはどんな恰好だつきやア。花「それは暗だから確り分らんが、一角ぢやないかと私の心に浮んだ、斯うしておくんなさい、私は黙つて歸るが、富五郎が歸つたら、今日花車が悔みに來て種々取こんだ事があつて遅くなつた、就ては他へ二百兩ばかり貸したが、どう掛合つても取れないから、どうかして取らうと中へ人を入れたが、何分取れないが、若し富五郎さんが間へ這入つたら向の奴も怖いから返すだらう、若しお前の腕から二百兩取れたら半分は禮に遣るが、どうか催促の掛合に往つてくれまいかと、花車が頼んだが行つて遣らんかといへば、慾張てゐるから屹度遣つて來るに違ひない、法恩寺村の私の處へ來たら富五郎さんといふて富五郎を側に寄せ、腕を押へてさア白狀しい一角に頼まれて鼻薬を貰つて、惣次郎さんを殺したと云へ、どうだ、いはなけりやア土性骨を毆して飯を吐かせるぞ、白狀すれば、命は助けて遣るといつたら、痛いから白狀するに違ひない、實は是れくくくであると思つたら旨いもんでさうしたら富五郎はくりく坊主にして助けても好し、物置へ投げ込んで好いが、愈々一角と決まつたらお隅様は繊細い女、お母様は年を取つて居り、惣次郎様はまだ子供だから私が先へ行きます、一角の處へ行つて、偕て先生大生郷の天神前で、飛んだ不調法を致しましたが何卒堪忍しておくんなさいと只管詫びる、さうすれば斬ることは出來ぬからうつかり近寄る近寄つたら兩方の腕を押へて動かさぬ、さア手前が惣次郎を殺した事は富五郎が白狀した、

敵を取るから覺悟をしると腕を押へた處へ、お前様が来て小刀でも錐でも構はぬからつぶ／＼突ついで一角を殺すが好いどうぢや。隅「本當に有難いこと、嘸旦那様が草葉の蔭でお喜びでございませう、關取私は殺されてもいゝから旦那様の敵を取つて。母「何分にもよろしくねがえます。花「餘り敵と云はないがいゝ、私は先へ歸りますから。と脇差を元の如く包んで歸りました。後へ入り替つて歸りましたのは山倉富五郎、富「へエ只今歸りました。母「富や、大層歸りが遅かつたね。富「なに歸り掛けに法藏寺様へ廻りまして、幸ひ好い花がありましたからお花を手向けましたが、お墓に向ひましてなア、實に残念でございまして、何だか此間まで富／＼と仰しやつたお方がまアどうも、石の下へお這入りなすつたかと存じましたら胸が痛くなりまして、嫌な心持で、又家へ歸つて貴方がたのお顔を見ると、胸が裂ける様な心持、佛間に向つて御回向致しますると落涙するばかりで、誠にはや何んとも申さう様もありません。母「まア能く心に掛けて汝が墓参りするつて、嘸草葉の蔭で喜んでゐるベエ。富「どうも別に御恩返しの仕事がありませんから、お墓参りでもするより外仕方がありません、佛様にはお念佛や花を手向けるくらゐで、御恩返しにはなりません、それより外仕方がありません、へエ。隅「あの富さん先刻花車關が悔みに参りましたよ。富「おや／＼左様でござりましたか、へエ成程何うなすつたか、御存じないのかと思ひましたが。母「ナニ知つてたてや、知つてた

けれども早く来て顔を見せたら、深え馴染の中で思出して歎きが増して母様が泣くべえ、それに種々用があつて來ねえでゐた悪く思つてくれるなつて、大い身體して泣いただ。富「さうでせう、兄弟の義を約束した方でございますから嘸御愁傷でせうお察し申します。母「就てねえ、あの關取が他へ金え二百兩貸した處が、向の奴がすりの奴で、返さなえで誠に困るから、どうか富さんを頼んで掛合つて貰えてえ、富さんの口前で二百兩取れたら百兩禮をするてえいふだ、どうだい、歸つたばかりで草臥て居るだらうが、行つて遣つてくろよ。富「へエ成程、關取が用立つた處が向の奴が返さんのですか、なに直ぐに取つて上げませう、造作ありません、百兩……百兩……なアに金なんぞお禮に戴かぬでも御懇意の間でげすから直ぐに行つて参ります。と止せばよいのに黒い羽織を着て、一本帯して、ひよこ／＼遣つて來ましたのが天命。富「はい御免なさい、關取のお宅は此方ですか、頼みます／＼。弟子「おーい此處だい。花「これこれ一寸此處へ來い、富五郎といふ人が來たら奥へ通して己が段々掛合ひになるので、切迫話つて彼奴が逃げ出すかも知れないから、逃げたらば表に二人も待つて、逃やがたら生捕つて逃がしてはならぬぞ、え、初めは柔和な顔をして掛合ふから。弟子「逃げたら襟首を押へて。花「こう／＼そんな大きな聲を、此方へお這入りなさいといへ。

六十七

弟子「此方へお這入んなさい。富「御免を蒙ります。花「さア富さん此方へ、取次も何もなしにづかづか上つて好いぢやないか、さア此方へ来て下さい。富「えー其後は存外御無沙汰を、えー毎も御壯健で益々御出精で蔭ながら大悦致します、關取は大層評判が好うげすから場所が始まりましたら、是非一度は見物致さうと心得ておました、御案内の通りさんぐの取込で、つい一寸の見物も出来ません、併し御評判は高いものでございます、昨年から見ると大した事で、お羨ましく、實に關取は身體も出来て入らつしやるし、殊には角力が巧手で、愛敬があり、實に自力のある處の關取だから、今日の下開山横綱の許しを取るのあの關取ばかりだといつて居ます。花「餘計な世辭は止して下さい私は餘計な世辭は大嫌ひだから。富「いや世辭は申しません、これは譬への通り人情で、好きなものは一遍顔を見た者には、知らぬ人でも勝たせたいと思ふのが人間の情でげせう、況して旦那とは兄弟分でかうやつて近々拜顔を得ますから、場所中は、どうか關取がお勝になる様にと神信心をしておますよ。花「それは有難い、假令虚言でも日の下開山横綱と云つて貰へば何となく心嬉しい、やア、お茶を上げろよ、さア此方へ。富「關取、さぞ御愁傷で。花「やアお互のことで、嘸お前さんもお力落

しでございませう。富「イヤ此度は實に弱りました、只もうどうも富五郎は兩親に別れたやうな心持が致しますなア。花「然うでございませう、私も實は片腕もがれた様だといひませうか。富「然うでげせう、私も實に弱りましたね。花「就いて富さん、お前さんが供に行つたのだとねえ。富「左様。花「どんな奴でございますえ、切つた奴は。富「それはもう何んとも残念千萬、弘行寺の裏林へ掛ると、面部を包んで長い物をぶち込んだ奴が十四五人でずつと取り巻いて、旦那が金を三十兩持つてゐるのを知つて、出せ身ぐるみ脱いで置いてけといふから、旦那に怪我をさせまいと思つて、旦那を何と心得る、旦那は羽生村の名主様だぞ、若し無禮をすれば引縛つて引くから左様心得るといふと、なに、と突然竹槍をもつて突いて来るから、私も刀を抜いて竹槍を切つて落し、杉の木を小楯に取つてちよんくくくく暫く大勢を相手に切合ひました、すると旦那も黙つてゐる氣性でないから、すり引抜いて一生懸命に大勢を相手にちやんく切合ひましたから、刀の尖先から火が出ました、眞に火花を散らすとはこの事でせう、けれども多勢に無勢と云ふ譬への通りで、逆も敵はぬから、旦那に怪我があつてはならぬと、危い處を切抜けて駆込んで知らせたから、そら早くといふので大勢の若い衆がどつと来て見ましたが、間に合ひません、實に残念で、どうも。花「お前さん供をしたから、嘸残念だつたらうねえ。富「實にどうも此上ない残念で。花「そこで、何んですかい、向は十四五人

で、其内一人か二人捕まへるとよかつたね。富「處が向が大勢でけすから、此方が劍術を知つてゐても、大勢で刃物を持つて切付けから敵ひません。花「ぢやア旦那が刀を抜いて切合つた處をお前さんは見ただらうねえ。富「そりやア見ましたとも、旦那はお手利でけすからちよん／＼／＼切合ひました。花「それに相違ないねえ。富「相違も何もありません、現在私が見てをつたから。花「うん然うかえ、富さん、もつと側へお出でなさい、今日は一杯飲みませう。富「それは誠に有難いことで、時に何かお頼みがあるといふ事ですが早速取立てませう、なに造作もないことで。花「それに付いて種々話があるのだがもつと側へ。富「ぢやア御免を蒙つて。花「さて富さん、人と長く付合ふには嘘を吐いてはいかねえ。富「それは誠に其通り信がなくてははいけませんねえ。花「今お前のいつたのは皆嘘と考へて居る、旦那様が脇差を抜いてちよん／＼切合ひ、お前も切結んだと、そんな出鱈目の事をいはずに正直なことをいつてしまひねえ。富「な何んだ、これは恐れ入つたね、どうも怪しからん事を、ど、どういふ譯でな何んで。花「やい、それよりも正直に、慾に目が眩んで一角に頼まれて恩人の惣次郎を私が手引で殺させましたといつちまひねえ。富「これは怪しからん、怪しからん事があるものだね、關取外の事とは違ひます、私は一角といふ者は存じませぬ、知りもしない奴に假令どの様な慾があつても、頼まれて旦那様を殺せたらうといふ御疑念は何等の廉を取つて左様なこ

とを仰しやる、關取で無ければ捨置けぬ一言、手前も元は武士でござる、何を證據に左様な事を仰せられるか、關取承はりたいな。花「嘘つくない、正直にいつてしまひな、手前が鼻薬を貰つて、一角に頼まれて旦那を引き出したといつてしまへば、命許りは助けてやる、相手は一角だから敵を打てる積りだが、何處迄も隠せば、據なくお前の背骨を毆して飯を吐かしても云はせにやならん。富「これはどうも怪しからん、關取の力で打たれりやア飯も吐きませうが、ど、どういふ譯で、怪しからん、なな、何を證據に。花「そんなら見せてやらう、是は其時旦那の帯して行つた脇差だらう、これを帯して出た事は聞いて來たのだ、さ、どうだ。富「左様どうして是を。花「是を手前が刀を抜いてちよん／＼切合つたといふ後で丁度其側を通り掛つて此の刀を拾うたが、些とも抜けない、此の抜けない脇差をどうして抜いて切合つたかそれを聽かう。富「それア、それア私が轉倒致した。花「何が轉倒した。富「それは私は大勢を相手に切結んでをり、夜分でけすから能く分りませぬが、全く鞘の光を見て拔身と心得ましたかも知れませぬが、私が手引をして……是は怪しからん事でけす、どうも左様な御疑念を蒙りましたは残念に心得ます。花「そら／＼手前のいふことは皆間違つてゐらア、鞘の光を見て拔身で切合つたと思つたといふが、鞘ごと切れば鞘に疵がなければならねえ、芒尖から火花を散らしたといふが鞘ごと切合つてどうして火花が出るい。富「ぢやア全く轉倒致したのです、全く

向同士ちよん／＼切合つて火花が出たのでげせう、大勢の暗撃で向同士……どうも左様な手引をして殺したといふ御疑念は手前少しも覺がございません。花「なに云はなけりア背骨を毆して飯を吐せても云はせるぞ。富「ア、痛い／＼痛うござります、ア、痛い、腕が折れます、ア痛い。花「云つて了へ、云はなければ毆すぞ。富「ア、痛うござります。花「やい能く考へて見る、實は大恩があるのに濟みませぬが、旦那は私が手引をして殺させました、其申譯の爲に私は坊主になつて旦那の追善供養を致しますといへば、お内儀様に命乞をして命だけは助けて遣るから、一角が殺したと云つてしまへよ。富「云つて了へと仰しやつても、あゝ痛い痛うござります、だから私は申しますがね、あ痛い是はどうも恐入つたね、あゝ痛い、腕が折れます、あゝ申します／＼、申しますからお放し下さい、然う手をぐつと關取の力で押へられると骨が折れてしまひますから、ア、痛いどうも情ないとんだ災難でげす、無實の罪といふ事は致し方がないなア、關取能くお考へください、私は恥をお話し致しますよ、昨年夏の取付きでげしたが、瓜畑を通り掛りまして、眞桑瓜を盗んで食ひまして、既に縛られて生埋になる處を、旦那様を通り掛つて助けて家に置いて下さるお蔭で以て、黒い羽織を着て、村でも富さん／＼といはれるのは全く旦那の御恩でげす、其御恩のある旦那を、悪心ある者の爲に手引をして殺させるといふ様な事はどの様なことがあつても覺えはござりませぬが、アア痛たゝゝア、痛うご

ざります、腕が折れてしまひます。花「なに痛い、腕を折らうと脊骨を折らうと己の了簡だ、己が兄弟分になつた旦那を殺した奴を搜して敵を討たにやならぬ、手前一人に換へられないから云はなれア殺してしまふ、それとも殺させたといへば助けて遣るが云はないか此野郎。と松の木の様な拳を振上げて打たうと致しました時には實に驚に捕まつた小鳥の様なもの逃げても退くも出来ません、此時に富五郎がどう言譯を致しますか、一寸一息つきまして。

六十八

富五郎が花車に取つて押へられましたは天命で、己が企みで、惣次郎の差料の脇差へ松脂を注ぎ込んで置きながら、其脇差を抜いて惣次郎がちよん／＼切合つたといふ處から事が顯はれて、富五郎は何といつても遁れ難うございます。殊に相手は角力取り、富五郎の片手を取つて逆に押へて拳を振上げられた時には、どうにもかうにも遁途がありません。表の玄關には二人の弟子が張番をしてゐて、若し逃げ出せば頸を取つて押へやうと待つてをりますから、此時は富五郎が眞青になつて寧ろ白状しやうかと胸に思ひましたが其處は素より悪才に長けた奴。富「關取、御疑念の程御尤も、もうかうなれば包まず申します、申しますからお放し下さい。花「申しますと、云つてしまへばそれでよい。

富「云つてしまひます、是迄の事を残らずお話し致します、致しますが關取、さう手を押へてゐては痛くつて、喋ることが出来ません、かうなつた以上は遁げも隠れも致しませぬ。有體に申すから其手を放して下さい、あゝ痛い。花「云つてしまへばよい、さア残らず云つてしまへ。と押へた手を放しますと、側に大きな火鉢がありました、かん／＼と火が起つてをります。それに掛つてゐる大藥罐を取つて、富「申上げます。といひながら顛覆しましたからばつと灰神樂が上りまして、眞暗になりました。なれども角力取等は大様なもので、胡坐をかいたなり立上りも致しません。花「何をするぞ。といふ内に富五郎は遁出しましたが、悪運の強い奴で、表へ遁げれば弟子が頑張つてゐるから直に取つて押へられるのでございますが、裏口の方から駈出し、畑を踏んで逃げたの逃げないの、一生懸命になつてドン／＼／＼遁げましたが、羽生村へは逃げて行かれませぬから、直に安田一角の處へ駈込んで行つて、富「ハ、ハ、先生／＼。安「なんだ、サア此方へ。富「は……ア水を一杯頂戴。安「なんだ、ナニ水をくれと、どうしたんだ、喧嘩でもしたか。富「いいえ、どうも喧嘩どこではございませぬ、脊骨をどやして飯を吐かせるて實にどうも驚きました。安「誰れが飯を吐いたか。富「なに私が吐くので、先生運好く此處まで逃げたが、もう此處にもをられぬので、直に私は逃げますから路銀を二三十金拜借致し度い。安「どうしたか、さう騒いではいかない。富「どうも先生、これ／＼

でげす。と一部始終の話をしますると、相手は角力取ですから一角も不氣味でございますが、安「然るか、驚くことはない、私が殺したといふ事を云ひはしまい。富「何で……それはいひませぬ、足下とちやんとお約束を致した廉がありますから、假令脊骨をどやされて骨が折れてもそれは云はん、云はぬに依つてこんな苦しい目を致したから、可哀さうと思つて二三十金ください、直に私は逃げますから。安「何んだ、何んにも怖いことはない。富「怖いことはないと仰しやるが、足下知らないからだ、何うも彼双の力は無法な力で、只握られたばかりでもこんなに痣になるのだもの。安「ちやア貴公に路銀を遣るから逃げるがよい。富「足下も早く、直に跡から遣つて來ますよ。安「遣つて來ても云ひさせんければ宜しい。富「理不盡に……。安「幾ら理不盡でも白状せぬのに踏込んでどうかといふ譯にはいかぬ。富「無法に打ちますよ。安「なに打たればせぬ、仔細ない。富「仔細ないと仰しやるが、私の跡を追掛けて來て富五郎はゐるか、匿まつたらう、イエ匿まはぬ、居ないといへばちやア戸棚に居ませうといふので捜しませう、さうで無いにしても表で暴れて家を揺ると家が潰れるでせう、奴の力は大した者だから、やアといふと家に地震が揺つて打潰されて了ひます、何にしても家にゐると面倒だから逃げて下さい、え、先生。安「ちやア路銀を遣るから先へ逃げな。富「逃げるなら一緒に逃げたいものです。安「一緒に逃げては人の目に立つてよくない、己が手紙を一本付けるから之を

持つて、常陸の大方村といふ處に私の弟子があるから、其處へ行つて隠れてをれば知れる譯は無いから、ほとぼりが冷めたら又出て来い、私は一足後から、ナニ暴れても仔細ない、逢ひ度いといへば餘義ない用事が出来て上總へ行つたとか、江戸へ行つたとか、出鱈目を云つてをれば取り附く島が無いから仕方が無い、貴公は先へ行きな。富「ちやア路銀を頂戴、私はすぐ行きます。安「さう急がずに。と落着いて手紙一本書いて、路銀を付けて遣ると、富五郎は其手紙を持つて人に知れぬ様に姿を隠し間道くくと到頭逃げ遂せて常陸へ参りました。安田一角も引續いて逃げる。花車重吉は、花「おのれ逃げやアがつたか。と直に後を追掛けましたけれども、羽生村では此方へは来ないといふから、サテ怪しいと諸方を尋ねたが何分手掛りがありません。一角の様子を聞くと是は私用があつて上總まで出たといふので、頼と手掛りが無い、風を食つて二人とも逃げてしまつたから、もう歸る氣遣ひはないが、安田一角の家は其儘になつて弟子が一人留守番に残つてゐる。どういふ譯か分らぬが何でも怪しいから取つて押へんければならぬが、それには先第一富五郎をどうかして押へなければならぬと心得、花「残念な事をしました、これくこれくで押へた奴を逃げられましたといふと、お隅も母も残念がつて歎きますけれども致方がない。翌月の十月の聲を聞くと、花車は江戸へ参らなければならぬから花車重吉暇乞に来て、花「私はこれくで江戸へ参りますが、何事があつても手紙さへ下されば直に

出て来て方に成つて上げますから、心丈夫に思つてお出でなさい。と二人にいひ聞かして、花車重吉は江戸へ歸りました。跡方は惣吉といふ取つて十歳の子供とお隅に母親と、多助といふ舊來此家にゐた番頭様の者ばかりで、何となく心細い。十一月の三日の事で、空は雪催しで、曇りまして、筑波下しの大風が吹き立て、身を裂れるほど寒うございます。母「あゝ寒いてえ、年イ取ると風が身に沁みるだ、そこを閉つてくろよ、何んだか今年に成つて一時に年イ取つた様な心持がするだ、酷く寒いので、多助やびつたり其處を閉つてくろよ。多「なにあんた、そんなに年イ取つたくといはなえが、若え者でも寒いだ何だかハア雪イ降るばいと思ふ様に空ア曇つて参りました。母「其處を閉つて呉んろよ、お隅は何處へか行つたか。隅「はい。と部屋から着物を着換へ、亂れた髪を撫付け小包を持つて参りましたから、母「このまア寒いのに何處へか行くかい。隅「はい、改めてお願いがござります。

六十九

隅「不思議な御縁で、水街道から此方へ縁付いて参りました處が、旦那様もあゝいふ譯でおかくれに参りました、旦那がおいでならお側で御用を達して、假令表向の披露はなくとも、私は今迄は女房の

心持で働いてをりましたけれども、斯様なつて旦那の後は餘計者で、却つて御厄介になる許りでございますし、江戸には大小を帶す者も親類でもございますから、何卒江戸へ参り度いと思ひまして私もべん／＼と斯うやつて居られません。今の内なら、何うか親類が里になつて縁付く口も出来ませうと思ひまして、私は江戸へ参りますから、どうか親子の縁を切つて、旦那はゐなくなつても貴方の手で離縁に成つたといふ證據を戴きませぬと、親類へも話が出来ませぬから、御面倒でも一寸お書きなすつて、誠に永々お世話さまになりました。母「それはア困りますな、今お前に行かれてしまふと心細えばかりでなく、跡が仕様が無えだ、惣吉は年イ行かなえで、惣次郎のなえ後はお前が何も彼もしてくれただから任して置いて、己アまア家内の勝手も知んなくなつたくれえだね、何うかまアそんなことを云はずに、どうかお前がゐてくれええば困りますから。隅「有難う存じますけれども、どうも居られませぬ、居たつて仕方がありませんもの、ほんの餘計者になりましたから、どうか御面倒でも今日直ぐと歸ります、水街道の麴屋に話をして歸りますから。母「そりやアハヤ間違つた譯ぢやアねえか、お前は今迄まア外の女と違つて信實な者で、己ア家へ縁付いても惣次郎を大切に、姑へは孝養盡し、小前の者にも思はれる位えで、流石お武家さんの娘だけ違つたもんだ、婆様ア家は好い嫁え貰つたつて村の者が誰も褒めねえ者はなえ、惣次郎が無え後も僅かハア夫婦になつた許りでも、

亭主と思えば敵イ打たねえばなんなえて、流石侍の娘は違つた者だと村の者も魂消て、なんとまア感心な心掛けだつて涙ア溢して噂アするだ、今に富五郎や安田一角の行方は關取が探してどんな事をしても草ア分けて探し出して、敵イ打たせるつて是迄丹精したものを、お前がフツと行つてしめえば跡は老人と子供で仕様がなえだ、ねえ困るから何うか居てくんよ。隅「嫌ですなえ、江戸で生れた者がこんな處に這入つて、實に夫婦の情でゐましたけれども、斯うなつて見ると寂しくつてゐられませぬもの、田舎といつても宿場と違つて本當に寂しくつて居られませんからねえ、何卒直に遣つて下さいな、此處に居たつて仕方が有りません、江戸へ行けば親類は武士でございますから、相當な處へ縁付けて貰ひます、私も未ださう取る年でもございませぬから、何時までもべん／＼としてゐられませぬ、お前さんはどうせ先へ行く人、惣吉さんは兄弟といつた處が元をいへば赤の他人でございますからねえ、考へて見ると行末の身が案じられますから。母「ぢやアどうあつても子供や年寄が難儀いぶつても構はなえで置いて行くといふかい、今迄敵イ打つといつたぢやアなえか、今それに敵イ討たなえで縁切になつて行くといふ譯しかんべい、敵イ打つといつた處がなえといふもんぢやア無えか。隅「初りは敵を討たうと思ひましたけれども、誰が敵だか分らぬぢやアありませんか、善々考へて見ますと、富五郎を押へて白狀さして、愈々一角が殺したと決つたら討たうといふのだが、屹度富五郎、

一角といふことも分らず、それも關取が附いておればようございませうが、關取もゐず、してみれば敵が分つても女の細腕で返り討になりませうからねえ、又それ程何方にも此方様に義理はありません、漸く嫁いて半年位のこと、命を捨て敵を討つといふ程の深い夫婦の間柄でもありませんから、返討にでもなつては馬鹿々々しうございませうから、敵討はお止にして江戸へ歸ります。母「魂消たなアまあそれぢやア何だア今迄敵討つと云つたことア水街道の麴屋でお客に世辭をいふ様に、心にもなえ出鱈まへをいつたのだな、世辭だ。隅「いゝえ世辭ではない、關取を頼みにして大丈夫と思つてゐましたが、關取もなければ私は厭だもの、そんな返討になるのは詰りませぬからねえ。母「呆れたよまア、何と魂消たなア、汝がそんな心と知んないで惣次郎が大い金を使つて、家い連れて来て、眞實な女と思つて魅されたのが悔しいだ、さういふ畜生の様な心なら只今出て行けやい、縁切状を書えてくれるから。隅「出て行かなくつて、當り前だアね。多「お隅さんまア待つておくんさえ、お内儀さん貴方が善いから直き腹ア立つがお隅さんはそんな人でなえ、私が知つてゐるから、さてお隅さん、此處なア母様ア江戸を見たこともなし、大生の八幡へも行つたことアなえといふ田舎氣質の母様だから、一々氣に障る事アあるだらうが、實はかういふ事があつて氣色が悪いとか、あゝいふ事をいはれてはならぬといふ事があるなら、私に話しておくんさえ、まア旦那が彼アなつてからは

力に思ふのはお前様の外に誰もないのだ、惣吉様だつて彼の通り眞實の姉様か母様アの様に思つて絶つてゐるし、敵の行方は八州へも頼んで来たから、今に關取が出て来れば手分えて富五郎を押へて敵いたら、大概は一角に違えねえと思つてくらゐだから、機嫌の悪い事があるなら私にさういつてどうか機嫌直してくださいさえ、ねえお隅さん。隅「何をいふのだねえ、お前は何も氣を揉むことはないやね、お母さんも呆れて出て行けといふから離縁状を貰つておくんささい、私は仇打は出来ません、仕方なしに仇を打つと云つたので實は義理があるからさ、よく／＼考へて見れば馬鹿げてゐる、それ程深い夫婦でもありませぬからねえ。多「それぢやアお隅さん、本當に旦那の敵を打つて考へもなえ、惣吉さんもお母様も置いて行くといふのかア。隅「左様さ。多「魂消たね本當かア。隅「嘘にこんなことがいへるものか、今日出て行かうといふのだよ。隅「呆れたなア、そんだけ已えいふが。隅「何をいふの。

七十

多「旦那が麴屋へ遊びに行つた時酌に出て、器量は好し、人柄に見えるが、何處の者だといふと、元は由ある武士の娘で、これ／＼で奉公してをります、外の女ア皆枕付でゐる中に私は堅氣で奉公をし

やうといふんだが、どうも辛くつてならねえて涙ア滯して云ふだから、旦那が惘然だといふので、金えくれたのが初まり、それから旦那が貰え切つてくれべいといった時、手を合せて、誠にさうなれア浮びます助かりますと悦んだぢやアなえか、それに又旦那様ア斬殺されたといふのも、早え話が一角といふ奴がお前に惚れてゐたのを此方へ嫁付いたから、それを遺恨に思つて旦那ア殺したんだ、して見れアお前が殺したも同じ事ぢやアなえか、それを辨へなえてお母様や惣吉さんを置いて出れば、義理も何も知んねえだ、狸阿魔め。隅「何だい狸阿魔とは、失禮な事をお云ひで無い、そりやア頼みもしましたから恩も義理もあるには違ひないけれども、それだけの勤めをして御祝儀を戴いたので當然の事だアね、それから私を貰ひ切つてやるから來い、諾といつて來ただけの事だから、旦那が殺されたつて、敵を討つ程の義理もないぢやアないか、表向披露をした女房といふでもなし、いはゞ妾も同様だから、旦那がゐなけりやア歸りますよ。多「此阿魔どうも助けられなえ阿魔だ、打つぞ、出るなら出る。隅「なんだいで手を振上げてどうする積りだい、怖い人だね、さ打つなら打つて御覽、是程の傷が出来ても水街道の麴屋が打捨つては置かないよ。多「ナニ麴屋……金をくれた事アあるけど麴屋がどうした。隅「此間お寺へ行くといつて、路銀を借やうと思つて麴屋へ行つて話をして、江戸へ行けば親類もありますから、江戸へ行きたいと思ひますが、行くには少し身装も拵へて行きたいから、

まア此處で、三年も奉公して行きますからお願ひ申しますといつて、證文の取極めをして、前金も借て來てあるのだから、是から行つて麴屋で稼ぎ取りをして行かうと思ふのだ、もう私の身體は麴屋の奉公人になつてゐるのだから、少しでも傷が附けば麴屋で打捨つておかないよ、願つて出たら濟むまい、さ、打つなら打つて御覽。多「呆れたア、此奴どうも、お内儀様此間お寺へ墓参りに行く振いして麴屋へ行つて證文ぶつて來たてえ、此阿魔こりやア打てねえ、え、内儀様、義理も人情も、あゝこれエ本當にどうも打てねえ阿魔だ。母「やア、もう宜いワイ、恩も義理も知んなえ様な畜生と知らずに、惣次郎が騙されて命まで捨てる事になつたなア何ぞの約束だんばい、そんな心なら居て貰つても駄目だから、さア此處え來う、離縁狀書えたから持たしてやれ。多「さア持つてけ、此阿魔ア、これエ打てねえ奴だ。隅「持つてかなくつてどうするものか。とお隅は離縁狀を開いて見まして、苦笑ひをして懐へ入れ、隅「有難い、ア、これでさつぱりした。多「ア、さつぱりしたと云やアがる、どうも悪い口い敲きやアがるなア此阿魔。隅「なんだねえ、ぎやア〜おいでない、長々御厄介様になりました、お寒さの時分ですから随分御機嫌よう。多「え、ぐづ〜云はずにサツサと早く行かなえかい。隅「行かなくつてどうするものか、縁の切れた處にゐるつても居やアしない。と悪口をいひながらつか〜と臺所へ出て來ますと、惣吉は取つて十歳、田舎育ちでも名主の息子でございますから、

何處か人品が違ひます、可愛がつてくれたから眞實の姉の様に思つてをりますから、前へ廻つてピツタリ袂に絶つて、惣「姉様ア、お母アが悪ければ己があやまるから居てくんなよ、多助があんなこと云つても、あれは誰がにもしふ男だから、己があやまるから、姉さん居てくんなえ、困るからヨウ。

隅「何んだい、其方へお出でよ、うるさいからお出でよ、袂へ取ツつかまつて仕やうが無いヨウ、其方へお出でツたらお出でよ。多「惣吉さん、此方へお出でなさえ、今迄坊ちゃんを可愛がつたなア、世辭で可愛がつた狸阿魔だから、側へ行かないが好え。母「惣吉や、此處え來う、幾ら絶つても皆世辭で可愛がつたでえ、心にもない世辭イいつて汝が可愛がる振りしたよ、それでも子供心に優しくされりやア、眞實姉と思つて己があやまるから居てくるといふだ、其處えらを考へたつて中々出て行かれる譯のものでアなえ、呆れた阿魔だ、惣吉此處え來い。多「此方いお出でなさえ、坊ちゃん駄目だから。隅「來いといふから彼方へお出でよ、今までお前を可愛がつたのもね、お母さんのいふ通り據なく兄弟の義理を結んだからお世辭に可愛がつたので、皆本當に可愛がつたのぢやアないよ、彼方へお出で、行つておくれ、行かないか。多「あれ坊ちゃんを突き飛ばしやアがる、惣吉さんお出でなさえ……此奴ア……又打てねえ……さつ／＼と行けい。隅「行かなくつてどうするものか。とお隅は土間へ下り、庭へ出まして門の榎の下に立つと、ビュービューといふ筑波嵐が身に沁みます。

隅「あゝもう覺悟をして思ひ切つて愛想づかしを云はなけりやア爲にならんと思つて彼迄にいつて見たけれども、何も知らない惣吉が、私の片袖に絶つて、どうぞ姉さん私があやまるから居ておくれ、坊が困るといはれた時には、實はこれこれと打ち明けて云はうかと思つたが、懲じひ云へばお母さんや惣吉の爲にならんと思つて思ひ切つて、心にもない惡體を云つて出て來たが、是まで眞實に親子の様に私に目を掛けておくんすつた姑に對して實に濟まない、お母さん、其のかはり屹度、旦那様の仇を今年の中に捜し出して、本望を遂げた上でお詫びいたします、あゝ勿體ない、口が曲ります、御免なすつてください。と手を合せ、耐へ兼てお隅がわつと聲の出るまでに泣いてをります。多「まだ立つてやアがる、彼處に立つて惡體口をきいておやアがる。早く行け。隅「大きな聲をするない、手前の様な土百姓に用はないのだ、漸つとサバ／＼した。と故意と口穢いことを云つて、是から麴屋へ來て亭主に此の話をすると、亭「能く思ひ切つて云つた、よし、己がどこ迄も心得たから、心配するな、先づ手拭でも染めて、すぐ披露をするが好い、これ／＼これ／＼拵へて。といふので、手拭等を染めて、残らず雲助や馬方に配りました。亭「今までは違つてお隅は據ない譯があつて客を取らなくつちやアならん、皆と同じに、枕付で出るから方々へ觸れてくれといふと、此の評判がばつとして、今までは堅い奉公人で、殊に名主の女房にもなつた者が枕付で出る、金さへ出せば自由になると

いふので大層客がありまして、近在の名主や大盡が、せつせとお隅の處へ遊びに来ますけれども、中お隅は枕を交しません。お隅の評判が大變になりますと、常陸にゐる富五郎が、此の事を聞きまして、富「しめた、金で自由になる枕付きで出れば、望みは十分だ。と天命とはいひながら、富五郎が浮々とお隅の處へ遊びに参るといふ、これから仇打になりまするが、一寸一息。

七十一

お隅は霜月の八日から披露を致しまして、客を取る様になりました。なれどもお隅は貞心な者でございませすから、能いやうに切り脱けては客と一つ寝をする様なことは致しません。素より器量は好し、様子は好し、其上世辭がありますので、大して客がござります。丁度十二月十六日ちらく雪の降る日に山倉富五郎がやつて参りましたが、客が多いので何時まで待つてもお隅が来ません。其内に追々と夜が更けて来ますが、お隅は外の客で来ることが出来ませぬから、代りの女が時々来ては酌をして参り、其間には手酌で飲みましたから、餘程酒の廻つてゐる處へ、隔ての襖を明けて這入つた人の扮装はじやがらつばい縞の小袖にて、まア其頃は御召縮緬が相場で、頭髮は達磨返しに、一寸した玉の附いた箸を挿し散斑の斑のきれた櫛を横の方へよけて挿してをり、襟には濃つくり白粉を附

け、顔は薄化粧の處へ、酒の相手でほんのりと櫻色になつてをります。帯がじだらくになりましたから白縮緬の湯巻がちらく見えるといふ、前とはすつぱり違つた拵へで、隅「富さん、富「イヤこれはどうも、どうも是は。隅「私やアね富さんぢやないかと思つて、内々見世で斯ういふ人ぢやアないかといふとさうだといふから、早く来たいと思ふけれども、長ツ尻のお客でねえ、今やつと脱けて来たの、本當に能く来たね。富「これはどうも、甚だどうも御無沙沙を、實は其の不慮の災難で御疑念を蒙りました、それ故お宅へ参ることも出来ない、こんな詰らぬ事はないと存じて、存じながら御無沙沙を、只今まで重々御恩になりました貴女が、御離縁になつて、此方へ入らつしやつた事を聞いて尋ねて参りました、どうも妙でけすねえ、御様子がつうつと違ひましたね。隅「お前さんも知つてる通りべんぐとあゝやつてゐたつても、先の見當がないし、そんならばといつて生涯樂に暮せるといつた處が、あんな百姓家で何にも見る處も聞く事もなく、只一生樂に暮すといふばかりぢやア仕様がなから、江戸へ行かうと思つて、江戸には親類があつて大小を帶す身の上だから、些とも早く頼んで身を固め度いと思つて離縁を頼むと、不人情者だつて腹を立て、狐阿魔だの狸阿魔だのといふから、忌ましくしいから強情に無理無體に縁切状を取つて出て来ましたの、江戸へ行くにも、小遣がないもんだから、こんな眞似をして身装も拵へたり、金の少しも持つて行きたいと思つて、遂に斯

んな處へ落ちたから笑つておくんなさい。富「笑ふ處か誠にどうも、なに必ず私は買ひに來たといふ譯ではありませんから、決して御立腹下さるな、そんな失敬の次第ではないが、どういふ譯で羽生村をお出遊ばしたかと存じて御様子伺はうと思つて參つた處が、數獻傾けて大酩酊。隅「まア是から二人で樂々と一杯飲まうぢやアないか、早く來て久し振りで昔話をしたいと思つても、長ツ尻のお客で滅多に歸らぬからいろく心配して、やつとお客を外して來たの、まア嬉しいこと、大層お前若くなつたことね。富「恐れ入ります、あなたの御様子が變つたには驚きましたねえどうも、前とはすつかり違ひましたねえ。隅「さお酌いたしませう。富「これはどうも、まア一寸一杯、左様ですか。

隅「私は大きな物でなくつちやア酔はないから、大きな物でほつと酔つて胸を晴らしたいの、いやな客の機嫌氣襖を取つて、いやな気分だからねえ、富さん今夜は世話をやかせますよ。富「大きな物で、え湯吞で上りますか、御酒は些とを飲らなかつたんですが、血に交はれば赤くなるとか、妙でげすなア、お酌をいたしませう、これは妙だ、どうも大きな物でぐうと上れるのは妙でげすな、是は恐れ入りましたな。隅「私は酔つて富さんに我儘な事をいふけれども、富さん聞いておくれな。富「うゝんお隅さん必ず御疑念はお晴らしなすつて、惣次郎さんを私が手引して殺させたといふので花車の關取が私の背中をどやして、飯を吐かせるといふから、私は驚いて、あの腕前では逆も叶はぬから一生懸

命逃げたんだが、あのくらゐ苦しいことはありません、それ故御無沙汰になつて、あなたが枕附で客をお取りになるといふ事を聞いて、今日口を掛けたのは相済みませぬが、實はどういふ譯かと存じて只御様子を伺ひたいといふので參つただけで。隅「まアそんな事は好いぢやアないか、今夜私は酔ふよ。富「お相手をいたしませう。隅「お相手も何もいるものか。と大きな湯呑に一杯受けて息も吐かずにくつと飲んで、隅「さア富さん。富「私はもう數獻……えお酌でげすか、置注ぎには驚きましたね……それだけは……妙なものでげすな、貴方お酒はもとから上りましたか。隅「なに旦那の側にゐる時分には謹んで飲まなかつたんだが、此家へ來てから戴く様になりました。富「へえ有難う、もう……お隅さんどうか御疑念をね……これだけはどうか……私は詰らん災難で、私が何ぼ何でも、一角は知らない奴、逢つた事もない奴に何で此の如く、な、御疑念が掛るか、私も元は大小を帶した者、此儘には捨置けぬと、餘程争ひましたが、關取が無暗に打つといふから、あの力で打たれては堪らぬから逃げると云ふ譯で、實に手前詰らぬ災難でげして……。隅「好いぢや無いか、私に何も心配はありやアしないやね、羽生に居る時分には、悔しい、敵打をするといふから私も連れてさういつたけれども、もう彼處を出てしまやア、何にも義理はないから私に心配はいらないが、只聞きたいのは富さん忘れもしない羽生にゐる時、お前が酔つて歸つたことがあらう、其時お前が旦那のゐない所で私の

手を掴まへて、江戸へ連れて行つて女房にしてやらう、うんといへば私が身の立つやうにするが、江戸へ一緒に行つて呉れぬかと云つておくれの事があつたねえ、あれは本當の心から出て云つたのか、私が名主の女房になつてたから、お世辭に云つたのか聞きたいねえ。

七十二

富「これは恐れ入りました、こりやアどうも御返答に差支へる……こりやア恐れ入つたね、富五郎困りましたね……おや／＼またいつばいになつた、貴方そばかり置き注ぎはいけません……餘程酔つて居るからもう御免なさい……あれはお隅さん、貴方が恩人の内實になつてゐるから、食客の身として酔つたまぎれで、女房になれ……江戸へ連れて行かうといつたのは實に濟まない……濟まないが、心ないことは云はれん様な者で、富五郎深く貴方を胸に思つてゐるから酔つた紛れに口に出たので、どうも實に御無禮を致しました、どうか平に御免を……。隅「あやまらなくつても宜いぢやアないか、本當にお前が心に思つてくれるといへば嘘にも嬉しいよ、富さん、私もね、何時までもこんな姿をしてゐたくない……江戸へ知れては外聞が悪いからねえ……江戸へ行くつたつて親類は絶えて音信がないし、眞實の兄弟もないから何だか心細くつて、それには男でなければ力にならぬが、かういふ汚れた

た身體になつたから、今更いけない、いけないけれどもお前がねえ、私の様な者でも連れて行つて女房にすると云つておくれなら、私も親類へ行つて、この人も元はこれ／＼のお侍でございましたが運が悪くつてかういふ譯になつたからといつて頼むにも、二人ながら武士の家に生れた者だから、親類へも話が仕好い、よう富さん、本當にお前、私がかういふ處へ這入つたからいけないかえ……前にいつたことは嘘かえ、富「こりやアなんとも恐れ入つたね……旨いことを仰しやるなア……又一ばいになつた、さう注いぢやあいけない……え……本當にそんな事をする氣遣は無い……どうか御疑念の處は……私は困るよ……どうも理不盡に私を疑つて、脊骨をどやすといふから、驚いて、言譯する間は無いから逃げたのだが、神かけて富五郎そんな事はないので……。隅「そんな心配は無いぢやアないか、何だねえ、お前、私がかんな身の上になつてゐても、敵とか何とか云つて騒ぐと思つてるのかえ、私は表向き披露をした譯でもなし、敵を討つといふ程な深い夫婦でもない、それ程も義理はないと思ふから、惡體を吐いて出たのなもの。富「そりや義理はありませうが、私はあなたが、あんな愚痴婆の機嫌を、よく取つてお在でなさると思つてゐました、あなたがこれを出るのは本當でけす、御尤もでけすねえ。隅「だからさ、お前がいやなら仕方がないけれども、本當なら、お前の爲にどんな苦勞をしても、いやな客を取つても、張合があると思つてゐるのさ、それには、判人がないといけ

ないから、お前判人になつて、さうして私が稼いだのをお前に預けるから、私を江戸へ連れて行つておくれな。富「本當ですか。隅「あら本當かつて、私が嘘をいふものかね、憎らしいよ。富「あゝ痛い、捻つてはいけない、さういふ……又充溢になつてしまつた……いけないねえ……だが、お隅さん本當に御疑念はお晴らしください、富五郎迷惑至極だてねえ。隅「どうも、うるさいよ、未だ何處まで疑るのだね、そんなに疑るなら證據を出して見せやうぢやないか、そう、是が羽生村から取つて來た離縁狀と、是はお客に貰つた三十兩あるのだよ、お前が眞實女房に持つてくれる氣なら、此お金と離縁狀を預けるがお前も確な證據を見せておくれよ、富さん。富「本當ですか、本當なら私だつて、親類もあるから、お前さんと二人で行つて、話しをすればすぐだね、そりやア、小さくも御家人の株ぐらゐは買つてくれるだらう、お隅さん本當なら、生涯嘘はつかないねえ。隅「まあ嬉しいぢやアないか、富さん本當かい。富「そりやア本當、隅「有難いねえ、ぢやア證據を見せておくれな。富「別に證據はない。隅「だから悪らしいよ。富「悪らしいつてあれば出すけれどもないもの、ぢやア外に仕方がないから斯うしやう、さう話が進まれば、此處に永く奉公として置きたくないからね、どこまでも金の才覺をして早く江戸へ行かう、富五郎浪人はしてゐても、百や二百の金は直に出來るから。隅「さう、そんなに入らないが、路銀と土産ぐらゐ買つて行きたいねえ。富「かう仕やう。隅「だつて

急にお前に苦勞させては濟まないから、此處で私が二年も稼いでから。富「なに宜い、いゝから、斯うしやう、一角を騙して百兩取らう。隅「おや一角さんは何處にゐるの。富「うん、まあいゝや、お隅さん本當に御疑念の處は。隅「又そんなことを、本當にお前は悪らしいよ、ぢやアお前は一角となれあつて殺したことがあるから、私がどこまでも仇と狙つてゐると疑るのだらう、そんな疑りがあつて、私を女房にしようといふのは餘程分らない、恐い人だね、もう止ませう、書付まで見せて、生涯身を任して力にならうと思ふ人がさう疑つてはお金も書付も渡されないので、止しにさせう。富「さういふ譯ではない、決して疑る譯ではないがね。隅「だからさ疑る心が無ければ、一角さんは何處にゐると云つたつて好いぢやないか、どうして騙して金を取るのか、それをお云ひよ。富「うーんそれは一角がお前に惚れてゐるのだから。隅「さうかい。富「前から惚れてる、それだから一角の處へ行つて、お前がかうくでございませうから貴方御新造にしてお遣りなさい、就ては内證に百兩借金がありますから、之を拂つて遣れば直に此處へ來られる譯だ、出して下さいといへば是非金を出す……いゝえ出るに極つてゐるのだから、出したら借金を拂つてお前と二人で、ねえ、江戸へ行かう、こいつが宜いぢやないか。隅「どうも嬉しいことねえ、一角さんは何處にゐるの。富「うーん、それ。隅「をかしいねえ、もう夫婦になつてお前は亭主だよ、添つてしまつて、今夜一晩でも枕を交せば大事

な生涯身を任せる亭主だもの、前の亭主の敵といつて、双が向けられますか、私も武士の娘、決して嘘はつきませぬよ。

七十三

富「こりやア驚いた、流石は武士の御息女、嬉しいな又充溢になつてしまつた……こりやア有難い、それぢやア云はうねえ、實は私は、お前にぞつこん惚れてゐたが、惣次郎があつては仕様がな、邪魔になるといつても、富五郎の手に負へない、所が幸ひ安田一角がお前に惚れてゐるから、一角をおひやつて弘行寺の裏林で殺させて置いて、顔に傷を拵へて家へ駈込んだが、あの通り花車が感付きやアがつて、打つといふから、此方は殺されては堪らぬから、逃げてしまつた、全く一角が殺したんだが、實は私がおひやつて遣らしたのだ。隅「私もさう思つてたけれどもね、羽生にゐる時は義理だから敵といつてゐたけれども、かう出てしまへば義理も絲瓜もない他人だアね、あんな窮屈な處にゐるのはいやだと思つて出たんだが、富さんかうなるのは深い縁だねえ、どうしても夫婦になる深い約束だよ。富「是は妙なものだ、不思議なもので、羽生村にゐる時から私が眞に惚れ、ばこそ色々な策をして、惣次郎を討たせたのも皆お前故だねえ。隅「一角さんは何處にゐるの。富「一昨日の晩三人

で来て前の家は策で賣らしてしまつたから、笠阿彌陀堂の横手に交遊庵といふ庵室がありませう、二間室があつて、庭も些とあり、林の中で人に知られないからといふので其處を借りてゐて、今夜私に様子を見て来いといふので、私が来たのだから、かうくといへば、えといふので百兩出す、なに大丈夫だ、其れで借金を片付けて行つて了やア彼奴は何ともいへない、人を殺した事を知つて居るから何ともいへやアしないから、烟に巻かれてしまはア、追掛けやうといつても彼奴江戸へ出られる奴でないから大丈夫。隅「さう、本當に嬉しいねえ、眞底お前の了簡が知れたよ。富「これ程お前を思つてゐるのに其れを疑ぐるといふことはない、誠に詰らぬこと……。隅「此處で寝るといけないから彼方へおいでよ、彼方に床が取つてあるから、さ此のお金と書付を。富「やアそんなもの。隅「落こすとすといけないからお出し。と、金と書付を引たくつて、無暗に手を引いて、細廊下の處を連れて行くと、六疊ばかりの小間がありました、其處に床がちゃんと敷いてある。隅「さ、お寝と云つたらお寝、あら俯伏しちやいけないから仰向けにお成り。と仰向に寝かし、枕をさして、隅「さ、寒いから夜具を。富「あゝ有難い、こつちイ這入つて寝なよ。隅「今寝るが、寒いから搔卷を。富「好いよ、雪はどうしたえ。隅「なに雪は降つてゐるよ、夫婦の固めに雪の降るのは縁が深いかいふ事があるねえ。富「うーん、そりやア深雪といふのだ。隅「富さん、私はいふ事があるよ。富「どう。隅「あ

ら顔を見られると恥かしいから被つておいでよ。とお隅は搔卷を富五郎の目の上まで被せて其上へ乗りました。隅「私は馬乗りに乗るは。富「何をそのだ息が出なくつて苦しい、何をその切ないよ。隅「本當に富さん不思議な縁だね、といひながら隠してあつた匕首を抜いて、隅「惣次郎を殺したとは感付いてゐたけども、お前が手引で…一角の隠れ家まで…かういふ事になるといふのは神佛のお引合せだね。富「實に神の結ぶ縁だねえ。隅「斯ういふ事があらうと思つて、私は此上ない辛い思ひをして、恩ある姑や義理ある弟に愛想盡しを云つて出たのも全くお前を引寄せる爲、亭主の敵罰當りの富五郎覺悟しろ、亭主の敵。と富五郎の咽喉へ突込む。富「うーん。といふのを突込んだなり呑口を明ける様にぐツぐツと抉ると、天命とはいひながら惣五郎はばた／＼苦しみました、其儘うーんと呼吸は絶えました様子。お隅はほつと息を吐き、匕首の血を拭つて鞘に納め、隅「南無阿彌陀佛／＼と念佛を唱へ惣次郎の戒名を唱へて回向を致します。お隅は沈着いた女で、直に視箱を取出し事細かに二通の書置を認めて、一通は花車へ、一通は羽生村の惣吉親子の者へ、實は旦那の仇を討ち度い許りで心にもない愛想盡しを申して家を出て、麴屋へ參つて恥かしい身の上になりましたが、幸ひに富五郎が来て、これ／＼の譯と残らず自分の口から申して、一角の隠家もこれ／＼と知れましたから女ながらも富五郎は首尾能く打留めたから、今夜直ぐに一角の隠家へ踏込んで恨みを晴し、本望

を遂げる積り、なれども女の細腕、若し返り討になる様な事があつたならば、惣吉が成人の上、關取に助太刀を頼んで旦那と私の恨を晴らして下さい、敵は一角に相違ない事は惣五郎の白狀で定りましたといふ、關取と母親の方へ二通の書置を残して傍に掛つてゐる湯沸しの湯を呑み、懐へ匕首を隠して庭の方の雨戸を明けると、雪は小降になつた様でもふツ／＼と吹つかける中を跣足で駆出して、交遊庵といふ一角の隠家へ踏込みますといふお隅仇打のお話を次回に。

七十四

申し續きます累ヶ淵のお話で、お隅が交遊庵といふ庵室に隠れてゐる一角の處へ斬り込みますといふ、女ながらもお隅は一生懸命でござりまして、雪の降る中を傘もなしに手拭を冠りまして跣足で駆けて參つて、笠阿彌陀堂から右に切れると左右は雜木山でござります、此山の間を段々と爪先上に登つて參りますと、裏手は杉檜などの樹木がかうかうと生ひ茂つて居ります處へ、門の入口の處に交遊庵の三字を題しました額が掛つてをります。門の締りは嚴重になつてをりますなれども、家へは近うござります、何處か外から這入口はなからうかと横手に廻つて見ても外に入口はない様子、暫く門の處に立つて内の様子を窺つてゐると、丁度一角が寢酒を始めて、貞藏といふ内弟子を

相手にぐびぐびと遣りましたから、門弟も大分酩酊致してをります様子。隅「御免なさいまし、御免なさいまし、一寸此所を明けて下さいまし、あの、先生此方にゐらつしやいますか。といふと戸締りは嚴重にしてあり、近いといつても門から家までは餘程隔つて居りますが、雪の夜で蕭然としてゐるから、遙に聞える女の聲。安「貞藏く誰か門を叩いてゐる様子ぢや。貞「いや大分雪が降つて参りました、私先程臺所を明けたらぶつと吹込みました、どうして中々餘程の雪になりましたから、此夜中殊に雪中に誰も参る筈はございませぬ。安「でも、それ門を叩く様子ぢや。貞「いゝゝ大丈夫、安「いや左様でない……それそれ見ろ……あの通り……それ叩くだらう。貞「へえ成程え、見て参りませう、えゝ少々御免遊ばして、大層酩酊致しました、ひよろく致して歩かせぬ、えゝ少々……なに誰だい、誰か門を叩くかい……誰だい。隅「はい、あの安田一角先生は此方にゐらつしやいますか。貞「安田と、安田先生といふことを知つて来たのは誰だい。隅「はい私は麴屋の隅でございませが、一寸先生にお目に掛り度いと存じまして、わざく雪の降る中を参りましたが、一寸此處をお明け遊ばして下さいませんか。貞「あ、少々控へてゐな。とよろよろしながら一角の前へ来て、貞「へえ先生。安「来たのは誰だ。貞「麴屋の隅が、先生にお目に掛つてお話し申し度い事があつて、雪の降る中を態々参つたといひます。安「隅が来たか、はて、うっかり明るな、えゝ彼は此一角を豫て

敵と附狙ふことは風説にも聞いてゐたが、全く左様と見える、うっかり明けて、角力取などを連れてづかく這入られては困るから能く氣を附ける、えゝ全く一人が、一人なら入れたつても好いが。貞「これ、お隅、何かえ、お前誰か同伴がありますかい、大勢連れてお出でかい、角力取は来ましたのかい。隅「いゝえ私一人でございませぬ、一寸此處を明けて下さいませんか、お前さん貞藏さんぢやアありませんか。貞「なに貞藏、己の名を知つてな、うん成程知つてる譯だ、私が水街道へ先生のお供にいつた事があるから、今明けるよ、妙なもんだなア、おう好い鹽梅にこれ雪が上つて来た、大層積つたなア、おゝおゝふつ、足の甲までづかく踏み込む様だ、待ちな今明けるぞ、待ちな、門がかつて締りが嚴重にしてあるから、や、そら、おや一人で傘なしかい。隅「はい少しは降つてをりましたが、氣が急きましたから、跣足で参りました。貞「おゝく私はやつと此處まで雪を涉つて来たのだが、能く夜中に渡しの船が出たねえ。隅「はい、あの、船頭は馴染でございませぬから、頼んで渡して貰つて、漸とのこと参りました。貞「それはえらい、さア此方へ、先生たつた一人で渡を渡つて跣足で参つたと云ふので。安「それは思ひ掛けない、なに傘なしで、それはそれは、雪中といひ、どうも夜中といひ、一人でえらいのう、誠にどうも、さア此方へ。隅「先生誠に暫くお目に掛りませんで。安「いや誠にこれは、うゝん己は無沙汰をしてをります、暫く常陸へ参つた處が、彼方で些と

門弟も出来たから、近郷の名主庄屋などへ出稽古を致して、久しく彼方にゐて、今度又此方へ来た處が、先に住つた家は人に譲つたから、まア家の出来るまで、当期此の庵室にをる積りで、だが手前能く尋ねて来たねえ。隅「誠にどうも御無沙汰を致しまして。安「此の夜中雪の降る中を踏分けて何うして来た。

七十五

隅「あの今日富五郎が来ましてね、何か先生に頼まれた事があると云つて、私の處へ客になつて来まして、お酒に酔つて何だか種々な事を云ひますの、けれども其の様子がさつぱり分りませんから、其事に付いて先生にお目に掛らなければ様子が分りませんから。安「それはどうも、富五郎が行つたかい、貞藏、富五郎が行つたつて。貞「だから私が先生に申上げて置きました、彼奴は誠にあゝいふ處ばかり遊びに參るのが好きで、全體道樂者でけすからなア、彼奴餘程婦人好きでけすよ。安「で、富五郎が行つて何ういふ話し振だの、まア一杯飲め。隅「有難うございます、まアお酌を。安「イヤ一杯飲め。隅「左様でございますか、貞藏さん、お酌を、恐れ入ります。貞「いや久し振りでお酌をする、私の名を心得てゐるから妙でけすな、久しい前に一度先生のお供を致しましたが、其時逢つた一度で

私の名まで覚えてゐるといふのは、商賣柄は又別なものでけす、お隅さん相變らず美しうございますな。安「これお隅、手前名主の手を切つて麴屋の稼ぎ女になつたとか、枕附で出るとかいふ噂があつたが嘘だらうな。隅「いゝえ嘘ではございません、誠にお恥かしうございますけれどもべん／＼とあゝ遣つてもゐられませんか、種々考へました處が、江戸には親類もありますから、何卒江戸へ參り度いと思ひまして、故郷が懐かしいまゝ無理に離縁を取つて出ましたが、手振り編笠、姑が腹を立つて追出すくらゐでございますから、何一つもくれませぬ、それ故少しは身形も拵へたり、江戸へ行くには土産でも持つて行かなければなりません、それには普通の奉公では埒が明きませんから、いやいやながら先生お恥かしい事になりました。安「オ、左様か、ちやア自ら稼いで苦しみ、金を貯めてなにかい身形を拵へて江戸へ行かうと云ふ譯か、どうも能く離縁が出たのう。隅「それが向で出さないので此方から強情に取りましたので、先生誠に久し振でございますねえ。安「ウンそれは妙だなア。貞「これは先生妙でけすな、貴方の方でお呼び遊ばさぬのにお隅さんが此の雪の降る中を尋ねて来るなんて、自然にどうも貴方の……實に感服でけすなア。安「なにさう云ふ譯でもなからう、何か是には譯があつて来たんだらう、なにかい富五郎がどういふ事を云つたい。隅「はい、富さんの云ふには、べん／＼とこんなア卑しい奉公をするよりも、一角先生の御新造にならないかといひますから、馬鹿

なことをお云ひでない、一旦名主の家へ縁付いたのだから、披露はしないでも、今度行けば再縁をする譯ぢやアないか、それだから先生は決して御新造になさる譯はない、妾にすると仰しやればまだしもの事だけれども、御新造にといふのは訝しいぢやアないかといふと、いゝえ全くお前さへよければ先生は御新造になさる思召しがあるのだから、お前がたつて……頼みたいと思ふなら、骨を折つて宜いやうに執成すから了簡を決めろといひますから、それは誠に思掛ない有難いこと、私の様な者を先生が假令妾でもなすつて下さるなら、私は本當に浮ぶ譯で、べん／＼とこんな處にゐたくないから、屹度執成しておくれかといふと、お酒が始まつて、すると彼の人の癖で直に酔つてしまつて、まア馬鹿らしいぢやアありませんか、先生に取持つ代りにおれの云ふ事を聞けといつて口説き始めたんでございますよ。安「こりア怪からん奴だ、どうだい貞藏。貞」でげすから彼は先生いけません、先生は彼奴を御最眞になさいますが、全體よくない奴で、さういふ了簡還ひな奴でげすからなア、一體先生が餘り最眞になさり過ぎると思つてゐましたが、どうも御新造に取持たうといふ者、いはゞ仲人が一旦自分のいふ事をきかして、それから縁付けると、そんな事がありませうか、だから彼れはもう、お置きなさらん方が宜い、お爲になりませぬからなア、彼奴が來てから私は彼奴に使はれるやうな譯で、先生も彼奴はお止し遊ばした方がよろこびますよ。安「お偶、それからどうしたい。偶」それで、

私が馬鹿な事をおいひでないといふと、そんな話らんことを云はんでも宜いぢやアないかといひますから、宜いぢやアないかつて、お前さんのいふ事を聞いた上で先生の處へ妾に行けるか行けないか考へて御覽、富さん酔ふにも程がある、冗談は大概におしよと云つて居りましたら、終には甚く酔つて來まして、短いのを抜いて、いふ事を聞かなければ是だと嚇し始めましたから、私も勃然として、大概におしなさい、お前は腕づくで強淫をする積りか、馬鹿な事をする怖い人だ、いやだよと云つて行かうとすると、さうはやらぬと私の裾を押へて離さない處へお兼さんやお力さんが出て參りまして取押へる拍子に、お兼さんが指に怪我をするやら、金どもも親指に怪我をしまして、漸くの事で宥めて双物を擡取つたんでございますが、全く先生の處から來たのなら、明日の朝先生が入らつしやるであらう、其上當人も酒が醒めるだらうから、まア縛つて置くが好いといふので縛つて置きました。

七十六

安「こりやアどうも怪しからん、白刃を振つておどすなぞとは、えゝ貞藏。貞」どうも怪しからん、彼奴はいけません、彼奴一體さういふ質の奴でげす、何うも怪しからん、抜刀で口説くなんて、實に詰らん譯でげすなア、だから先生も彼奴はお止しなすつて家に置かぬ方が宜しい、何うもさういふ

……、安「お隅、貴様はなにか主人に話をして来たか。隅「はい何ともいひませんけれども、お力さんに頼んで置きましたして何しろ先生の御様子を聞かなければ分らない、誠に恥かしいことでございますけれども、先生の處へ行つて御様子を聞いて、さうして先生に宥めて戴き度いと思つて出て参りました。安「左様か、雪の夜ではあるし、是から行くといつても大變だがあるな馬鹿にからかはないが宜いよ。隅「なにももう明日でも宜うございますけれど、私は是から一人で歸るのは辛くつて、参る時は一生懸命で来ましたが、歸るとなると怖くつていけません、どうかお邪魔様でも今夜一晩泊めて下さる譯にはいきまますまいか。安「うん、それは宜い、泊つて往くなら、なア貞藏。貞「是は先生御恐悦でげすなア、お隅さんの方から泊つて宜いかと云ふのは、こりや自然のお授かりでげすな。安「なにお授かりな事があるものか、のうお隅、だが貴様にはどうも分らぬことが一つある、といふのは惣次郎の女房になつてどういふ間違ひかは知らんけれども、安田一角が惣次郎を殺害いたしたといふので、私を夫の敵と狙つて、花車重吉を頼んで何處までも討たんければならぬと云つて、一頻り私を狙つて居るといふ事を慥に人を以て聞いた、さう云ふ手前が心で居たものが、また此處に来て、一角の女房にならうとは些と受取れぬぢやないか、のう貞藏。隅「いゝえ、ねえ貞藏さん考へて御覽、羽生村に居るうちは義理だから敵を討つとか何とか云ひましたけれども、なにもねえ元々私が麴屋に奉公を

して居て、あの時分枕付ではありませんが、あの名主に受出されて行つて、妾同様表向の披露をした譯でもなし、ほんの半年か一年享主にしただけでございますから、母親の前や村の人や角力取の前で義理を立て、敵を討つといひましたが、よく／＼考へてみた處が、貴方が屹度したといふことが分りもしない、こんなものないのに敵を討つといつたつて仕方がない譯だから、寧ろ敵討といふ事を止めてしまはう、それにしては何時までもべん／＼としてもおられませんか、思ひ切つて暇を貰つて出たのでございますから、もう今になれば些ともそんな心はありません、ねえ貞藏さん。貞「成程是りやア本當でげせう、先生は人を殺す様な方でないし、只お前さんへ執心があつた處から角力取と喧嘩、ありやア一體角力の方がいけない、變に力があつてねえ、あれだけは先生甚く野暮になりますな。安「詰らん疑念を受けて飛んだ災難と思つたが、此方に居ては面倒だから暫く常陸へ行つて居たんだが、手前全くか。隅「本當でございませうから疑りを晴して一獻戴きませう。安「手前飲めるか。隅「はい、何だか寒くつていけません、跣足で雪の中を駈けて来たもんですから、足が氷の様になつてゐますもの。安「うーん中々飲める様になつたのう。隅「勤をして居て仕方なしに相手をするので上りましたよ。安「ふん妙だのう貞藏。貞「是は是はお隅さん貴方御酒を飲りますか、酌をいたませう。隅「はい有難うございます。と大杯を受けたのをグイと飲んで、隅「貴方何だか眞面目で

いけませんから、私がお酌をいたしませう。と横目でじつと一角の顔を見ながら酌をする。一角は素より惚れてゐる女が酌をしてくれるから、快く大杯で二三杯傾けると下地があつた處でござりますからグツスリ酔が廻つて來ます、貞藏も大變酔酩いたしまして、貞「私もう大層戴きました、お隅さん私は御免を蒙りました、長く斯ういふ處にゐるべきものでありませんから、左様なら先生御機嫌よう隅「まあお待ちなさいよ、先生がお酔ひなすつたから、おや／＼次の方に床が取つてありますねえ。貞「いゝえ私床を取つて置いて、先生がぐつと召上つてしまふと直にお寢といふ都合にして置きました、え、誠に有難う。隅「ちやア先生一寸貞藏さんを寢かして來ますからお床の中に居てねえ、寢てしまつてはいけませんよ。安「なに貞藏などは棄て、置けよ。隅「いゝえ、さうではありません、ひよつとして貴方が私の様な者でも娶んで下さいますと、禍ひは下からといつて、あゝいふ人に胡麻を摺られると堪りませんからねえ。安「なに心配せんでも宜い、ちやア己此處に、なに寢やあせんよ、お酔つた、貞藏隅が送つてやるとよ。貞「いや是は恐れ入ります、ちやア先生御機嫌よう、お隅さんようございます。貞「いゝえ、よくないよ、そら／＼危ない何處へ、彼方がお臺所かへ。と踏る貞藏の手を取つて臺所の折廻つた處の杉戸を明けると、三疊の部屋がござります。隅「さ、貞藏さん此處かえ、おやお床が展べてあるの。貞「いゝえ私の床は參つてから敷つばなしで、いつも上げたことはな

いから、ずつとやるとかう潜り込むので、へえ有難う。隅「恐ろしい堅さうな夜具ですな。貞「ええなに薄つべらでげすが、此上へ布團を掛けます、寒けりや富五郎のがありますから其れを掛けてもいゝので、へえ有難う。貞「さア仰向けにおなり、よく掛けてあげるから。貞「是は恐れ入ります、へえ恐れ入ります、御新造に掛けて戴いて勿體至極もない。隅「さ、掛けますよ、寒いから額まですつかり掛けますよ、さう見たり何かすると間が悪いわね、さ、襟の處を。貞「あゝ有難う。隅「どうも重たいねえ。貞「へえ有難う暖かいです。隅「何だか寒さうなこと、何か重い物を裾の方に押付けると暖かいから。といふので臺所を捜すと醬油樽がある、丁度昨日取つたばかりの重いやつを提げて來て裾の方に載せ、澤庵石と石の七輪を搔卷の袖に載せると、安「ア、有難う、大層暖かです、些と重たいくらいでげす。といつたが是は成程重たい譯、石の七輪や澤庵石や醬油樽が載つてをりますから、當人は押付けられる様な心持。貞「へえ有難う、暖かいです。といつたがりぐ／＼と好い心持に寢付きました。

七十七

お隅はそつと奥の様子を見ると、一角が躑けながら、四疊半の床の上に横になつた様子でございま

すから、そつと中仕切の襖を閉つて臺所の杉戸を締め、男部屋の杉戸を靜に閉つて懷中から出して抜いたのは富五郎を殺害して血に染まつた儘の匕首、此貞藏があつては敵討の妨をする一人だから先づ貞藏から片付けやうといふので、仰向に寝て居る貞藏の口の處へどんと腰を掛けながら、力任せに咽喉を突きましたから、貞「ワッ。といったが搔卷と布團が掛つて居りますから、苦む聲が口籠つて外へ漏れませぬ。一抉り抉ると足をばた／＼とやつたきり貞藏は呼吸が絶えました。お隅はほつと息を吐いて搔卷の袖で匕首の血を拭つて鞘に納め、そつと杉戸を明けて臺所へ来て、柄杓で水をぐつと呑み、はッはッといふ息づかひ、もう是れで二人の人を殺しましたなれども、夫の仇を討たうといふ一心でござりますから、顔色の變つたのを見せまいと、一角の寢床へそつと来て、顔を横にいたしまして、先生々々もうお寝みなすつたか。安「うーん貞藏は寢たか。隅「はい能く寢ました、大層酔ひましてねえ。安「酔つても宜いから、あんな奴に構ふな、寢ろよ。隅「寢ろつて夜具がありません、私は食客でござりますから此處に坐つてゐます。安「そんな詰らぬ遠慮にはおよばぬ、全く疑念が晴れて、己の女房になる氣なら眞實可愛いと思ふから手前に樂をさして眞實を盡すぞ、隅「誠に有難いこと、勿體ないけれども、そんなら此の搔卷の袖の方から少し許り這入りまして。安「いや少し許りでなくつて、たんと這入れ。隅「それぢやア御免なさいまし。と夜着の袖をはねて、懷中か

ら出した匕首を布團の下に挿んで、足で踏んで鞘を拂ひながら、隅「ぢやア御免遊ばせ、横になりすから。安「さア這入れと一角が夜着の袖を自ら揚げる處を、隅「亭主の敵と死物狂ひに突掛るといふ。お話二つに別れまして麴屋では更に斯様な事は存じません。曉方になつてお隅がゐない處から家の中捜しても居ない、六疊の小間が血だらけになつてゐるから搔卷を撥ると、富五郎が非業な死に様、傍の處に書置が二通あつて、これにお隅の名が書いてあるから、亭主は驚きまして、直に是を開いて讀んで見ると、富五郎の白狀に依つて夫の敵は一角と定まり、女ながらも富五郎は容易く仕止めたから、直に一角の隠れ家交遊庵へ踏込んで、首尾よくいけば立歸つて参りますが、女の細腕、若し返り討になりました時は、羽生村へ話をして此の書置をやり、又關取へも便りなすつて惣吉成人の後關取を頼んで旦那と私の敵を討たして下さい、證據は富五郎の白狀に依つて手引をした者は富五郎、斬つた者は一角と定まりました、夫故に今晚交遊庵に忍び入ります、永々お世話様になりました、有難い。といふ重ね／＼の禮まで書残してあるから、それツといふので、麴屋の亭主は大勢の人を頼んで恐々ながら交遊庵に参つたのは丁度夜の曉方、参つて見ると戸が半ば明いて居ります、何事か分りません小座敷には酒肴が散かつて居り、四疊半の部屋に来て見ると情ない哉お隅は返り討に逢つて非業の死に様。主「あゝ氣の毒なこと、可哀さうに、でも女一人で往くのは實に不覺であつた。もう今更どう

も仕方が無いが一角はといふに、一角は此處を連れて行方知れず二疊の部屋を明けて見ると澤庵石だの、醬油樽だの七輪の載せてある夜具の下に死んで居る者が一人ござりますから、是から直に麴屋から儘に證據があつて敵討をしようと思つて返討に成つたといふ事を訴へになり、直にお隅の書置を羽生村へ持たせて遣りました時には、母も惣吉も多助も「ア、左様とは知らずに犬畜生の様な恩知らずの女と悪んだのは悪かつた、あゝいふ愛想盡しをいつたのも、全く敵が討ちたいばかりでお隅が家を出たのであつたか、憫然なことをしたが、お隅が心配して命を棄てたばかりに敵は一角と定まり先づ富五郎は討止めたが、一角の爲に返り討になつて死んだといへば悪いは一角、早く討ち度いと思ひまするが、何しろ年を取つた母と子供の惣吉ばかりでございますから、關取を頼んど、もう名主役も勤まりませんから、作右衛門といふ人に名主役を預けて置き、花車重吉が上總の東金の角力にいつたといふことを聞きましたから、直に其所に行かうといふので旅立の支度をいたし、永く羽生村の名主をいたして居りましたから金は随分ござります、これを胴巻にいれたり、襦袢の襟に縫附けたり、種にいたして旅の用意をいたします、其内に荷拵へが出来ると、これは作右衛門の藏へ運んで預けると云ふ譯で、只今まで名主を勤めて盛んであつたのが、ばつたり火の消えた様でござります。

七十九

母「多助や。多「へエ。母「作右衛門が處へ行つて来たかい。多「へエ行つて参りました、藏の方にや預かる者があるから心配しなえが好え、何時でも歸つたら直ぐに出すばいて、藏の下は濕るから濕なえ高え處に上げて置くばいといつてね、作右衛門どもも舊來の馴染ではア何うか止め度いと思ふが敵を討ちに行くてえのだから止められねえツて名残イ惜がつてるでが、村の者もねえ皆御恩になつたゞから渡口まで送りてえといつてますが、あなたさういふから年い取つた者ア來ないで好えといつて置きました、私だけは戸頭まで送りてえと思つて支度ウしました。母「汝も送らなえで好えから若え者を止めて呉んろよ、汝が送ると若え者も義理だから戸頭まで送りばいと云つて來るだ、さうすりやア送られると送られる程名残イ惜いから、汝も送らなえでも好いよ。多「だけんどもはア村の者は兎も角も私はこれ十四歳の時から御厄介になつて居りまして、お前様のお蔭でこれ種々覺えたり、此頃ぢやアハア手紙の一本位書ける様になつたの、前那の御厄介でが、お家がかうなつて遠い處え行くてえこつたら私も附いて行かないばなんねえが、婆様ア鹽梅が悪うござえまして、見棄てちやアなんなえといふから、あなたのお心へ任して送りはしねえが、せめて戸頭まで送り

てえと思つて居ります、塚前の彌右衛門どんは死んだかどうか知んねえが、通り道から少し這入るばかりだから、ちよつくり塚前へも寄つたが宜い。母「それもどうするかも知んねえが、汝は送らなえが好いよ。多「でも戸頭まで送るばいと思つて居ります。母「送らんでえいといふに何故さうだから、汝ア死んだ爺様の時分から随分世話も焼かした家の用も能く働いたから、何ぞ呉れてえと思ふけれども何も無えだ、是ア惣次郎が居る時分に祝儀不祝儀に着た紋附だ、汝も是れから己ア家が無くなれば一人前の百姓に成るだから、祝儀不祝儀にやアかういふ物も入るから、此紋附一つくればいと云ふ譯だよ、それから金も澤山呉れてえが、茲に金が七兩あるだ、是ア少し譯があつて己が手許にあるだから是を汝がにくればい、此納綿ア餘り良くなえが丹精して捻をかけて織らした納綿で、ちよく阿彌陀様へお参りに往つたり寺参りに着ていつた着物だから、是を汝がに呉れるから仕立直して時々出して着るが好え、三日でも旅といふ譬へがあるが、子供を連れて年寄が敵討に行くだから、一角の行方が知んなえは何時歸つて来るか知んなえ、長え旅で死ななえともいはれなえ、是ア己が形見だから、己が無え後も時々これを着て己がに逢ふ心持で永く着てくるよ。多「はい、私戸頭まで送るばいと思つたに……どうも是れいりません……形見……形見なんて心細えことはいはずにの、あんたも惣吉さんも達者で歸つて、もう一度名主役を惣吉さんが勤めなえば私の顔が立ちませんから、

どうか達者で歸つておくんねえよ、惣吉さん今迄と違ふから、母様に世話ア焼かせねえ様に、母様ア大事にしなえばなんねえよ、惣吉さん、好いかえ、今迄の様だ、いつちやアなりませんよ、いいかえ、どうか私は戸頭まで。母「送らんで好えといふに汝が送るてえば皆若え者も送りたがるから、誰か来たぢやなえか。作「へエ御免。多「やア作右衛門どんが。母「さア此方へお這入りなえ。作「誠にどうも、魂消て、どういふ譯で急に立つことになつたか、村の者もどうか止めてえといふから、馬鹿アいふな、止められるもんか、今度ア物見遊山でなえ、敵討に行くだといふと、成程それぢやア止められねえが、まア名残惜い惜いつてね、若え者は皆恩になつて居るだから心配ぶつてをります、留守中は役にア立たないがお歸りまでア慥に荷物皆藏へ入れて置きました、何卒まア早く歸つてお出でなさる様に願えてえもんで。母「はい、お前方も舊い馴染でがんしたけんども、今度が別れになります、はい有難うござえます、多助や誰か若え者が大勢来たよ。多「やア兼か、さア此方へ這入れ、お、太七郎此方へ。太「はい有難う、誠にまアどうも明日立つだつて、魂消て来たでがんです、どうもこれ名残惜い惜いつて渡口まで送るといふ者が澤山ござえます。母「ありやまア、送らねえでも好えよ、用がえれえに。太「なに用はなえだから皆送りてえと思えまして、名残惜いが寒い時分だから大事にしねえ。母「はい有難う、又祝ひの餅い呉れたつて氣の毒なのう、どうか婆様ア大事にして。

太「へエ婆アもどうかお目に掛りたえといつてをります。母「お、誰だい、さア此方へ這入りな。

甲「へエ、誠にはア、魂消まして、どうかまア止めたえといつたら止めてはなんねえつて叱られた、随分道中を大事に。九「へエ御免。母「誰だい。九「九八郎で、誠にどうもさつぱり心得ませんで、急にお立だと云ふこつて、お名残い惜うござえます。母「おや、上の婆様、あんた出て來なえで好えによ。婆「はい御免なさえ、誠にまアどうも只お名残い惜いから、どうぞ碌に見えない眼だが、ちよつくりお顔を見てえと思つてお暇乞に参りました、明日立つだつて、なんだかあつけないこつたつて、私の嫁なんざア泣えてはいゐるだ、随分大事になえ。母「はい有難うござえます、お前も随分大事にして、毎も丈夫で能くねえ。乙「へエ誠にどうもお力落しでがんです。丙「おい、何だつてお力落しなんていふんだ。乙「でも飛んだ事だと云ふぢやアなえか。丙「馬鹿いへ、敵討にお出でなざるのに力落しといふ奴があるか。乙「へエ誠にそれはアお目出度えこつて。丙「これ、お目出度えでなえ。乙「なんでも好いぢやアなえか。といふ騒ぎで、村中餅を搗きましたり、蕎麥を打つたりいたして一同出立を祝するといふ、惣吉仇討に出立の處は一寸一息。

七十九

さて時は寛政十一年十二月十四日の朝早く起きまして、旅仕度をいたしますれども、三代も續きました名主役、假令小村でも村方を離れて知らぬ他國へ参りますものは快くないもので、殊には年を取りました惣右衛門の未亡人が、十歳になる惣吉といふ子供の手を曳いて敵討の旅立ちでありますから、村方一同も止める事も出来ず、名残を惜んでをります、皆小前の者がぞろ／＼と大勢川端まで送つて参ります。母「さア作右衛門さんこれで別れませうよ、何處まで送つても同じこつたからこれで。作「だけれんども船へ乗るまで送り申していと皆かういつてゐる。母「だけれんども却つて船に私乗つかつて、皆が土手の處にいかい事皆が立つてゐると、私快よくねえ、名残惜くつて皆が昨宵から止められるのでね、誠に立たくござえませんよ、何卒お前が差圖して歸しておくんなさいませよ。作「はい、それぢやア皆な是れにてお別れとしませうよ、え、送れば送られる程御新造は心持悪いてえからよう。村方の者「左様ならまア随分お大事に。村方の者「左様ならハアお大事に。村方の者「左様ならお大事に、早くお歸りなさいませよ。作「何卒早くお歸りをお待ち申しますよ。母「さアよ多助どうしたもんだ、汝其所に立つてゐるから皆立つてゐべえぢやアねえか、汝から先き歸ろといふに。多「おれだけは戸頭まで送る。母「送らねえでも宜えてえに。多「送らねえでも宜えたつて、村の者と己とは違ふ、己はあんた十四の時から側にゐるので、何所まで送つても村の者は兎や角云ふ氣遣えねえか

ら送り申しますよ。母「あゝいふ馬鹿野郎だもの、汝が送ると云へば皆が送ると云ふから汝歸れてえに、昨宵いつたこと分らねえか。多「へエ、ぢやア御機嫌よく行つておいでなせえ、惣吉様道中でお母様に世話やかしてはいけませんよ、今までは草臥れゝば多助が負つて上げたが、もう負つて上げる者はねえよ、エ、氣の毒でもあんな歩いてまゐらなえばならんだ、永旅だから我儘してお母様に心配かけてはなりませんよ、大事に行つておいでなせえましよ。惣「うーん、大丈夫だよ、多助も丈夫で。多「こんな別れの辛いこたア今迄ねえね。母「別れエ辛えたつておつ死ぬぢやアなし、關取がに逢つて敵討つて目出度く歸つて來たら宜えぢやアねえか。多「それまア樂しみにするだが、あんな昨宵も人間は老少不定だなんていはれると心持よくねえからね。母「これで別れませうよ。多「左様なら氣い付けてね、初めから餘りたんと歩かねえやうにしてねえ、早く泊る様にしなければなんねえ、寒い時分だから遅く立つて早く宿へ着かなければいけませんぞ……ア、押ねえでも宜え危えだ、前は川ぢやアねえか、此處へ打籤つたらどうする……何卒大事に行つて來てお呉んなせえましよ……なに笑ふだ、名残惜いから聲かけるになんだ馬鹿野郎、情合のねえ奴だ、笑やアがつて……あれまア肥料桶擔げ出しやアがつた、桶をかたせ、ア、桶を下して挨拶してるが……あゝ兼だ新田の兼だ、御厄介になつた男だからなア、あの男も……惣吉様小せえだけども怜悧だから矢張り名残惜い惜がつて、

昨宵も己らは行くのは厭だけども母様が行くから仕方がねえ行くだつて得心したが、後を振返り振返り行く……見ろよ……あゝ誰か大え馬ア引出しやアがつて、馬の蔭で見えなくなつた、馬を田の畦へ押ツ付けろや……あれまア大え庚申塚が建つたな、あれア昔からある石だが、あんなもの建てなけりやアいゝに、庚申塚があつて見えやアしねえ、庚申塚取除せ。村方の者「そんなことが出來よかえ。と伸上りゝ見送つて暇を告げる者はどろどろ歸る。此方は後に心が引かされるから振返り振返り、やうゝのことで渡を越して水街道から戸頭へさして行きます。すると其翌年になりました花車重吉といふ關取は行違ひになりましたこと、毎年春になると年始に参りますが、惣次郎の墓詣りをしたいと出て來ましたが、取急ぎ水街道の麴屋へも寄らず直に菩提所へ参りまして和尚様に逢ふと、是れゝといひ、つい話も長くなりましたが、墓場に香花を澤山あげて、花車「あゝお偶様情ない事になつた、敵を打つなれば私に一言話をして呉れゝばお前様にこんな難儀もさせまいに、今いふは愚痴だが、だか能くお前が死んで呉れた許りで敵は安田一角といふ事が分りましたから、惣吉様に助太刀して屹度花車がお前様の恨を晴らします、ア、入違ひになり上總の東金へ行きなすつたか、無情ない事だと思ひなすつたらうが、私はこれから跡追掛てお目に掛り、何處に隠れ住まふとも草を分けても引摺り出して屹度敵を討たせますから。と活てゐる者に物をいふ様に分らぬ事を繰返し大きに遅れ

たと歸らうとすると、ばら／＼降り出して来て、他に行く處もないから水街道の麴屋へ行かうとする
 と、和尚様は「少し破れてはゐるがこれをさして、穿きにくからうがこの下駄を。といふので下駄と
 傘を借りて、これから近道を杉山の間の處からなだれを通つて、田を廻つてかう東の方へ付いて行く
 と、大きな庚申塚が建て、在つて、うしろには赤松がかう四五本ありまして、前には沼がありその邊
 に枯れ蘆が生えてをります、すうツと見渡すばかりの田畑、淋しい處へばら／＼降つかけて来る中を
 のそり／＼やつて来ると、突然に茂みからばら／＼と出た武士が、皆面部を包み、端折を高くして小
 長い大小を落し差しにしてつか／＼と来て物をもいはず花車の片方の手を一人が押へる、一人は前か
 ら胸倉を押へた、一人は背後から羽交責めに組付かうとしたが、關取は下駄を穿いてをり、大きな形
 で下駄穿だから羽交責め處ではない、漸く腰の處へ小さい武士が組付きました。

八十

花車は悔くりしたが、左の手に傘を持つて居り、右の手は明いて居りましたが、おさへ付けられ困
 りました。花車「なんだい、何をなさる。武士「我々は浪人者で食方に困る、天下の力士と見かけてお
 頼み申すが、路銀を拜借したい。花「路銀だつて、あんた、私はお前さん角力取で金も何もありませんし

ないが、困りますよ、そんなことして金持と見たは眼違ひで、金も何もありません、角力取だよ。武「金が
 なければ氣の毒だが、帯して居る銅金から煙草入から身ぐるみ脱いで行つて貰ひたい。花「そんなこ
 といつては困りますよ、身幅の廣いこんな着物を持つて行つたつて役に立ちません、煙草入だつ
 て、こんな大きな物持つて行つたつて提げられやせん、賣つたつて錢にもならぬに困りますよ、然
 らう胸突いては困るよ／＼。といひながら段々花車は後へ下ると、後の見上げる様な庚申塚の處へかう
 寄り掛りました。前の奴は二人で、一人は右の腕を押へ、一人は胸倉を取つて押へる、後の奴はせつ
 ない、庚申塚と關取の間にはさまれ、もつと前に。といつても同類の名をいふことが出来ない。此の
 三人は安田一角の廻し者、花車を素つばだかにしてなぶり殺しに致すやうにすれば、是れだけの手當
 を遣るといふことに疾うより頼まれて居る處、出會つて丁度幸ひ、いゝ正月をしやうといふ強慾非道
 の武士三人、漸と捕まいたが、花車は伶俐ものだから、此奴らは悪くしたら廻し者だらうと思ひ、
 花「まあそんなに押へられては困りますね、待ちなさい上げますよ、達つてと云へば上げますよ／＼。
 武「呉れぬといへば許さぬ、浪人の身の上切取強盜は武士の習ひ、云ひ出しては後へ引かぬからお氣の
 毒ながら切り刻んでもお前の物は残らず剝ぐぜ、遁れぬ事と諦めて出いな、裸體はお前の商賣だ、裸
 體で行くのは何でもないわ。花「だから上げるけれども、待ちなさいよ。と左の手に持つて居た傘を

ほんと投出し前から胸倉を取つて押へて居る一人の帯を押へて、花「お前さん、さう胸倉を押してゐては私は着物を脱ぐことが出来ぬから、胸倉を緩めて、裸體になりますよ、私も災難ぢやア、寒くはないから、私に裸體になれてえはなりませんから、胸倉を押へてゐては脱げませんから緩めて。前の奴のうっかり緩めた處を見て、花「なにをなさる。といひながら一人の奴の帯を取つてほんと投げると、庚申塚を飛越して、後の沼の中へ、ほかんと薄氷の張つた泥の中へ這入つた。すると右の手を押へた奴は驚きバラ／＼逃げ出した。花「悪い奴ぢや、こんな村境の處へ出やアがつて追刺をしやアがつて悪い奴ぢや、今度此邊アうる／＼しやアがると打殺すぞ、いや後に誰れか居やアがると、此奴組付て居やアがつたか。武「誠にどうも恐入つた。花「誠にも糞もいらん、これ汝の様な奴が出ると村の者が難儀するから此後爲ないか。武「爲る處ではござらぬ、誠にどうも。花「悪いことするな、是からは爲ないかどうだ此野郎。と押付けると、武「うーんと息が止つた。花「野郎死にやアがつたか、くたばつたか、野郎死んだか、ア、死にやアがつた、馬鹿な奴だ。と捻り倒すと、尾籠のお話だ、が鼻血が出ました。花「みつともねえ面だなア、此奴も投込んで遣れ。と襟髪を取つて沼へ投げ込み、傘を持つてのそり／＼水街道の麴屋へ歸るといふ、角力取といふ者はおほまかなもので。扱話はお二つに分れて此方は惣吉の手を引き、漸々のことで宿屋へ着きましたなれども、心配を致しました揚句

で、母親がきり／＼癩が起りまして、寸白の様で、宿屋を頼んでも近邊に良い醫者もございせんから、思ふ様に癒りません、マア癒るまではといふので、逗留致して居りました。其内に追々と病氣も癒る様子なれども、時々きやく／＼痛み、固い物は食はれせんから、お粥を拵へてこれを食ひ、其のうち年も果て正月となり、丁度元日、元日に寝てゐては年の始め縁起が悪いと、田舎の人は縁起を祝つたもので、身體が悪いせに我慢して惣吉の手を引いて出立致し、小金ヶ原へ掛り、塚前村の知己の處へ寄つて病氣の間厄介にならうと、小金ヶ原から三里許り参ると、大きな觀音堂がございしますが、雲がばら／＼降出して来て、子供に婆様で道は抄取りません、とつぶり日は暮れる、すると頻に痛くなりしました。惣吉「母様また痛いかえ。母「ア、痛い、あゝあのお醫者様から貰つたお薬は小さえ手包の中へ入れて置いたが、彼處え上げて置いたが、あれ汝持つて来たか。惣「あれ已置いて来た。母「困るなア、子供だア、母様鹽梅悪いだから、藥大事だからてえ考えもなえで。惣「だつて、已もう宜いてえから、よかんべえと思つて何も持つて来なかつた。母「困つたなア、あゝ痛い／＼。惣「母様雪降つて来た様だから、此處に居ると冷てえから、此の觀音様の御堂に這入つて些と已おつべさう。母「さうだなア、押してくれ。惣「あい。母「おゝ、大え觀音様のお堂だ、南無大慈大悲の觀世音菩薩少々此處を拜借しまして、此處で少し養生致します。さア惣吉力一べえ押せよ。惣「母様此處な處

かえ。母「もつとこつち。惣「もつと鹽梅が悪くなる困るよう、しつかりしてよう、多助爺やアを連れて来ると宜かつた。と可愛らしい紅葉の様な手を出して母の看病をして、此處を押せと云はれて押しても力が足りません。母「あゝ痛い、さう撫ても駄目だから拳骨で力一ぺえおつせよ、拳骨でよ、あゝ痛い。〱。

八十一

女「何だか大層唸る聲が聞えるが…貴方かえ。母「へえ、旅の者でござえますが、道中で鹽梅が悪くなりましてね、快くなえうち歩いて来ましたから、原中へ掛つて寸白が起つて痛うござえますから、觀音様のお堂をお借り申しました。女「それはお困りだらう、お待ち、どれ〱此方へ這入りなさい。と觀音堂の木連格子を明けると、疊が四疊敷いてございます。其奥は板の間になつて居ります、年の頃五十八九にもなりません、色白のでつぷりした尼様、鼠木綿の無地の衣を着て、尼「さア、此方へお這入りさア〱擦つて上げませう、憫然に、此子が小さい手で押しても、擦つても利きはしない、おゝ酷く差込んで来る様だ。母「有難うござえます、痛くつて堪らねえでね、宿屋へ一寸泊りましたが癒らねえで。尼「かう苦むに子供を連れて何處まで…なに塚前まで、是から三里ばかりで近

くはない、薬はお持ちかえ。母「はい、薬は有つたが惣吉がにいひ付けて置いたら、慌て、包の中へ入れて置いたのを置いて参りました。尼「薬がなくつては困つたもの、斯ういふ時は苦い物でなければいけない、だらすけが宜いが、今此の先にねえ、あの榎の出で居る家がある、あれから左の方へ構はず曲つて行くと、家が五六軒ある、其處の前に丸太が立つて、家根の上に葎簀が掛つて居て、其處に看板が出てあつたよ、癩だの寸白疝氣などに利く何とか云ふ丸薬で、黒丸子(漢方醫の調劑する腹痛の様なもの)で苦い薬で、だらすけみたいなもので、癩には能く利くよ、お前ねえ、知れまいかねえ、行つて買つて来ないか、安い薬だが利く薬だが、先刻通つた時榎があつて、一寸休む處が有つて、掛茶屋ではないが、あれから曲つて一町ばかり行くと四五軒家があるが、何うか行つて買つて来て、私が行つて上げたいが手が放されないので。惣「有難う。尼「茲にお錢があるから是を持って行つておいで、心配せず。惣「ぢやア母様私が薬買つて来るから。母「よくお聞き申して早く行つて来よう。惣「はい、御出家様お願ひ申しますよ。尼「あいよ心配せずに行つておいで、憫然に年もいかぬに旅だからおろ〱して涙ぐんで、いゝかえ知れたかえ、先刻通つた四五町先の榎から左に曲るのだよ。惣「あい。とおろ〱しながら、惣吉は年は十だが親孝心で發明な性質、急いで降る中を四五町先を見當にして参りました。先刻通りました處は覺えて居りまして、榎の所から曲ると成程四五軒家

がある、其處へ来て、惣「此邊に癩に利く薬で、だすけといふ様な薬は何處で賣つて居りますか。と聞くと、男「此邊に薬を賣る處はない、小金まで行かなければならぬ。惣「小金と云ふのは。男「小金までは子供ではからは逆も行かれない、其の中には暗くなつて原中で犬でも出れば何うする、早くお歸り。と云はれ心細いから惣吉は歸つて観音堂へ駈上つて見ると情ないかな母親は、咽喉を二巻程丸ぐけで括られて、虚空を掴んで死んで居る。背負つた物も亦母が持つて居た多分の金も引渡つて彼の尼が逃げました。惣「ア、お母様、何うして絞殺されたかねえ。と頸に縛り付けてある丸ぐけを慄へながら解いて居る處へ、通り掛つた者は、藤心村の観音寺の和尚道恩と申しまして年とつて居ります、村方では用ひられる和尚様、隣村に法事があつて男を一人連れて歸りがけ、和尚「急がんでやアいかん。男「何だかヒイ／＼といふ聲が聞える様に思ふだ。和「ヒイ／＼と。男「怖かねえと思つて、此處はね化物が出る處だからねえ。和「化物などは出やせん。男「けれども原中でヒイ／＼といふ聲が訝しかんべえ。和「何も出やアしない。男「あれ冗談ぢやアねえ、だん／＼、あれ／＼。和「彼れは観音様のお堂だ、彼處に人が居るのではないか、暗くつて見えはせん提灯出しな。と提灯を引つたくつて和尚様が来て見ると、縊り殺された母に絶り付いて泣いて居る。和「どういふ譯か。と聞くと泣いてばかり居て頓と分りません。漸くだまして聞くと是れ／＼といふ。和「飛んだ事だ。と直に

供の男を走らして村方へ知らせますと、百姓が二三人来て死骸と共に惣吉を藤心村の観音寺へ連れて来て、段々聞くと、便る處もない實に哀れの身の上でありますから、和「誠に因縁の悪いので、親の菩提の爲、私が丹精して遣るから、仇を討つなどといふことは思はぬが宜い、私の弟子になつて、母親や兄さんの爲に追善供養を吊ふが宜い。と此の和尚が丹精して漸く弟子となり、頭を剃りこぼち、惣吉が宗觀と名を替へて観音寺に居る處から、はからずも敵の様子が知れると云ふお長い話。一寸一息吐きまして。

八十二

扱一席申上げます。久しく休み居りました累ヶ淵のお話は、私も昨冬より咽喉加答兒でさつぱり音聲が出ませんから、寄席を休む様な譯で、なれども此程は大分咽喉加答兒の方は宜うございますが、また風を引き風聲になりました、風聲と咽喉加答兒とが掛持を致して居りますと云ふ譯でもござりませんが、何時までもお話を致さずには居られませんか、此程は漸く少々よろしうございますから申し残りの處を一席お聞きに入れます。さてお話が二つに分れました、ちやうど時は享和の二年七月廿一日の事でございます。下總の松戸の傍に、戸ヶ崎村と申す處がございまして、其處に小僧辨天

といふのがありまするが、何ういふ譯で小僧辨天と申しますか、敢て辨天様が小さいといふ譯でもなし、辨天様が使ひに往く譯でもないが、小僧辨天と申します。境内は樹木が繁茂致しまして、頓と掃除などを致したことはなく、破れ切れた辨天堂の縁は朽ちて、間から草が生えて居り、堂の傍には落葉で埋もれた古井があり、手水鉢の屋根は打つ壊れて、向ふの方に飛んで居ります。石塚は苔の花が咲いて横倒しになつて居ります程の處、其の少し手前に葎簧張があつて、住ひではありません、店の端には駄菓子箱があります、中にはお市、微塵棒、達磨に玉兎に狸の糞などといふ汚い菓子に鹽煎餅がありまするが、田舎のは鹽を入れまするから、見た處では色が白くて旨さうだが、矢張こつくり黒い焼方の方が旨いやうです。田舎の鹽煎餅は薄つべらで輕くてべらくして居りまする、大きな煎餅壺に一杯這入つて居りまする、それから鳥でも追ふ爲か、漣團扇が吊下り、風を受けてフラ／＼煽つて居りまする、これは蠅除であると申す事で、袖無を着た婆アさまが塵埃除の爲に頭へ手拭を巻き付け、土竈の下を焚き付けて居りまする。破れた葎簧の衝立が立つてあり、看板を見ると御休所煮染酒と書いてありまするのは、いかさま一膳飯ぐらゐは賣るのでござりまする。丁度其日の申刻下り、日はもう西へ傾いた頃、此茶見世へ来て休んでゐる武士は、廻し合羽を着て、柄袋の掛つた大小を差し、半股引の少し破れたのを穿いて、盲縞の山なしの脚半に丁寧に刺した紺足袋、切緒の草鞋を

穿き傍らに振り分け荷を置き、菅の雪下しの三度笠を深く冠り、煙草をバクリ／＼呑んで居りますると、門口から這入つて參りました馬方は馬を軒の傍らへ繋いで這入つて來ながら、「婆さま、お茶一杯くんねえ、今のお客を一人新高野まで乗けて來た。婆「おめえさまは何時もよい機嫌だのう。馬「いゝ機嫌だつて、機嫌悪くしたつて錢の儲かる譯でもねえから仕やうがねえのよ。といひながら彼の縁臺に腰を掛けてゐたる客人を見て、馬「お客さん御免なせえ、あんた何方へおいで、ござえやすねえ、もうハア日が暮れ掛つて來やしたから、お泊は流山か松戸泊が近くつてようござえませう、川を越してのお泊は御難澁やうだが、今夜は何處へお泊りか知りやせんが、廉くやんべえかな。士「馬は欲しくない。馬「どうせ歸り馬でござえやす、今ね新高野までお客ウ二人案内してね、また是から向へ往くのでござえやすが、手間がとれるから、鰯ヶ崎の東福寺泊りと云ふのだが、幾らでもいゝから廉く遣るべえぢやアねえか。士「馬は欲しくないよ。馬「欲しくねえたつて廉かつたら宜えぢやアねえか。士「廉くつても乗り度ないといふのに。馬「そんな事を云はずに我慢して乗つて下せえな。士「うるさい、乗りたくないから乗らんといいのだ。馬「乗りたくねえたつて乗つてお呉んなせえな、馬にも旨え物を喰はしてやりてえさ、立派な旦那様、や、貴方ア安田さまぢやありませんか。士「誰だ。馬「お、先生かえ、誠に久しく會はねえ、まア本當に思えがけねえ、横曾根村にゐた安田先

生だね。士「大きな聲をするな、己は少々仔細有つて隠れてゐる身の上だが、突然に姓名をいはれては困る、貴様は誰だ。馬「誰だつて先生、一つ處にゐた作藏でござえやすわね。士「なに作藏だと、おゝ然う〜。作「え、誠に久しくお目に懸りやせんが、何時もお達者で若えねえ、最早慥か四十五六になつたかえ。士「汝も何時も若いな。作「己アもう仕様がねえ、貴方實はね私も先刻から見ただ様な人だと思つてたが、安田一角先生とは氣が附かなかつたよ。士「己の名を云つてくれるなといふに。作「だつて、知んねえだから氣イ附かずに云つたのさ、併しどうも一角先生に似て居ると思つたよ。安「これ名を云ふなよ。作「成程善々視れば先生だ、何でも隠し事は出来ねえねえ、笠ア冠つてゐるから知れなかつたが安田先生だつた。安「これ〜困るな、名を云ふなと云ふに。作「ついで惘然いふだが、もう云はねえ様にしやせう、實に思え掛けねえ、貴方今何處にゐるだ。安「少し仔細あつて此近邊に身を隠してゐるが、汝何うして彼方を出て來た。作「仕様がねえだ、己アこんなむかつ腹を立てる氣象だが、詰らねえ事で人に難癖を附けられたから、此所ばかり日は照らねえと思つて出て來たのさ。安「汝は慥か森藏の宅に厄介になつてゐたぢやアねえか。作「はい、森藏といつちやア彼處では少しは賭博打の仲間ぢやア好い親分だが、何てつてももう年い取つてしまつて、親分は筆跡してゐやすから、若え奴等もいけえことゐやすから、私も厄介になつてると、金松と云ふ奴がゐて、其

奴が毀れた碌でもねえ行李を持つてゐて、自分の物は犢鼻褌でも古手拭でも皆其ん中え置くだ、或時己が其行李を棚から下してね、明けて見ると、財布が這入つて、金が一分二朱と六百あつたから出して使つてしまふと、其奴がいふには、此の行李の中へ入れて置いた財布の金が無え、手前取つたらうといふから、己ア取りやアしねえが只黙つて使つたのだといふと、此泥坊野郎と云ふから私が合點しねえ、泥坊とは何んだ、どういふ理窟で人の事を泥坊と云ふのだ、只汝が金を出して使つたばかりで黙つて人の物を出して使つたつて泥坊と云ふ理窟が何處に在るか、喧嘩をおつ始めたといふわけさ。安「矢張泥坊の様だな。

八十三

馬「親分のいふには、泥坊に違えねえとつて己の頭ア打擲つて、汝の様な解らねえものアねえと、親分まで共に己に泥坊の名を附けただが、盗んだぢやアねえ只無斷で使つたものを泥坊なんぞといふ様な氣の利かねえ親分ぢや仕様がねえと思つて、おッ奔つて了つたが仕様がねえから今ぢやア馬小屋見てえな家を持つて、かうやつて、馬子になつて僅な飲代を取つて歩いてるんだが、ほんの命を繋いでるばかりで仕様がねえのさ、賭博打の仲間へ這入る事も出来ねえから、只もう馬と首引きだ、馬ばか

り引いてるから脊骨へないらがるかと思つてるよ。昔馴染に、小遣を少しばかりおくんなさえな。安「そんなら汝は風來で遊んでるのか。作「遊人といふ譯でもねえが、馬を引いてるから、賭博を打つて歩く事も出来ねえのさ。安「少し汝に話があるから婆アを烟草でも買ひに遣つてくれねえか。作「はア宜うござえやす、婆さま、旦那さま烟草買つてくると仰しやるから買つて来て上げなよ、此の旦那は好んでなけりやア氣に入るめえ、唯の方ではねえ安田一角先生でえ。安「これ〜。作「はア宜うござえやす、立派な先生だから悪い烟草なんぞア吞まねえから、大急ぎで好のを買つて來なせえ……あんた錢有りますかえ。安「さ、これを。作「ア婆さま是で買つて来て上げな。安「使ひ賃は遣るよ。婆「はい畏まりました、直にいつて参ります。と婆さんは使賃といふ事を聞いて悦んで、烟草を買ひに出て参りました。後は兩人差向ひで、安「汝馬を引いてるのが幸ひだ、己は木卸へ上る五助街道の間に、藤ヶ谷といふ處の明神山に當時隠れてゐるんだ。作「へー、あの巨大え森のある明神さまの、彼處に隠れてゐるのかえ、人の往來もねえ位の處だから定めて不自由だんべえ、彼處は生街道でえので、松戸へ通ン抜けるに餘程近えから、夏になると魚ア車に打積んで少しは人も通るが何だつてあんな處に居るんだえ。安「それには少し譯があるのだ、己も横會根にゐられんで當地へ出たのだ。馬「何だか名主の惣次郎を先生が打斬たてえ噂があるが、え、先生の事だから随分やり兼ね

え、殺つたんべえ此横着もの奴、そんな噂がたつて居難くなつたもんだからおつ走つて來たんだらう。安「そんな事はねえが武士の果は外に致方もなく、旨い酒も飲めないから、どうせ永い浮世に短い命、斬り取り強盜は武士の習だ、今ぢやア十四五人も手下が出來て、生街道に隠れてゐて追剣をしてゐるのだ。作「え、追剣を、えれえウーン怖ねえウーン、おれ剣なよ。安「汝などを剣いでも仕様がないが、汝は馬を引いてるんだから、偶には随分多分の金を持つてるよい旅人が、佐原や潮來邊から出て來るから、汝其の金のありさうな客を見たら、なりたけ駄賃を廉くして馬に乗せ、此處は近道でございますと、旨く騙かして生街道へ引張り込み、藤ヶ谷の明神山の處まで連れて來てくれ、併し薄暗くならなくつちやア仕事が出来ねえから、宜い加減に何處かで時を移すか、のさ〜歩けば自然と時が遅れるから、さうして連れて來て呉れれば、多勢で取巻いて金を出せといへば驚いてしまふ、汝は馬を置つ放してなり引張つてなり逃げてしまひねえ、さうして百兩金があつたら其内一割とか二割とか汝に禮をしやうから、おれの仲間にならねえか。作「そんなら禮が二割といへば百兩ありやア二十兩已にくれるのか。安「さうよ。作「うめえなア、只馬を引張つて百五十文ばかりの駄賃を取つて、酒が二合に鍊の二本も喰へば、後に錢が残らねえ様な事をするより宜いが、同類になつて、若し知れた時は首を打斬れるのかよ。安「さうよ。作「ウーン、それだけだな、己はもうこれで五十を越して

るんだから百兩で二十兩になるのなら、こんな首は打斬られても惜くもねえから行るべえか。安「汝馬を引いておれの隠家まで来い、あの明神山の五本杉の中に一本大きな楠がある、其裏の小山がある處に、少しばかり同類を集めてゐるんだ。馬「ぢやア彼のもと三峰山のお堂のあつた處だね、よくまア彼様な處にゐるねえ、彼處は狼や蟒が出た處なんだから、尤も泥坊になれば狼や蟒を怖がつてゐちやア出来ねえが、さうかえ。一角は懐から金を取出し作藏に渡しなから、安「これは汝が同類になつた證據の爲、少しだが小遣錢に遣るから取つて置け。作「え、有難え、これは五兩だね、今日は本當に思え掛けねえで五兩二分になつた。安「なぜ。作「不思議な事もあるものだ、今日はね、あのもその三藏に逢つたよ、羽生村の質屋で金かした婆ア様死んだつて、其白骨を高野へ納めるてえ来たが、今日は廿一日だから新高野山へお参りをするてえので、與助を供に伴れて、己が先刻東福寺まで送つてつたが、昔馴染だから二分くれるツて云つたが、有難うござえやす、實に今日は思え掛けねえ金儲けが出来た。安「其五兩を取つて見ると、もう同類だから是切り藤ヶ谷へ來すにゐて、若し汝の口から己の悪事を訴人しても汝は矢張り同罪だ、假令五兩でも貰つて見れば同類だから然う思へ。作「己も覺悟を極めて行るからには屹度遣りますよ、それは宜いが、あんた直に獨りで往くか、馬に乗つて往かないか、歩いて往く、さうか、左様なら……あゝ其方へ往つてア損だから、其の土橋を渡つ

て眞直においでなせえ、道い悪いから氣い付けて往きなせえ、なア安田先生も劍術遣ひだから、どうして劍術遣ひぢやア飯ア喰へねえ、あの人は舊時から随分盜賊ぐれえ遣つたかも知んねえ、今己がに五兩呉れたは宜いが、是を取つて見れば同類に落すといつたが、困つたな、あゝもう往つてしまつたか、立派な男だ、婆アさまは何處まで烟草を買えに往つたんだらう、尤も要らないのだ、人拂えの爲に買えに遣つたんだが餘り長えなア。と獨言をいつてゐる後から、男「おい作。作「え、誰だえ己を呼ぶるのア誰だ。男「お、己だ、久しく逢はねえのう。

八十四

作「誰だ、人が何處にゐるのだ。と云ひながら方々見廻し、振返つて見ると、一枚折の葎の屏風の蔭に、蛇形の單物に紺献上の帯を神田に結び、結城平の半合羽を着、傍の方に振分の小包を置き、年頃三十ばかりの男で、色はくつきりと白く眼のはつちりとした、鼻筋の通つた、口元の締つた美しい男で、其側に居るのは女房と見え、二十七八の女で、頭髮は達磨返しに結び、鳴海の單衣に黒襦子の帯をひつけ、かけに締め、一杯飲んで居る夫婦連の旅人で、男「作や此方へ這入んねえ。といひながら葎屏風を明けて出て來た男の顔を見て、作「イヤア兄いか、何うした新吉さん珍らしいなア、久し振りだ、これは何

うも珍らしい、實に思ひ掛けねえ。新「汝、大きな聲で嗚鳴つて居たが相變らずだな。作「おやお賤さん、誠に久し振りでごさやした。賤「おや作藏さんお前の噂は時々してゐたが、相變らず宜い機嫌だね。作「本當にお賤さん、見違へる様になつた、少しふけたね、旅をしたもんだから色が黒くなつたが、思え思つた新吉さんとうろく夫婦になつて彼處をおツ走つたのかえ、今ま何處にゐるだえ。新「彼方此方と身の置き所のねえ風來人間で仕方がねえが、是も皆んな人に難儀を掛け、悪い事をした報ひと思つて諦めてゐるが、何商賣を仕度くも資本がないのだ、汝まふな仕事を安田と相談してゐたが、己も牛口載せねえか。作「お前あの事を聞いたか、是ハア困つたなア、實は錢がねえで困るから這入る眞似しただア、だが餘り這入り度くはねえんだ。新「旨くいつてるぜ、併し三藏は何處へ往つたんだ。作「三藏かえ、彼はね婆さまが死んだから其白骨を本當の紀州の高野へ納めに往つて、祠堂金も澤山持つてる様子だ、お累さんもあゝいふ死様をしたのも矢張お前ら二人でした様なものでせ。新「汝是から新高野へ馬を引いていくのなら矢張歸りは此處を通るだらう。作「鱒ヶ崎の方へ廻るのだが此方へ來ても宜い。新「さうか、おい作。作「え何んだ。新「一寸耳を貸せ。作「ふん、怖い事だな。新「汝馬を引いて先方へ往つて、三藏を此處迄乗せて連れて來たら、何か急に用が出来たと云つて、馬を置つ放して逃げてしまつてくれねえか、併し馬を置いていかれちやア三藏に

逢つて仕事をする邪魔になるから、引いてつてくれ、其代り金を三十兩やらア。作「え、三十兩、本當に己ア金運が向いて來た、ちやア金をくんろえ、してどういふ理窟だ。新「三藏とは一旦兄弟とまでなつたが、お累が死んでからは、互に敵同志の様になつたのだ。作「敵同志だつて汝が三藏を怨むのあそりやア兄い些と無理だんべえ、成程お賤さんの前もあるから、さういふか知んねえが、三藏を敵と思えば無理だぞ、お前が養子にいつても男振りが宜いもんだから、お賤さんに見染められ、互に死ぬの生ると騒ぎ合ひ、お累さんを振捨て、お賤さんとかういふ事になつたから、お累さんも上げて顔が彼様に腫れ出して死んで了つたのだから、却て三藏の方でお前を怨んでゐるだらうが、何もお前の方で三藏を悪み返すといふ理窟はあんめえぜ。新「汝は深い事を知らねえからそんな事をいふんだが、何でも構はねえ、己が三藏に逢つて、百兩でも二百兩でも無心をいつて見ようと思ふのだ。作「三藏殿がお前に金を貸す縁があるかえ。新「貸しても宜い譯があるのだよ。作「三十兩呉れるなら遣附けやせう。新「若し與助の野郎が邪魔でもしたら、汝打擲つてくれなくつちやアいけねえぜ。作「與助爺なんざアヒヨロ／＼してるから川の中へ投ほり込んで了ふがそれも矢張金づくだがね。新「強請事をいはずに遣つて呉れ其代り首尾よく遣つて利を見た上で汝に又禮をしやう。作「それちやア三藏に貸してくれといつても貸さねえといへば禮はねえか、困つたな、ちやア後の處は當に

はならねえな。新「まあ其様なものだが、多分旨くゆくに違えねえ、若しぐづ／＼して貸さねえなんどいいつたら、三藏與助の二人を毆つ殺して川の中へ投げ込んでしまふ積りだ、己も安田の提灯持位えは遣る了簡だ。作「お賤さん新吉さんが彼様な事を云ふぜ。賤「お前度胸をお据ゑ仕方がないよ、私も板の間稼ぎぐらゐは遣るよ。作「アレマア彼様な綺麗な顔をしてゐながら、あんな事をいふのも皆んな新吉さんが教へたんだらう、己はどうせ安田の同類にされたから、知れ／＼ば首は打斬れる様になつてゐるんだから仕方がねえ、やるべえ／＼、お婆アが歸つて來やアがつた。新「それぢやア手前馬を引いて早くいけ。作「ハイ、そんなら直に馬ア引いて新高野へ三藏を迎えに参りやせう。と出て行きました。これから新吉お賤も茶代を拂つて其處を立出でました。其の内もう日はとつぷりと暮れましたが、葭簀張もしまひ川端の葦の繁つた中へ新吉お賤は身を隠して待つて居ると、向ふから三藏が作藏の馬に乗つて参りました。作「與助さん貴方も何歳になるねえ、まだ若えのう、長く奉公してゐるが五十を一つ二つも越したかえ。與「さうでねえもう六十に近くなつたから滅切年を取つて仕舞つた。作「羽生村の旦那ちよつくら下りてお呉んなせえ。三「なんだ。作「なんでも宜いから。三「坂を上つたり下りたりするので己も餘程草臥れたが、馬へ乗つて少し息を吐いたが、馬へ乗ると又矢張腰が痛いので。作「旦那誠に御無心だが、私はね、少し用があるのを忘れて居たが、實は此の先へい

つて炭俵を六俵積んで來て呉れと頼まれてゐるんだが、どうしても積んでいかねばなんねえ事があるだ、誠にお氣の毒だが此處で下りて下せえな、もう此處から先は平な道だから歩いて造作もねえんです。三「それぢやア何うでもいゝ、汝が困るなら下りて歩いていかう。と云ひながら馬から下りる。作「私は少し急ぎますから御免なせえ。と大急ぎで横道の林の蔭へ馬を引込みました。

八十五

日はとつぷりと暮れ、往來も止まりますと、戸ヶ崎の小僧辨天堂の裏手の草の茂みからこそ／＼と葦を分けながら出て來た新吉は、ものをもいはず突然與助の腰を突きましたから堪りません、與助は翻筋斗を打つて、利根の枝川へどぶんと水音高く逆とんぼりを打つて投げ込まれましたから、アツといつて三藏が驚いてゐる後から、新吉が胴金を引抜いて突然に三藏の脇腹へ突込みました。アツといつて倒れる處へ乗掛り、胸先を挟りましたが、一刀や二刀では容易に死ねません、死物狂ひ一生懸命に三藏は起上り、新吉の髪をとつて引き倒す、其内與助は年こそ取つて居りますが田舎漢で小力もあるものでございませうから、川中から這ひ上つて参りながら、短いのを引き抜き、與「此野郎なにをしやアがると斬つて掛る様子を見るよりお賤は驚き、新吉に怪我をさせまいと思ひ、窃と後から出

て参り、與助の髻を取つて後の方へ引倒すと、何をしやアがるといひながら、手に障つた石だか土の塊りだか分りません、それを取つて突然お賤の顔を打ちました、お賤は顔から火が出た様に思ひ「アツ。といつて倒れると、乗し掛り斬らうとする處へ、馬子の作藏が與助の傍から飛び出して、突然足を上げて與助を蹴りましたから堪りません、與助はウンといつて倒れました。新吉は刀を取直して又た一刀三藏の脇腹をこじりましたから、三藏も遂に其儘息が絶えました。すると手早く三藏の懐へ手を入れ、胴巻の金を抜き取つて死骸を川の中へ投げ込んで仕舞ひ、新「お賤く。賤「アイ、ア、痛い、どうも酷い事をしやアがつた、石か何か取つて、いやといふ程私の顔を打ちやアがつた。新「手出しをするからだ、黙つて見ておればいゝに。賤「見て居ればお前が殺されて仕舞つたのだよ、與助の野郎がお前の後から斬りに掛つたから、私が一生懸命に手傳つたのだが、もう少しでお前斬られる處だつたよ。新「さうか、夢中でゐたから、ちつとも知らなかつた。賤「與助をよく蹴倒したのう。作「え、なに己だ、林の蔭に隠れてゐたが、危ねえ様子だから飛び出して来て、與助野郎の肋骨を蹴折つて仕舞つた、兄い無心處ぢやねえ突然に行つたんだな。新「汝はもう歸つたのかと思つた。作「林の蔭に隠れてゐて、何うだか様子を見てゐたのよ。新「誰か人は來やアしねえか、汝氣を付けて呉れ。作「大丈夫だ、誰も來る氣遣はねえが、割合を貰へ度えなア。新「汝はよく嘘を吐く奴だな、三

藏が高野へ納める祠堂金を持つてるといふから、懐を探して見たが、金なんぞ持つてゐやアしねえ、漸く紙入の中に二兩か三兩しかありやアしねえ。作「冗談ぢやアねえぜ、そんな事があるもんか。新「だつて汝嘘を吐いたんだ。作「なに己が嘘なんぞ吐くものか、此の野郎殺して置いて其の金を取つて仕舞つたに違えねえ、そんな事をいつても駄目だ。新「なに本當だよ。作「死骸はどうした。新「川の中へ投り込んでしまつた。作「嘘をいへ、戯けずに早くよこせよ、戯けるなよ、新「なに戯けやアしねえ。といはれ、作藏は少し怒氣を含み、詛聲を張上げ、作「手前の懐を改めて見やう、己だつて手傳つて、姐さんを斬らうとする與助を蹴殺して、罪を造つてゐるんだ、裸體になつて見せるやい、出せつてばやい。といひながら新吉に取絶る。新「遣るよ、遣るから待てといふに、戯けるな、放せ。作「なんだ、人を欺して、金を出せよう。新「遣るから待てよ、遣るといふに、お賤、その柳行李の中に少し許り金が這入つてゐるから出して作藏に遣んな、三藏の懐には無えんだから澤山は遣れねえ、十兩ばかり遣らう。と氣休めをいひながら隙を覗つてどんと作藏の腰を突くと、どぶりと用水へ落ちましたが、がばくと直に上つて参ります處を見て、すーんと腦を割附けると、アツ、といつてがばくと沈みましたが、又這上りながら、作「斬りやアがつたなア此野郎。と云ふ聲がりとんと羽がして川に響きましたが、又這上つて來るのを無暗に斬り附けましたから、馬方の作藏は是迄の悪事の

報いにや遂に息が止まつたと見え其儘土手の草を攫んだなり川へのめり込んで仕舞ひました。賤「お前まア恐ろしい酷い事をするねえ。新「此野郎はお饒舌をする奴だから、罪な様だが五兩でも八兩でも金を遣るのは費だから切殺して、仕舞つたが、もう此處にぐづ／＼してはゐられねえ。賤「私はどうも殴れた處が痛くつて堪らないよ。新「何んだか暗くつて判然分らねえといひながら透して見ると石だか土塊だか分りませんが、機みといひながら打たれた痣は半面紫色に黒み掛り、腫れ上つてゐましたから、新吉がぞつとしたと申すは、丁度七年後の七月廿一日の夜、お累が己を怨み、鎌で自殺をした彼の時に、蚊帳の傍へ坐つて己の顔を怨めしうに睨めた貌が、實に此通りの貌だが、今お賤が思ひ掛ない怪我をして、半面變相になるといふのも、飽までお累が己の身體に附纏つて祟りをなす事ではないかと流石の悪黨も怖氣立ち、ものをも言はず暫くは茫然と立つて居りましたが、お賤は氣が付きませんから、賤「お前早く人の來ない中に何處かへいつて泊らなくつちやアいけない。といはれ、やう／＼心づき、これからお賤の手を取つて松戸へ出まして、松新といふ宿屋へ泊り、翌日雨の降る中を立出でて本郷山を越し、塚前村にかゝり、觀音堂に參詣を致し、圖らずお賤が、實の母に出逢ひまするお話は一息つきまして。

八十六

申續きました新吉お賤は、實は佛説で申します因縁で、それ程の悪人でもございませんでしたがする事爲す事に皆惡念が起り、人を害す様な事も度々になります。扱二人は松戸へ泊り、翌廿二日の朝立たうと致しますると、秋の空の變り易く、朝からどんと抜ける程降りますから立つ事が出来ませんで、ぐづ／＼して晴れ間を待つてゐる中に丁度午刻過になつて雨が上りましたから、晝飯を食べて其處を立ちましたなれども、本街道を通るのも疵持つ脛でございませうから、却て人通りのない處がよいといふので、是から本郷山を抜け、塚前村へ掛りました時分は、もゝ日が暮れかゝり、又吹つ掛け降りに雨がざア／＼と降つて來ましたから、新「ア、困つたもんだ。と云ひつゝ二三町參りますと傍の林の處に小さい門構への家に、ちらりと燈火が見えましたから、新「兎も角も彼處へいつて雨止みをしやうといひながら門の中へ這入つて見ると、木連格子に成てゐる庵室で、村方の者が奉納したのか、丹で塗つた提灯が幾つも掛けてあります。正面には正觀世音と書いた額が掛けてあります。新「お賤。賤「あい。新「こんなところに宿屋はなし、仕方がないから此の御堂で少し休んでいから、お賽錢を上げたからよからう、坊さんがゐるだらう。といひながら格子の間から覗いて見ると、向ふに本

尊が飾つてあります。正觀世音の像を小さいお厨子の中へ入れてあるのですが、餘り良い作ではありません、田舎佛師の拵へたものでございませう、なれ共金箔を置き直したと見え、びか／＼と光つて居ります、其前に供へた三つ具足は此頃納まつたものか、まだ新しく村名が鏤り附けてあり、坊さんが畠から切つて来たものか黄菊に草花が上つて居ります。すると鼠の單物を着、腰衣を着けた六十近い尼が御燈明を點けに参りましたから、新「少々お願ひがございしますが、私共は旅のもので此通りの雨で難澁いたしますが、どうか少々の間雨止みを仕度いと存じますが、お邪魔でも此の軒下を拜借願ひたいものでございします。尼「はい、御參詣のお方でございしますかえ。新「いえ通り掛りの者ですが、此の雨に降りこめられました、尤も有驗な觀音様だと聞いてをりますからお参りもする積りでございします。尼「吹つ掛け降りですから其處に立つてお出でとは嘸お困りでございませう、すぐに前に井戸もありますから足を洗つて此方へ上つて、お茶でも飲みながら雨止みをなすつていらつしやいませ。新「有難う存じます、えお賤、金か何かやればいゝから上んねえ、ぢやア御免なさい、誠に有難う存じます。尼「其處に鹽もありませうから、小さい方を持つていつて足を洗つてお出でなさい。新「へえ。と是れから足を洗ひ、新「誠にお陰様で有難うございします。と上りましたが、新吉もお賤もあつかましいから、圍爐裡の側へ参り、新「お陰様で助かりました。賤「誠にどうもとんだ御

厄介さまでございました。尼「おや／＼御夫婦連で旅をなさいますの、藤心村まで出るとお茶漬屋ぐらゐはありますが、此邊には宿屋がございせんから定めてお困りでせう、遠慮なしにもつと圍爐裡の側へお寄んなさい。新吉は何程か金子を紙に包んで尼の前へ差出し、新「是は誠に少し許りでございしますが、お陰で助かりましたから、お茶代ではありませませんが、どうかこれで觀音様へお経でもお上げなすつて下さいませ。尼「いえ／＼それは決して戴きません、先刻貴方は本堂へお賽錢をお上げなすつたから、それでもう澤山でございします、御參詣の方は皆お馴染になつて、他村の方が來ても上り込んで、私の様な婆でも久しく話をして入らつしやいますのですから御心配なく寛くお休みなすつて入らつしやいませ。と云はれ、新吉はお賤の顔を見ながら小聲にて、新「だつて、きまりが悪いな、これはほんの私の心許りでございしますから、貴方後でお茶請でも買つて下さいませ。尼「いえ私は喰べ物は少しも欲しくはありません、お賽錢を上げたからお金などはようございしますよ。新「そんな事をいはずに何卒取つておいて下さいませ。尼「さうでございしますか、又氣になすつては悪いし、折角の思召ですから戴いて置ませう、日が暮れると雨の降る時は寒うございします、直に本郷山が側ですから山冷がしますから、もつと其の籠をお焚べなさいませ。新「へい有難う存じます。といひながら松葉や籠を焚べ、ちよろ／＼と火が移り、燃え上りました光で、お賤が尼の顔を熟々

見てゐましたが、賤「おやお前はお母アぢやないか。

八十七

尼「はい、どなたえ。賤「あれまア何うもお母アだよ、まア何うしてお前尼におなりだか知らないが、本當に見違へて仕舞つたよ、十三年後に深川の櫓下の花屋へ置去りにしていかれた娘のお賤だよ、と云はれて尼は恟くりし、尼「え、まアどうも、誠に面目次第もない、私も先刻から見た様な人だと思つてたが、顔貌が違つたから黙つてたが、どうも實に私は親子と名乗つてお前に逢はれた義理ぢやアありませんが、頭髮を剃つて斯んな身の上になつたから逢はれますもの、定めて、不實の親だと腹も立ちませうが、どうぞ堪忍して下さい、あやまります。賤「それでも能く後悔してね。尼「此通りの姿になつて、まア此庵室に這入つて、今では毎日お經を上げた後では觀音様へ向つて、若い時分の悪事を懺悔してお詫び申してゐますけれども、中々罪は消えませんが、頭髮をすつて衣を着たお蔭で、村の衆がお比丘様とか尼様とか云つて、種々喰べ物を持つて來て呉れるので、何うやら斯うやら命を繋いでゐるといふだけのことで、此頃はやう／＼心づいて、十六の時置去にしたお賤はどうしたかと案じてゐても、親子で有ながら訪ねる事も出来ないといふのは皆罰と思つて後悔してゐるのだ

よ。賤「どうもね本當に、それでも能くまア法衣を着る簡になつたね。といひながら、新吉に向ひ賤「お前さんにも話をした深川櫓下の花屋の、それね……お前さんの様な親子の情合のない人はないけれ共能くまア後悔してお比丘におなりだね。尼「比丘なんぞになり度い事はないが、是も皆私の作つた悪事の罰で、世話のして呉れ人もなくなり、段々老る年で病み煩ひでもした時に看病人もない始末あ、何うしたらよからう、あ、是も皆罰ではないかと身體のきかない時には、眞に其後悔といふものが出て來るものでうお賤、して此のお方はお前の良人かえ。賤「あ、新「いつでも此女から話は聞いてゐました、一人お母様があるけれ共生死が分らない、併し丈夫な人で、若い氣象だつたから達者でゐるかとお噂は能くしますが、私は新吉と云ふ不調法ものでございますが、今から何分幾久しう願ひます。尼「此のお賤は私の方では娘とも云へません、又親とは思ひますまい、憎くつてねえ、あ實にお前に會ふのも皆神佛のお叱りだと思ふと、身を切られる程つらいと云ふ事を此頃始めて覺えました、云はない事は解りますまいが、私は此頃は誰が來ても身の懺悔をして若い時の悪事を致しますと、遊びに來る老爺さんや老婆さんも、お／＼さうだのう、悪い事は出來ないものだと思つて、又其人達が若い時分の罪を懺悔して後悔なさる事があるから、私が懺悔をしますと人さまもそれに就て後悔して下されば私の身の爲にもならうと思つて、逢ふ人毎に私の若い時分の悪事を懺悔して

お話を致します、私も若い時分の放蕩と云ふものは、お前は知りませんが中々一通りぢやアありませんでしたよ。新「お母さん、なんですか、お前さんは元何處の出のお方でございます、多分江戸子でせう。尼「いえ私の産れは下總の古河の土井さまの藩中の娘で、親父は百二十石の高を戴いた柴田勘六と申して、少々ばかりは宜い役を勤めた事もある身分でございますましたからお嬢様育ちで居たのですが、身性が悪うございまして、私が十六の時家來の宇田金五郎といふ者と若氣の至りで私通をし、金五郎に連れられて實家を逃出し江戸へ参り、本郷菊坂に世帯を持つて居りましたが丁度あの午年の大火事のあつた時、寶曆十二年でございましたかね、其時私は十七で子供を産んだのですが、十七や十八で兒を拵へる位だから碌なものではありません、其の翌年金五郎は傷寒を煩らつて遂に亡くなりましたが、年端もゆかぬに亭主には死ね、子持ではどうする事も出来ませんのさ、其子供には名を甚藏と附けましたが、何に肖かつたのか肩の處に黒い毛が生えて、氣味の悪い痣があつて私も若い時分の事だから氣色が悪く、殊に亭主に死なれて喰ひ方にも困るから、菊坂下の豆腐屋の水船の上へ捨兒にして、私は直ぐ上總の東金へいつて料理茶屋の働き女に雇はれて居る内に、船頭の長八といふ者といふ交情となつて、また其處を駆け出して出るやうな事に成つて、深川相川町の島屋と云ふ船宿を頼み、亭主は船頭をし、私は客の相手をして僅かな御祝儀を貰つて何うやら斯うやらやつて居る中に、私は

亭主運がないと見え、長八がまた不圖煩ひついたので原因で、是も又死別れ、どうする事も出来ないから心配して居ると、島屋の姐さんのいふには、逆もお前には辛抱は出来まいが、思ひ切つて堅氣にならなにかと云はれ、小日向の方のお旗下の奥様がお鹽梅が悪いので、中働に住み込んだ處が、これでも若い時分は此様な汚い婆アでもなかつたから、殿様のお手が附いて、僅かな中に出来たのは此お賤。

八十八

尼此娘も世が世ならばお旗下のお嬢さまといはれる身の上だが、運の悪いといふものは仕方がないので、此のお賤が二歳の時、其のお屋敷が直に改易に成つてしまひ、仕様がなから深川櫓下の花屋へ此娘を頼んで藝妓に出して、私の喰ひ物にしやうと云ふ了簡でしたが、又私が網打場の船頭の喜太郎といふ者と私通をして、船で房州の天津へ逃げましたがね、それからといふものは悪い事だらけさ、手こそ下して殺さないでも口先で人を殺すやうな事が度々で、私の爲に身を投げたり首を縊つて死んだ男も二三人あるから、皆其の罰で今斯う遣つて居るのも、彼の時に斯ういふ事をしたから其の報いだと諦め、漸う改心をしましたのさ、仕方がないから頭髪を剃こかし破れ衣を古着屋で買つてね、

が、托鉢して歩いて居る中、此の觀音様のお堂には留守居がないからお比丘さん這入つて居ないかと村の衆に頼まれるから、假名附のお經を買つて心經から始め、どうやら斯うやら今では觀音經ぐらゐは讀めるやうに成つたが、此節は若い時分の罪滅しと思ひ、自分に餘計な物でもあつたらしく困る人にやつて仕舞ふくらゐだから、何も物は欲しくありません、村の衆が時々畠の物などを提げて來てくれるから、もう別にうまい物を喰度いといふ氣もなし、只觀音様へ向つてお詫事をして居るせえか、胸の中の雲霧が晴れて善に赴いたものだから、皆さんがお比丘様へ云つて呉れ、此の觀音様も段々繁昌して參り、お比丘さんにお灸を据ゑて貰へのお呪をして貰ひ度いといつて頼みに來るから、私も何も知らないが、若い時分から疝氣なら何處が能いとか齒の痛いのは此處が能いとか聞いてゐるから据ゑて遣ると、向から名を附けて觀音様の御夢想だなど云つて、今ではお前さん何不足なく斯う遣つて居ますが今日圖らずお前達に逢つて、私は尙ほ、觀音様の持つて入らつしやる蓮の蕾で背中を打たれる様に思ひますよ、まだ二人とも若い身の上だから、是から先き悪い事はなさらぬやうに何卒氣をお付けなさい、年を老ると屹度報つて參ります、輪回應報といふ事はないではありませんよ。と云はれ新吉は打萎れ溜息を吐きながらお賤に向ひ、新「何うだえお賤。賤「私も始めて聞いたよ、そんならお母さんお前がお屋敷へ奉公に上つたら、殿様のお手が附いて私が出來たといへば、其のお

屋敷が改易にさへならなければ私はお嬢様。お前は愛妾とか何んとか云はれて居るのだね。尼「お前はお嬢様に違ひないが、私は追出されてでも仕舞ふ位の訝しな譯でね。新「へい其の小日向の旗下とは何處だえ。尼「はい、服部坂上の深見新左衛門様といふお旗本でございます。といはれて新吉は悔りし、新「エ、そんなら此のお賤は其新左衛門と云ふ人の胤だね。尼「左様。新「さうか。と口ではいへど慄と身の毛がよだつ程恐ろしく思ひましたは、八年前門番の勘藏が死際に、我が身の上の物語を聞けば、己は深見新左衛門の次男にて、深見家改易の前に妾が這入り、間もなく、其妾のお熊といふものゝ腹へ孕したは女の子それを産落すとまもなく家が改易に成つたと聞いて居たが、して見ればお賤は腹違ひの兄妹であつたか、今迄知らずに夫婦に成つて、もう今年で足掛七年、あゝ飛んだ事をしたと身體に油の如き汗を流し、殊には又其本郷菊坂下へ捨兒にしたといふのは、七年以前、お賤が鐵砲にて殺した土手の其藏に違ひない、右の二の腕に痣があり、それにべつたり黒い毛が生えて居たるを問ひし時、我は本郷菊坂へ捨兒にされたものである、と私への話し、さては聖天山へ連れ出して殺した其藏は矢張お賤の爲には血統の兄であつたか、實に因縁の深い事、アゝお累が自害の後此のお賤が又斯う云ふ變相になるといふのも、九ヶ年前狂死したる豊志賀の祟なるか、成程悪い事は出來ぬもの、己は畜生同様兄妹同志で夫婦に成り、此の年月互に連れ添つて居たは、あさましい事だと

思ふと總毛立ちましたから、新吉は物をも云はず小さくかたまつて坐り、只ボロ／＼涙を落して居りました。

八十九

尼「とんだ面白くもない話をお聞かせ申したが、まあ緩くりお休みなさい。新「實に貴方の話を聞いて、私も若い時分にした悪事を考へますと身の毛がよだちますよ。尼「お前さん何をいふのです、若い時分などと云つてまだ若い盛りぢやアないか。是から罪を作らん様にするのだ。新「お母様、私は眞以て改心して見ると生きては居られない程辛いから、私を貴方の弟子にして下さいな、外に往き處もないから、お前様の側へ置いて下されば、本堂や墓場の掃除でもして罪滅しをして一生を送り度いで、段々のお話で私は悉皆精神を洗ひ、誠の人になりましたから、どうか私をお弟子にして下さいまし。尼「よくね、私の懺悔話を聞いて、一圖にア、悪い事をしたと云つて、お前さんのやうな事を仰しやるお方も有りますが、其の心持が永く續かないものですから、そんな事を云はなくても、只アア悪い事をしたと思へば、其所が善いので。新「お賤、お前とは不思議の悪縁と知らず、是まで夫婦になつて居たけれ共、表向 盃をしたといふ譯でもないから、夫婦の縁も今日限りとし、己は頭髪を

剃つて、お前のお母さんだが、己はお母さんとは思はない、己を改心させてくれた導きの師匠と思ひ、此のお比丘さんに事へて、生涯出家を遂げる心になつたから、もう己を亭主と思つて呉れるな、己もまたお前を女房とは思はねえから、何卒さう思つて呉れ。賤「おい何をいふんだ、極りを云つてるよ、話を聞いた時には一圖に悪い事をしたと思ふが、少し経つと直に忘れて仕舞ふもの、一寸精進をして、七日仕やうと思つても三日も経つともう宜からうと喰べるのが當前ぢやアないか。新「今迄の魂の汚れたのを悉皆洗つて本心になつたのだから、もう己の傍へ寄つて呉れるな。賤「おや新吉さん何をいふのだよお前どうしたんだえ。新「お前はまあ本當に……どうして羽生村なんぞへ來たんだな。賤「新吉さん、お前何をいふのだ、來たつて、あゝいふ譯で來たんぢやアないか、それが何うしたんだえ。新「お前は何も解らねえのだ、ア、厭だ、ふつ／＼厭だ、どうぞ後生だから己の側へ寄つてくんなんさんな。といはれてお賤は少しムツとした顔付になり、賤「あゝ厭ならおよしなさい、だが私もね、お前と二人で悪い事を仕度くもないが、喰ひ方に困るものだから一緒にしたが、昨日私が斯んな怪我をして恐ろしい顔になつたもんだから、他の女と乗り替へる了簡で、旨くごまかして、私を此寺へ押付け、お前はそんな事をいつて逃げる心だらう。新「決してさういふ譯ぢやアないが、お前どうして女に生れたんだな。隅「何を無理な事をいふの、女に生れたつて、氣遣ひ染切つて居るよ。

新「お前に口を利かされても總毛立つよ。尼「喧嘩をしてはいけません、私もお賤の爲には親だから死水を取つて貰ひ度いが親子でありながらさうも云はれず、又お賤も私の死水を取る氣はありますまい。新「まだ此のお賤は色氣がある、此畜生奴、本當にお前や己は、尻尾が生えて四つん這になつて椀の中へ面ア突込んで、肴の骨でもかじる様な因果に二人とも生れたのだから、お賤手前も本當にお賤でも覺えて、觀音さまへ其身の罪を詫る爲に尼に成り、衣を着て、一文づゝ貰つて歩く氣になん、今更外に仕方がないからよ。賤「なんだね厭だよ、そんな事が出来るものか。新「さう側へ寄つて呉れるなよ、どうか私の頭髮を剃つて下さい。尼「まア、三四日此寺に泊つておいでなさい、又心の變るものだから、互に喧嘩をしないで、私はお經をあげに往つてくるから、少し待つておいでなさい。新「私も一緒に参りませう。賤「おい新吉さんお前本當にどうしたんだえ、私は何うしてもお前の傍は離れないよ。新吉はもう誠に佛心と成りまして、新「お前はまだ色氣の有る人間だ、己は眞に改心する氣に成つた。賤「本當にお前どうしたんだよ。と云ひながら取り纏るのを、新吉は突放し、新「此ん畜生奴、己の側へ來ると蹴飛ばすぞ。といはれお賤は腹の中にて、私の顔貌が斯んなに成つたものだから捨て、逃げるのだと思ふから油斷を致しませんで、此寺に四五日居ります中に、因果のむくい恐ろしいもので、惣右衛門の悴惣吉が此の庵室へ尋ねて参るといふ處から、新吉はもう耐へ兼ねて、草刈鎌を以て自殺致しますといふ、新吉改心の端緒でございます。

九十

偕て申し續きました深見新吉は、お賤を連れて足かけ五年間の旅中の悪行でございます、不圖下總の塚前村と申します處の、觀音堂の庵室に足を留る事に成りました。是は藤心村の觀音寺といふ眞言寺持でございます、一切の事は觀音寺で引受けて致します。村の取附にある觀音堂で、靈顯顯著といふので信心を致します者があつて種々の物を納めますが、堂守を置くと種々の悪い事をしてゐなくなり、村方のものも困つて居る處で、通り掛つた尼の身性も善いといふ處から、これを堂守に頼んで置きました。是へ新吉お賤が泊りましたので、比丘尼は前名を熊と申す女に似氣ない放蕩無頼を致しました悪婆でございます、今はもう改心致しまして、頭髮を剃り落し、鼠の着物に腰衣を着け、觀音様のお堂守をして居る程の善心に成りまして、新吉お賤に向つて、昔の懺悔話をして聞かせると、新吉が身の毛のよだつ程に驚きましたは、門番の勘藏の遺言に、お前は小日向服部坂上の深見新左衛門といふ御旗下の次男だが、生れると間もなくお家改易になつたから、私が抱いて下谷大門町へ立退いて育てたのだが、お家改易の時お熊といふ妾があつて、其腹へ出來たは女といふ事を

物語つたが、そんなら七ヶ年以來夫婦の如く暮して来たお賤は、我が爲には異腹の妹であつたかと、總身から冷たい汗を流して、新吉が、あゝ悪い事をしたと眞以て改心致しました。人は三十歳位に成りませんければ、身の立たないものでございます。お賤は二十八、新吉は三十になり、悪い事は悉く仕盡した奴だけあつて、善にも早く立歸りまして、出家を遂げ、尼さまの弟子と思つて下さい、夫婦の縁は是限りと思つて呉れお賤汝も能く考へて見ろ、今までの悪業の罪障消滅しの爲に頭を剃りこぼつて、何の様な辛苦修行でもし、カン／＼坊主に成つて今迄の罪を滅さなくつちやア往く處へも往かれねえから、己の事は諦めて呉れとはいひましたが、汝は己の眞實の妹だとはいひ兼ねて居り、尼が本堂へ往けば、お熊比丘尼の後に附いて参り、墓場へ往けば墓場へ附いて往く、齋があればお伴を致しませうと出て参り、兎角にお賤の側へ寄るを嫌ひますから、お賤は腹の中にて、思ひがけない怪我をして半面變相になり、斯んな恐ろしい貌に成つたから、新吉さんは私を嫌ひ、大方母親が此の庵主に成つてゐるから、私を此處へ置きにして逃げる心ではないかと、まだ色氣がありますから愚痴許りいつて苦情が絶えませんが。新吉の能く働きます事といふものは、朝は暗い内から起きて、墓場の掃除をしたり、門前を掃いたり、畠へ往つて花を切つて参つて供へたり、遠い處まで餅菓子を買ひに往つて本堂へ供へたり、お齋が有るとお比丘さんの供をして参り、假名振の心經や觀音經を買つて來

て覺えようとして居りますのを見て、尼「誠に新吉さんは感心な事では有るが、一時に思ひ詰めた心はまた解れるもの、まア／＼氣永にしてゐるが宜い、只悪い事をしたと思へばまだお前なんぞは若いから罪滅しは幾らも出来ませう。と優しくいはれるだけ身に應へます。ちやうど七月二十一日の事でございませう、新吉は表の草を刈つて居り、お賤は臺所で働いて居ります處へ這入つて参りましたのは、十二三になる可愛らしい白色なお小僧さんで、名は宗觀と申して觀音寺に居ります、此の小坊主を案内して來ました音助といふ寺男で、二人連で這入つて参り、音「後免なせえ。新「おいでなさい、觀音寺様でございませるか、音「上の繁右衛門殿の宅で二十三回忌の法事があるんで、已ア旦那様もいくんだが、何うか尼さんにもといふので迎えに参つたのだ。新「今尼さんは他のお齋に招かれて往つたから、歸つたらさう云ひませう。音「能く掃除仕やすねえ、墓の間の草ア取つて、跨いで向ふへ出やうとする時にやアよく向脛を打ツつけ、飛つ返るやうに痛えもんだが、若えによく掃除しなさるのう。新「お小僧さんはお小さいによく出家を成さいましたね、お幾歳でございませう。宗「は五十二に成ります。

新「十二に、善いお小僧さんだね、十二位から頭髪を剃つて出家になるのも佛の結縁が深いので、誠に善い御因縁で、通常の人間で居ると悪い事ばかりするのだが、斯う遣つて小さい内から寺へ這入つてれば、悪い事をして高が知れてるが、お父様やお母さんも御承知で出家なすつたのですか。宗「さうぢやアありません、據なく坊さんに成りました。新「據なく、それぢやアお父さんもお母さんも、お前さんの小さい中に死んで仕舞つて、身寄頼りもなく、世話の仕手もないのでお寺へ這入つたといふ事もあります、さうですか。音「なにさういふ譯ぢやアなえが、此のまア宗觀様ぐらえ憫然な人はねえだ。新「ぢやアお父さんやお母さんは無いのでございますか。宗「はい、親父は七年前に死にました、といひながらメソソ泣出しました。音「泣かねえが宜えと云ふに、いつでも父様や母様の事を聞かれると宗觀様は直に泣き出すだ、親孝行な事だが、出家になるのは其處を諦める爲だから泣くなど和尚様がよくいはしやるが矢張り直に泣くだが、併し泣くも無理はねえだ。新「へえ、それは何ういふ因縁に成つて居りますのです。音「ねえ宗觀様、お前の父様は早く死んだつて。宗「七年前の八月死にました。音「それから此人の兄さんが跡をとつて村の名主役を勤めて居ると、其處へ嫁子が這入つて何んともハヤ云ひ様のなえ程心も器量も善い嫁子だつたさうだが、其所に安田八角か、え、一角とか云ふ劍術遣が居て其嫁子に惚れた處が、思ふ様にならねえもんだから、劍術遣の

一角が戀の遺恨でもつてからに此人の兄さんをぶつ斬つて逃げたとよ、其奴に同類の一人が有つて、成んとか云つたのう、ウン富五郎か、其野郎が共謀になつて、殺したのだ、すると此の人の宅の嫁子が假令何んでも亭主の敵討たねえでは置かねえつて、お武家さんの娘だけにきかねえ、なんでも仇討ちをするつて心にもねえ愛想づかしをして、羽生村から離縁状を取り、縁切に成つて出て、敵の富五郎を欺して同類の様子を聞いたたら、一角に横堀の阿彌陀堂の後の林の中へ來てゐるといふから、亭主の仇を討ちぶつ切るべえと思つて林の中へ這入つたが、先方は何んてツても劍術の先生だ女ぐれえに切られる事はねえから、惘然に其劍術遣えが、此人の姉さまをひどくぶつ切つて逃げたとよ、だから口惜しくつてなんねえ、子心にも兄さんや姉さんの敵が討ちてえツて心易い相撲取が有るんだ……風車か……え……花車、さうかそれが、力量アえれえから其相撲取をたのむより仕様がねえと、母親は年い老つてるが、此人をつれて江戸へいくべえと出て來る途で、小金原の觀音堂で以てからに鹽梅が悪くなつたから、種々介抱して、この人が藥い買えにいつた後で母親さんを泥坊が縊り殺し、路銀を奪つて逃げた跡へ、この人が歸つてみると、母様は喉を締められておつ死んでゐたもんだから、ワアワア泣えてる處へ己ア旦那が通り掛り、飛んだことだが、皆因縁だ、泣くなど、兄さんと云ひ姉さんと云ひ母さままでもさういふ死さまをするといふのは約束事だから、敵討なぞを仕様といはねえで兎も

角も己ア弟子に成つて父さまや母さまや兄さん姉さまの追善供養を弔つたが宜からうと勤めて、坊主になれといつてもならねえだから、和尚様も段々可愛がつて、氣永に遣つたもんだから、遂には坊様になるべえとツて漸く去年の二月頭をおつ剃つたのさ。新「へエ、さうでございますか、此のお小僧さんのお宅は何方でございますと。音「え岡田郡か…岡田郡羽生村といふ處だ。新「え、羽生村、へえ其の羽生村で父さんは何といふお方でございます。音「羽生村の名主役をした惣右衛門と云ふ人の子、惣吉さまといふのだ。と云はれ新吉は大きに驚いた様子にて、新「え、さうでございますか、是はどうも思ひ掛けねえ事で。音「なんだ、お前さん知つてるのか。

九十二

新「なに知つて居やアしませんかね、私も方々旅をしたものだから、何處の村方には何といふ名主があるかぐらゐは知つて居ます、惣右衛門さんには、水街道邊で一二度お目に掛つた事がございますがそれはまアおもしろい事でございましたな。といふものゝ、音助の話聞く度に新吉が身の毛のよだつ程辛いのは、丁度今年で七年前、忘れもしねえ八月廿一日の雨の夜に、お賤が此人の親惣右衛門の妾に成つて居たのを、己と密通し、剩へ病中に縊り殺し、病死の體で葬りはしたなれ共、様子をけど

つた甚藏奴は捨てゝは置かれねえとお賤が鐵砲で打殺したのだが土手の甚藏は三十四年以前にお熊が捨兒にした總領の甚藏でお賤が爲には胤違ひの現在の兄を、女の身として鐵砲で打殺すとは、敵同士の奇合、これも皆因縁だ、此の惣吉殿のいふ事を聞けば聞く程脊筋へ白刃を當てられるより尙辛い、ア、悪い事は出来ないものだ、再び油の様な汗を流して、暫くは草刈鎌を手につつたり黙然として居りました。音「あんた、どうしたアだ、鹽梅でも悪いか、酷く顔色が善くねえぜ。新「へエ、なアに私はまだ種々罪があつて出家を遂げたいと思つて、此の庵室に參つて居りますが、此のお小僧さんの様に年もいかないで出家をなさるお方を見ると、本當に羨ましくなつて成りませんから、私も早く出家にならうと思つて、尼さんに頼んでも、まだ罪障があると見えて出家にさせて呉れませんから、斯う遣つて毎日無縁の墓を掃除すると思つて居りますが、今日は陽氣の爲か苦患でございますして、酷く氣色が悪いやうで。音「お前さんの鎌は甚く錆びて居やすね、研げねえのかえ新「まだ研ぎやうを本當に知りませんが、此間お百姓が來た時聞いて教はつたばかりでまだ研がないので。音「己ア一つ鎌をまうけたが、是を見な、古い鎌だが鍛が宜いと見えて、研げば研ぐ程よく切れるだ、全體此の鎌はね惣吉どんの村に三藏といふ質屋があるとよ、其家が死絶えて仕舞つたから、家は取毀して仕舞つたのだ、すると己ア友達が羽生村に居て、此方へ來たときに貰つただアが、汝使つて

見ねえか宜く切れるだが。と云ひながら差出す。新「成程是は宜い、切れさうだが大層古い鎌ですね。と云ひながら取り上げて見ると、柄の處に山形に三の字の焼印がありますから驚いて、新「これは羽生村から出たのですと。音「さうさ羽生村の三藏と云ふ人が持つて居た鎌だ。と云はれた時、新吉は肝に應へて悔り致し、草刈鎌を握り詰め、あゝ丁度今年で九ヶ年以前、累ヶ淵でおひさを此鎌で殺し、續いてお累は此鎌で自殺し、廻つて今また我手へ此鎌が來るとは、あゝ神佛が私の様な悪人をなに助けて置かうぞ、此鎌で自殺しろと云はぬばかりの懲しめか、あゝ恐ろしい事だと思ひ詰めて居りましたが、新「お賤一寸來ねえ、お賤一寸來ねえ。賤「あい、何んだよ、今いくよ。と此頃疎々しくされて居た新吉に呼ばれた事でございますから、心嬉しくづか〜と出て來ました。新「お賤、此處においでなさるお小僧さんの顔を汝見覚えて居るか。と云はれお賤はけんな顔をしながら、隅「さう云はれて見ると此の小僧さんは見た様だが何んだか薩張解らない。新「羽生村の惣右衛門様のお子で惣吉様といつて七歳か八歳だつたらう。隅「おやあの惣吉様。新「此の鎌は三藏さんから出たのだが汝のめ〜知らずに居やアがる。と云ひながら突然お賤の髻を捉つて引倒す。隅「あれ、お前何をするんだ。といふも構はず手元へ引寄せ、お賤の咽喉へ鎌を當てブツリと刺し貫きましたから堪りません、お賤は悲鳴を揚げて七顛八倒の苦しみ、宗觀と音助は悔りし、音「お前氣でも違つたのか、怖

かねえ人だ、誰か來て呉れや。と騒いで居る處へお熊比丘尼が歸つて參り、此體を見て同じく驚きました、尼「お前は此間から様子が訝しいと思つてた、變な事ばかりいつて、少したじれた様子だが、何んだつて科もないお賤を此の鎌で殺すと云ふ了簡になつたのだねえ、確かりしないぢやいけないよ。

九十三

新「いえ〜決して氣は違ひませんが、お比丘さん、お賤も私も斯う遣つて居られない譯があるのでございます、お賤汝は己を本當の亭主と思つて居るが、汝は定めて口惜しいと思ふだらうが、汝一人は殺さねえ、汝を殺して置き、己も死なねばならぬ譯があるんだ、汝は知るめえが、あゝ悪い事は出來ねえものだ、此の庵室へ來た時にはお前さんの懺悔話を聞くと若え時に小日向服部坂上の深見といふ旗下へ奉公して、殿の手がついて出來たのがお賤だと仰しやつたが、私も其の深見新左衛門の次男に生れ、小さい時に家は改易と成つたので町家で育つたもの、腹は違へど胤は一つ、自分の妹とも知らないで七年跡から互に深く成つた畜生同様の兩人、此の宗觀様のお父様は羽生村の名主役で惣右衛門といふお方でしたが、お賤を深川から身受けして別に家を持たせ樂に暮させてお置きなすつたものを私は悪い事をするのみならず、申すも恐ろしい事だが、惣右衛門様をお賤と私とで

縊り殺したのでございます。斯う申したら嘸お驚きでございませう、誰も知つた者はありません、病死の積りで葬つて仕舞つたが、人は知らずとも此の新吉とお賤の心には能く知つて居ります。畜生のやうな兄妹が斯うやつて罪滅しの爲夫婦の縁を切つて、出家を遂げやうと思ひました處へ宗觀様がおいでなすつて、これ／＼と話を聞いて見れば迎も生きては居られません、此の鎌は女房のお累が自害をし、私が人を殺めた草刈鎌だが、廻り廻つて私の手へ来たのは此の鎌で死ねといふ神佛の懲しめでございますから、其のいましめを背かないで自害致しまする、私共夫婦のものは、あなたの親の敵でございます、嘸憎い奴と思召ませうから何卒此の鎌でズ／＼に斬つて下さいまし、お詫びの爲め一言申し上げますが、お前さんの兄さん姉さんの敵と尋ねる劍術遣の安田一角は、五助街道の藤ヶ谷の明神山に隠れて居るといふ事は、妙な譯で戸ヶ崎の葎簀張で聞いたのですが、敵を討たければ、其の相撲取を頼み、其處へ往つて敵をお討ちなさい、安田一角が他の者へ話してゐるのを私が傍で聞いて居たから事實を知つてるのでございます、お賤、汝と己が兄妹といふことを知らないで畜生同様夫婦に成つて、永い間悪い事をしたが、もう命の納め時だ、己も今直に後から往くよ、お前宗觀様にお詫を申し上げな。賤「あい／＼。と血に染まつたお賤は聴く毎にさうであつたかと善に歸つて、やう／＼血だらけの手を合せ、苦しき息の下から、賤「惣吉様誠に濟まない事をしました、堪忍

して下さいまし、新吉さん早く惣吉さんの手に掛つて死度い、あゝ、お母さん堪忍して下さい。と苦しいから早く自殺しやうと鎌の柄に取り纏るを新吉は振り拂つて、鎌を取直し、我左の腹へグツと突き立て、柄を引いて腹を掻切り、夫婦とも息は絶え／＼に成りました時に、宗觀は、宗「あゝ、お父さんを殺したのはお前たち二人とは知らなかつたが、思ひ掛けなくお父さんの敵が知れると云ふのは不思議な事、また兄さんや姉さんを殺した安田一角の隠れ家を知らせて下され、斯んな嬉しい事はありませんから決して憎いとは思ひません、早く苦痛のないやうにして上げ度い。と云ひながら後をふりかへると、音助はブル／＼して腰も立たないやうに成つて居ました。宗「お父さんや兄さん姉さんの敵は知れたが、小金原の觀音堂でお母さんを殺した敵はいまだに分らないが、悪い事をする奴の末は始終は皆斯ういふ事に成りませう。といふのを最前から聞いてゐました熊比丘は、袖もて涙を拭ひながら宗觀の前へ来て、尼「誠に思ひ掛かない、宗觀様お前さんかえ。宗「へえ。尼「忘れもしない三年跡の七月小金原の觀音堂でお前さんのお母さんを縊り殺し、百二十兩と云ふ金を取つたは此のお熊比丘尼でございますよ。宗「エ、これは。と宗觀も音助も悔り致しました。絶え／＼に成つてゐました新吉は血に染まつた手を突き、耳欝て聞いてをります。尼「私も種々悪い事をした揚句、一度出家はしたが路銀に困つてゐる處へ通り合せた親子連の旅人小金原の觀音堂で病に苦しんで居る様子だ

から、此の宗親様をだまして薬を買ひに遣つた跡で、お母様を殺したは此お熊、私はお前様のお母様の敵だから私の首を斬つて下さい。と新吉が持つてゐました鎌を取つて、お熊比丘尼は喉を掻切つて相果てました。其内村の者も参り、観音寺の和尚様も来て、何しろ捨ては置かれなと早速此由を名主から代官へ訴へ検死濟みの上、三人の死骸は観音堂の傍へ穴を堀つて埋め、大きな墓標を立てました。是が今世に残つてをります因果塚で、此の血に染まつた鎌は藤心村の観音寺に納まりました。扱宗親は敵の行方が知れた處から、還俗して花車を頼み、敵討が仕度いと和尚に無理頼みをして観音寺を出立するといふ、是から敵討に成ります。

九十四

塚前村の観音堂へ因果塚を建立致し、観音寺の和尚道恩が盡く此因縁を説いて回向を致しましたから、村方の者が寄集まつて餅を搗ぎ、施餓鬼が納まりました。斯くて八月十八日施餓鬼祭を致しますと、観音寺の弟子宗親が方丈の前へ参りまして、宗「旦那様。道「いや宗親か、なんぢや。宗「私はお願ひがありますが、旦那さまには永々御厄介に相成りましたが、私は羽生村へ歸り度うございませす。道「ウン、どうも貴様は剃髮する時も厭がつたが、出家になる因縁が無いと見える、何故羽生村

へ歸り度いか、歸つた處が親も兄弟もないし別に知るものもない哀れな身の上ぢやないか、よし歸つた處が農夫になるだけの事、實何うしても出家は遂げられんか。宗「はい私は兄と姉の敵が討たうございませす。道「これ、此間もちらりと其事も聞いたから、音助にも宜う宗親にいふてくれと言附けて置いたが、敵討といふ心は悪い心ぢや、其の念を断らんければいかん、執念して飽くまでも向を怨むには及ばん、貴様の親父を殺した新吉夫婦と母親を殺したお熊比丘尼は永らく出家を遂げて改心したが、人を殺した悪事の報いは自滅するから討つがものは無い、己と死ぬものぢやから其の念を断つ處が出家の修行で、飽く迄も怨む執念を断らんければいかん、それに貴様は幾歳ぢや、十二や十三の小坊主が、敵手は劍術遣ぢやないか、みすく返り討になるは知れてゐる、出家を遂げれば其の返り討になる因縁を免れて、亡なられた両親やまた兄嫂の菩提を弔ふが死なれた人の爲ぢや、え。宗「ハイ毎度方丈様から御意見を伺つてをりまするが、此頃は毎晩／＼兄さんや姉さんの夢ばかり見てをります、昨夜も兄さんと姉さんが私の枕元へ來まして、新吉が敵の隠家を教へて知つてゐるのに、お前が斯う遣つてべん／＼と寺にゐてはならん、兄さんも姉さんも草葉の蔭で成佛する事が出来ないから敵を討つて浮ばして呉れると、あり／＼と枕元へ來て申しました、實に夢とは思はれません、してみると兄様や姉様も迷つてゐると思ひますから、敵を討つて罪作りを致しますやうでございませすけれど

も、どうか兩人の怨みを晴して遣り度うございます。道「それがいかん、それは貴様の念が断れんからちや、平常敵を討ち度い、兄さんは怨んではせんか、姉さんも怨んではせんか、と思ふ念が重なるに依つて夢に見るのちや、それを佛書に睡眠と説いて有る、睡は現眠はねむる汝は睡つてばかり居るから夢に見るのちや、敵討の事ばかり思うてゐるから、迷ひの眠りぢや、それを避ける處が佛の説かれた豫ていふ教へぢや、元は何も有りませんものぢや、眞言の阿字を考へたら宜からう、此の寺に居て其の位な事を知らん筈は無いから諦めえ。宗「ハイ、何うしても諦められません、永らく御厄介に成りまして誠に相済みません、敵討を致した上は出家に成りませんが、屹度御恩報じを致しますから、どうかお遣なすつて下さいまし、強つて遣つて下さいませければお寺を逃出し黙つて羽生村へ歸ります。道「いや、そんならば無理に止めやせん、皆因縁ぢやからそれも宜からう、やるが宜からうが、確かりした助太刀を頼むが宜い、先方は立派な劍術遣ひ、殊に同類も有らうから。宗「はい親父の時に奉公をしたもので、今江戸で花車といふ強いお相撲さんが有りますから。其人を頼みます積りで。道「若し其花車が死んでゐたら何うする、人間は老少不定ぢやから、昨日死にましたといはれたら何うする、人間の命は果敢ないものぢやが、あゝ仕方がない、往くなら往けぢやが、首尾よく本懐を遂げて念が断れたらまた會ひに来てくれ。と實子のやうな心持で親切に申します。

宗「これがお別れとなるかも知れませんが、誠に言葉の背きまして相済みません。道「いや、念が断れんと却つて罪障になる、これは小遣に遣るから持つて往け。と、三年此方世話をしたものゆゑ實子のやうに思ひまして、和尚は遣りともながるのを、強つてといふので、音助に言付け萬事出立の用意が整ひましたから立たせて遣り、漸く五日目に羽生村へ着致しましたが、聞けば家宅は空屋に成つてしまひ、作右衛門といふ老人が名主役を勤めてをり、多助は北阪の村はづれの堤下に獨身生計をしてゐるといふから遣つて参り、宗「多助さん、多助爺やア。多「あい、なんだ坊様か、今日は些とべえ志が有るから、錢い呉れるから此方へ這入んな。宗「修行に來たんぢやアない、お前は何時も達者で誠に嬉しいね。多「誰だ。宗「はいお前忘れたかえ、私は惣吉だアね、お前の世話に成つた惣右衛門の悴の惣吉だよ。

九十五

多「おい成程えかくなつたねえ、まア、坊様に成つたアもんだから些とも知んねえだ、能くまア來たあねえ。と嬉し涙に泣き沈み漸々涙を拭ひながら、多「あゝ三年前にお前さまが宅を出て往く時はせつなかつたが、敵討だといふから仕方がねえと思つて出して上げたが後で思え出しては泣いてばかり

わたが、作右衛門様の世話でもつて、何うやら、斯うやら取附いて此處にゐやすが、お前様を訪ねて
 えつても訪ねられねえだが、お母様は小金原で殺されてからお前様が坊様に成つたといふ事ア聞いた
 から、チヨツクラ往きてえと思つても出られねえので無沙汰アしやしたが、能くまア来て下せえやし
 た、本當に見違へるやうな大く成つたね。惣一爺やア、私は和尚様に願ひ無理に暇を頂いて、兄さん
 や姉さんの敵が討たくつて来たが、お父様お母様の敵は知れました。とお熊比丘尼の懺悔をば新吉夫
 婦が細やかに聞き、遂に三人共自殺した處から、村方の者が寄集まつて因果塚を建立した事までを話す
 と、多助も不思議の思ひをなして、是から作右衛門にも相談の上敵討に出ましたが、さういふ處に隠れ
 て泥坊をしてゐるからには同類も有らうから、私とお前さんと江戸へいつて、花車關を頼まうと頼て多
 助と惣吉は江戸へ遣つて参り、花車を便りて此の話を致して頼みました。此の花車といふ人は追々出
 世をして今では二段目の中央まで来てゐるから、師匠の源氏山も出したがりませんのを、義に依てお暇
 を下さいまし、前に私が奉公をした主人の惣右衛門様の敵討をするのでございますからと、義に依つ
 ての頼みに、源氏山も得心して芽出度出立いたし、日を経て彼の五助街道へ掛かりましたのが十月中
 旬過ぎた頃もう日暮れ近く空合はドンヨリと曇つてをります。三人はトツトと急いで藤ヶ谷の明神
 山を段々なだれに登つて参りますと、樹木生茂り、晝でさへ薄暗い處殊には曇つてをりますから

漸々足元が見えるくらゐ、落葉の埋れてゐる上をザク／＼踏みながら花車が先へ立つて向ふを見る
 と、破れ果てたる社殿が有つてズーツと石の玉垣が見え、五六本の高い樹の有る處でポツポツと焚火を
 してゐる様子ゆゑ、彼處らが隠れ家ではないかと思ひながら傍の方を見ると、白いものが動いてをり
 まするが、なんだか遠くで確と解りません。花「多助さん確かりしなせえ。多「もう参つたかねえ、
 私はね劍術も何にも知んねえが此坊様に怪我アさせ度くねえと思ふから一生懸命に遣るが、あんなア
 確かり遣つて下せえ。花「私イ神明様や明神様に誓を立てゝるから、私が殺されても構はねえが、坊
 様に怪我アさせ度くねえ心持だから、お前度胸を据ゑなければいかんぜ。多「度胸据ゑてる心持だア
 けんども、ひとりでに足がブル／＼顫へるよ。花「氣を沈着けたが好え。多「氣イ沈着ける心持で力
 ア入れて踏ん張れば踏ん張る程足イ顫へるが、何ういふもんだらう、私イ斯んなに身體顫つた事アね
 え、四年前に瘡イふるつた事が有つたがね、其時は幾ら上から布團をかけても顫つたが、丁度其時の
 やうに身體が動くだ。花「ハテナ、白い物が此方へころがつて来るやうだが何だらう、多助さん先へ
 立つていきなよ。多「冗談いつちやアいけねえ、あの林の處に悪漢が隠れてゐるかも知れねえから、
 お前さん先へいつてくんねえ。と云ひながら、やがて三人が彼の白い物の處へ近附いて見ると、大杉
 の根元の處に一人の僧が素裸體にされて縛られてゐまして、傍の方に笠が投げ出して有ります。

九十六

花「おい多助さん。多「え。花「愕然に、坊様だが泥坊に縛られて災難に逢しやツたと見え素裸體だ。多「なにしても足がふるへて困る。花「さう顫へてはいけねえ。と云ひながら彼の僧に近づき、花「お前さん、泥坊のために素裸體にされたのですか。僧「はい、災難に逢ひました、木風まで参ります。途中でもつて馬方が此道が近いからと云うて此處を抜けて参りますと、悪漢が出ましたものぢやから、馬方は馬を放り出した儘逃げて了ふと、私は大勢に取巻かれて衣服を剝がれ、直ぐ逃がして遣る。と此方の勝手が悪い、己ら達が逃げる間此處に辛抱してゐると申して、私は此木の根方へ縛り附けられ、何うも斯うも寒くつて成りません、お前さんたちも先へ往くと大勢で剝がれるから、後へお返りなさい。道「なにしろ繩を解いて上げませう、賞僧は何處の人だえ。僧「有難うございます、私は藤心村の觀音寺の道恩といふものです。と聞くより惣吉は打驚き駈けて参り、惣「え、旦那様か、飛んだ目にお逢ひなされました。道「お、宗觀か、お前此山へ敵討に來たか。惣「はいお言葉に背いて参りました、多助や、私が御恩に成つた觀音寺の方丈様だよ。多「え、それはマア飛んだ目にお逢ひなせえやしたね。道「酷い事をする、人の手は折れやうと儘、酷く縛つて、あゝ痛い。と兩腕を摩

りながら、道「中々同類が多勢居る様子ぢやから歸るが宜い。花「なにしても風を引くといけなから、それぢやア斯うと、私の合羽に多助様お前の羽織和尚様にお貸し申さう、さア和尚様、これをお着なさい、それから多助様此處を下りて人家のある處まで和尚様を送つてお上げなさい。多「己此處まで惣吉様の供をして、今坊様を連れて山を下りては四年五年心配打つた甲斐がねえ。花「惣吉様が永らく御厄介に成つた方丈様だから連れてつて上げなさいな。多「敵も討たねえで、己山を下りるといふ理合はねえから己ア往かねえ、坊様に怪我アさせてはなんねえから。花「そんな事をいはずに往つておくんなせえ。惣「爺やア、どうか和尚様をお送り申してお呉れ、お前が往かなけりア私が送り申さなければならぬのだから、往つておくれな。多「ぢやア何うしても往くか、己此處まで來て敵も討たずに後へ引返すのか。なんだつて此坊様はお縛られて居たんだナア。とブツブツいひながら道恩和尚の手を引いて段々山を下り、影が見えなくなると、樹立の間から二人の悪漢が出て参り、甲「手前たちは何だ。花「はい私共は安田一角先生が此方にお出なさると聞きまして、お目にかゝり度く出ましたもので。乙「一角先生などといふ方はおいでではないワ。花「私共はおいでのことを知つて参りましたのですが、一寸お目にかゝり度うございます。乙「少し控へて居ろ。と二人の悪漢は、互に顔を見合せ耳こすりして、林の中へ這入つて、一角に此由を告げると、一角は心の中にて己の名

を知つてゐるのは何奴か、事に依つたら、花車が来たかも知れないと思ふから、油断は致しませんで、大刀の目釘を露し、遠くに様子を伺つて居りますと、子分がそれへ出て、甲「やい手前は何者だ。

九十七

花「いえ私は花車重吉といふ相撲取でございますが、先生は立派なお侍さんだから、逃げ隠れはなさるまい、慥かに此處にゐなさる事を聞いて来たんだから、尋常に此惣吉様の兄さんの敵と名のつて下せい、討つ人は十二三の小坊主様だ、私は義に依つて助太刀をしに参つたものだから、何十人でも相手になるから出てお呉んなせい。といはれ悪漢どもは、あゝ豫て先生から話のあつた相撲取は此奴だなと思ひましたから、直に一角の前へ行きまして此事を告げました。一角も最早観念いたしてをりまするから、安「さうか、よい〜手前達先へ出て腕前を見せてやれ。といはれ、悪漢どもも相撲取だから力は強からうが劍術は知るめえから引包んで餓鬼諸共打つてしまへとまづ四人ばかり其處へ出ましたが、怖いと見えまして、甲「尊公先へ出る。乙「尊公から先へ。丙「相撲取だから無闇にさういふ譯にもいかない、中々油断がならない、尊公から先へ。丁「ちやア四人一緒に出やう。と四人均しく刀を抜きつれ切つてかゝる、花車は傍らに在つた手頃の杉の樹を抱へて總身に力を入れ、ウーン

と揺りました、人間が一生懸命になる時は鐵門でも破ると申すことができます。花車は手頃の杉の樹をモリ〜と拗り切つて取直し、満面朱を灌ぎ、掴み殺さん勢ひにて、花「此野郎ども。といひながら杉の幹を振上げた勇氣に恐れ皆近寄る事が出来ません。花車は力にまかせ杉の幹をピウ〜と振廻し、二人を叩き倒す、一人が逃げにかゝる處を飛込んで打倒し、一人が急いで林の中へ逃げ込みますから、跡を追つて参ると、安田一角が野袴を穿き、長い大小を差し、長髪に撫で付け、片手に種ヶ島の短銃に火繩を巻き附けたのを持つて、安「近寄れば撃つてしまふぞ、速かに刀を投出して恐れ入るか、手前は力が強くても此れでは仕方があるめえ。と鼻の先へ飛道具を突き附けられ、花車はギョツとしたが、惣吉を後へ圍んで前へ彼の杉の幹を立てたなりで、花「卑怯だ〜。と相撲取が一生懸命に呷鳴る聲だから木霊致してピーンと山間に響きました。花「手前も立派な侍ちやアねえか、斬り合ふとも打合ふともせえ、飛道具を持つとは卑怯だ、飛道具を置いて斬合ふとも打合ふともせえ。一角もうつかり引金を引く事が出来ませんから威しの爲に花車の鼻の先へ尻ひを付けてをりますから何程力があつても仕様がありません、進むも退くも出来ず、進退谷まつて花車は只ウーン〜と呻つてをります。多助は彼の道恩を送つていきせき歸つて來ましたが此の體を見て驚きましてブル〜と顫へてをります。すると天の助けでございませす、時雨空の霽として、今まで霽れてゐたのが俄かにド

ツト車軸を流すばかりの雨に成りました。さう致しますと生茂つた木葉に溜つた雨水が固まつてガラガラと落ちて参つて、一角の持つてゐた火繩に當つて火が消えたから、一角は驚いて逃げにかゝる處を花車は火が消えればもう百人力と飛び込んで無茶苦茶に安田一角を打据ゑました、これを見た悪漢どもは「それ先生がと駈出して來ましたが側へ進みません、花車は傍を見向き、花「此野郎共傍へ來やアがると捻り潰すぞ。といふ勢ひに驚いて樹立の間へ逃げ込んで仕舞ひました。花「サア惣吉様遣つてお仕舞ひなせえ、多助様、お前助太刀ぢやアねえか確りしなせえ。惣吉は走り寄り、惣「關取誠に有難う、此の安田一角め兄さん姉さんの敵思ひ知つたか。外「此野郎助太刀だぞ。と惣吉と兩人で無茶苦茶に突くばかり、其のうち一角の息が止ると、二人共がつかりしてペタ／＼と坐つて暫くは口が利きません。花車は安田一角の鬢を取り、拳を固めてボカ／＼打ち、花「よくも汝は恩人の旦那様を斬りやアがつた、お隅様を返討にしやアがつたな此の野郎。といひながら鬢の毛を引抜きました。同類は皆ちり／＼に逃げてしまつたから、其の村方の名主へ訴へ、名主からまたそれ／＼へ訴へ、だんだん取調べになると、全く兄弟の仇討に相違ないことが分り、花車は再び江戸へ引返し、惣吉は十六歳の時に名主役となり、惣右衛門の名を相續いたし、多助を後見いたしました。花車が手玉にいたしました石へ花車と彫り付け、之を花車石と申しまして今に下總の法恩寺中に残りを行います。是で先づお芽出度累ヶ淵のお話は終りました。

(據小相英太郎速記)

怪談乳房榎

怪談乳房榎

一

儲、今回より引續きまして御機嫌を伺ひます怪談乳房榎と申しますお話は、江戸名所圖會にも出てをりますが、高田砂利場村の、大鏡山南藏院といふ眞言宗のお寺の天井へ、雌龍雄龍を墨繪で描きました菱川重信といふ人のお話で、この重信は雄龍だけを彼の天井へ描きまして、非業な最後を遂げて遂に望みを果しませんから、死にましてから幽霊が、描きかけました雌龍を又描いたと申す事で、末には赤塚村の乳房榎の前で、七歳になります重信の遣子眞與太郎が、父の敵を討ちますといふ凄（さい）いお話でございますが、何稼業でも、人に名人だ上手だと云はれます程の人はその致します事にも、魂（たましひ）精神が這入ると申す事で、取分けまして繪師などは、描いた物に魂が入つたといふ事は、まゝ聞きます所で、古法眼元信の描きました馬は、夜なく脱け出しまして萩を喰べたの、誰か精神を籠めて

描いた龍は、水を飲みに出かけたなど、古來から云ひ傳へますが、其の内でも圓山派といふ一派を
 廣めました圓山應舉などいふ人は、名人でございますが、この應舉先生が、不斷飲みにお出でなさ
 る京都の或る所に料理屋がございましたが、此の家は老人夫婦に娘が一人あるといふ、極真面目に、
 うまい物ばかりを喰はせる、随分流行見世でございましたが、物には盛衰があるので、近頃はさつ
 ぱりと客がない。應舉先生は大人でございますから、流行り流行らないなどには頓着なさいませ
 んで、應「今日は、何か旨い物があるかの、一杯つけてくれる。なんかとお出でになります。寂れまし
 たもんですから、家の普請や繕ひも碌々に致しませんから、根太が腐つて、家へ總體曲りが出て、襖
 や障子の開閉が思ふ様でない。疊はといふと、一昨年の七月裏返したつ切で、眞黒になつて所々へ未
 練に薬袋紙なんぞを、櫻の形に切つて張りつけて、破れを胡麻化してある。先生は娘に酌をさせて、
 御酒を召上つてお出で、下から上つて参りました主人は手をつきまして、亭「先生様、毎度御最良
 にお出で下さいまして有難うございます、斯様なむさい所へ。應「いよ……誰かと思へば内の御亭主
 か、今の造り身はいつもの手際ぢや、一つ呑まんか。などものに頓着なさらぬ應舉先生、主人の老
 人は、盃を受けまして、見世の寂れました事を話しまして、亭「どうか先生様、元の様に繁昌致しま
 する御工風はございませぬか。と水つ鼻と涙を交ぜまして申しますと、應「それは氣の毒ぢや……が

案じぬがよいぞ、己が今度來る時に、元の通り見世が繁昌する様に、何か認めて持つて來て遣はすぞ。
 亭「それはまア有難うございます。應「今度參る時に屹度持つて來るぞ。と其日はお歸りになつた
 が、四五日置きまして、先生は風呂敷へ包んだ物を御持參でお出でになつた。應「さア約束ぢやから認
 めて持つて來た、定めし表装いたすのも迷惑であらうと思つて、床へ懸けるばかりにして持つて來た
 ぞよ。と直に其の掛物を床へ懸けさせまして、その日も相變らず御酒を飲んでお歸りになつた。後で
 主人夫婦は悦びまして、どんな物を描いて下さつたかと、件の軸の畫を見ますと、幅の廣い絹地へ、
 二十歳か十九ばかりな美人が病みあげくと見えますして、髪が亂れてかう……顔へ懸かつて立膝をし
 て、右の手で脱けた髪の毛を掴みまして、左の手でかう……その毛を思はず絞つてをりますと、其の
 手へ血が滴つてをりまして、傍にぼんやりした薄つ暗い角行燈があるといふ、此の傍に坐つてをるの
 が美しいから如何にも凄い、とんと四谷怪談のお岩が髪梳き場の形で、よく出來てをりますが、潰れ
 かゝつて今日は見世を仕舞はるか、翌日は戸を締めやうかと思つてをります所へ、忌はしい畫でござ
 いますから、主人の爺さんは、えゝ縁起が悪い、こんな物を、と眼を剥き出して、いや怒るまいこと
 か大層怒りました。

二

主人夫婦は恐ろしく怒つて居ります所へ、應學先生がいつもの通り遣つてお出でなさいました。應「どうだな、今日は珍らしい物があるかな、一杯飲ましてくりや。とトン／＼二階へお上りに成ると、昨日の軸が床に懸けてある。日頃最眞にして下さる大切なお客だから、いつもは婆さんと娘が飛出して来て世辭をいふのだが、今日は如何したのか無愛想で附きが悪い。頓て主人の爺さんが二階へ遣つて参りまして、享「旦那さま、昨日は有難うございます。と禮を云ひます。應「いや、是は御亭主、きのふの掛物を早速かけて呉れて悦ばしい、何んとう出來たらうな。と少し自慢氣で仰しやると、主人は變なあんばいで、享「へい、ですが先生様、昨日下さいましたお掛物の畫がどうもハヤ少し。と一旦腹は立ちました、流石に面と向つては云はれませんが、口籠もつてをりますのを、早くも見て取つた先生。應「あゝ、さうか何か……凄いと書いて遣はしたから畫柄が悪いと申すのぢやな。享「へい、何でございますから何で、實は、あの、御存じの通り商賣が閑暇で、こんなに寂れましたもんだから畫を願ひましたので、それにあんな女の病人なんぞの縁起の悪い淋しい畫では、愈々お客さまが來なくなりませうから、あれはまづ眞平御免下さいまし。と額へ汗をたらして手拭で拭きな

がら申します。先生はお笑ひなすつて、應「はゝゝ、如何にも亭主、手前が氣に懸けるのは尤もぢやよ、はア無理ではない、己が参つた時に、いつもと違つて入らつしやいと何共申さないから、如何致した儀かと存じ居つた所ぢや、これ、拙者が申す事をよく承はるがよいぞ、酒を持つて参れ、これ、然う眞面目で居てはいかんな、困るよ、あれは斯ういふ譯ぢや、陰は陽に歸るといつての、何事も極度まで参れば又元へ戻るのが道理で、其方の家も左様ぢや、斯様に寂れ果て、今日にも廢さう止めやうとまで決心いたすのは、是即ち陰の極度まで参つたので、此上は元の陽に歸するより道はない、己が昨日認めて遣はした畫も其通りぢや、女が病に苦しんで死になん／＼と致しをる忌はしい圖ぢやが、これ陰の極度で、最う爰まで参つては、是から徐々陽氣に歸るより仕方がないので、其方の商賣とても斯う寂れて陰氣になつたから、是からは昔の陽氣に赴くのが順道ぢや、陰氣の畫ではあらうが、己も身不肖ながら圓山應學ぢや、意に思ふ處があつて認めたあの軸、外さず懸けて置け、陰も陽にかへる時節があるぞ。といつもの通り御酒を召上つて先生はお歸りになりました。後で爺さんや婆さんは、額を集めまして相談をいたしました、まア御最眞の先生があれ程仰しやつた事、丁度掛物は皆賣つて仕舞つて無い所ですから、其のまゝ懸つ放しにいたして置きました。さう致しますと忽ち此の評判が京都中へ弘まりました、「お前彼處の幽霊の畫を見なはれたか、應學はえらい者ぢや

な、あの女が斯う……遣つてゐる髪の毛から、血がたら／＼滴つてをる凄さ、私なんぞは夜さり寝た
 ら夢に見て魘されました。いや、私まだ見に行かん、二朱ばかり遣うて飲みにいって其軸を見て來ま
 せう。「ほんに見て來やしやれ、えらいもんぢやさかい。とわい／＼市中で噂を致します。さア繁昌を
 致したのは此の料理屋で、一年ばかりの間に、此の掛物の畫を見たいといつて來る客で、思ひ掛
 けなく商賣があつて、二年目の春には毀れかゝつてをりました普請までいたし、元の通り立派な見世
 になつたといふ。また應舉先生のお腕前の勝れた所も諸人が知りまして、高名の上にもまた高名な先生
 にお成り遊ばして、諸大名より幽霊の極凄い所を絹地へ描いてくれ、また此方からは「唐紙半切でい
 いから一寸小粋な幽霊を、なんぞと山の様に御注文があつて、唯今もつて應舉の幽霊の畫と申します
 と高價な物ださうにございます。此の應舉先生の幽霊の畫は、あながち魂が這入つて動き出したと
 いふ譯ではございせんが、名人上手と成りますと、随分不思議な事がありますもので、高田砂利場
 村の大鏡山南藏院の天井へ雄龍雌龍を墨繪で描かれました菱川重信といふ繪師の先生は、このお方は
 元秋元越中守様の御家中で、二百五十石お取んなすつた間與島伊惣次といふお人でございましたが、
 生得畫がお好きで、土佐狩野はいふに及ばず、應舉、光琳の風をよく吞込んで、ちよつと浮世繪の方
 では又平から師宣、宮川長春などいふ所を見破つて、其上へ一蝶の艶のある所をよく味はつて、い

かにもお筆先が器用で、一寸描く畫が生きて居る様だといふ高名を慕ひまして、畫を描いて下さいと
 頼み人が大層あります。家中では頻りに此事の噂が高くなりまして、間與島は畫をよく描くさうだ、
 畫の禮ばかりでも榮に暮される、羨ましいなどやつかむ輩が澤山あります。其頃は世が開けません
 から、少し利口だとか學者だとかいひますと、直に公儀からお糺しがあり、唯今なら探偵があります
 から、間與島は自然とお上のお首尾が悪く成りまして、何も是といふ落度はございせんが、終に永
 のお暇に成りまして、柳島の或る大商人が居りました寮を求めまして、是へ引移りましたが、二百五
 十石も取つておいでのお人だから、何不自由なく、お好きな畫を描いてお暮しなさいましたが、お年
 は三十七といふので、美しい男ではないが、元がお武家だから何となく立派で、品のよいお人にて、こ
 のまた御家内のおきせ様といふのが頗る美婦でいらつしやる、年は二十四でございますが、器量が好
 いせぬか廿歳位にしか見えませんで、役者の瀬川路考にどこやら倅が似てゐるからといふので、誰
 いふとなく柳島路考く〜と申します。

間與島伊惣次様の御家内おきせ様は、前以て申し上げます通り、柳島路考といふ噂をされる程な頗

る美婦でありますが、却つてこれが其身に災を及ぼす種と、後に思ひ當りますが、御夫婦中は至つてお睦ましいが、満つれば缺くるとやらで、お子さんがない。よく醫へに金のあるお方を祿人といひ、子のある人の事を福人とか申しますが、この重信先生にはお子がない故、どうか一人ほしいものだ、と神へ願込めなどを致して居りましたが、人の一心は貫くもので、おきせ様が懐妊におなりなすつて酸っぱいものが喰べたいといふ。重信先生は大悦びで、何ともなさらぬが、お醫者にかけて薬を飲ませる、高い所などへは必ず手を上げてはならぬぞ、と大事になされます。十月満ちまして、寶曆二年の正月元日に出産がござりました。然もお生れになつたのは男の子だといふので、重信先生はころころ悦ばれまして、名を眞與太郎と名付けまして、蝶よ花よと慈愛んで育てられ、成人をするのを待兼ねておいでなされる。丁度其年の三月の事で、向島の櫻が眞盛りで、取わけ今日は十五日故梅若でござりますから、花見がてら參詣しやうと、おきせ様は丸鬘に結ひまして、まだ半元服で、下女と五十一に成ります正介といふ親爺を供に連れて、重信先生は細身の大小に黒の羽織、淺黄博多の帯、雪駄ばきで、眞與太郎を下女に背負せまして、ぞろ／＼雑沓の中を梅若へお参りなすつて、お歸りにお寄りになりましたのは、小梅の茶屋でござりましたが、此の茶店の婆さんは柳島近所のもので馴染でござりますから、重信先生は門口から、重「どうした、婆さんいそがしいかの。と聲を懸け、婆「おやまア、

何方さまかと存じましたら、柳島の先生様、御新造様、おや坊ちゃんをお連れなさいまして……お花見でござりますか、それはまアよくお出で……おや是は正介さん、お花どももお供で御苦勞様、今日は梅若様の涙雨つて、昔からいひまして、雨が降るもんでござりますが、まア降りませんでよい御都合で、もうお子様方をお連れ遊ばして、道でお降られなすつて御覽遊ばせ、それこそ大變でござります、おやまアまだお禮を申しませんで、先達は誠に結構なお菓子を見つけた事はないと申して悦びました、内あなた爺なんぞは生れてから、あんな結構なお菓子は見た事はないと申して悦びました、貴方、有難うござりました、さアお茶を一つ、もういけない澁茶でござります。と一人で喋べつてをります。重信先生を初め皆床几へ腰をお懸けなすつて、眞與太郎に小便などをやつてをられました、重信先生は、隅の方に腰をかけて、後向きになつて辨當を遣つてをります三十ばかりの色黒い男に聲をかけまして、重「おい／＼其處に居るのは竹六ぢやアないか。この竹六と申します人は淺草田原町にをります地紙折でござりますが、只今は其様ものはございせんが、此頃は、地紙折と申して、扇の地紙と骨を箱へ入れて包んで背負ひましては、花見なんぞの場所へ商ひに持つて参りますので、これはよく人が即席に畫や書、詩歌などを扇へ書きます事が流行りましたから、それを直に其座で折まして骨をさして出すといふ、それは手際なものださうにござります。竹六は重信でござい

ますから、竹「いよ……これは、何方かと存じましたら、柳島のお先生様、御新造様、坊ちやんをお連れ遊ばしてお花見、どうも誠に綺麗で、いえ存外御無沙汰をいたしました、いよこれは正介さん、お花さんいつも美しいね、今日は御新造様のお供で、白粉をおつけなさると平常とは違ふよ、器量がずつと上るからかかしい……エー御無沙汰を致しましたのは、此の三四月頃はあなた、書畫會が多うございますので、何か席上へ参つて慾張筋で、傍から地紙が賣れますもんですから、終つひ御無沙汰に相成りましてどうも恐れ入ります、正介どんあの節は何うも申し譯がない大層酔ひましたもんだから、さつぱり道を忘れて、とう／＼お前さんに送り出されるなんて、それを私はちつとも知らないんだから、酔ばらひ位暢氣な物はない。などと如才ないから下女下男に迄世辭を振撒いてをります。

重「イヤ其様な事はよいが、あれぎり來んからどうしたかと思つてをつたよ、少々頼み度い事があるから一寸来てくれんか。竹「へい早速上ります、え、明後日は屹度上ります。重「お前が來るといふのは當にならんが、また待ちぼうけはいかんよ。竹「いえ何う致して、今度は大丈夫で、なに大丈夫でございます……え、それに先日願ひ置きました、あの絹地の細物は、まだえ、お認め下さいませんかな。重「お、あれか、あれはまだ認めんよ。竹「大方まだとは存じましたが、先方でも急には出來んが、其の替り出來れば、先生のだから大した事だと申してをりました、どうもいつも御新造様のお

美しい事、この砂つほこりの中をお歩きなすつても、ちつとも汚れないくらゐなものはない、え、坊ちやん、え、私でござります、竹六で、たけ爺やアさ、え、先生によく似て入らつしやるつて、瓜を二つで、一つお笑ひなさいまし。と眞與太郎をあやしてをります。重「それぢやア竹六、明後日は屹度であらうな、よいか待つてをるよ、これ大きに世話であつた。と茶代を幾らか遣はしまして重信主従は出てゆきました。竹「へ、屹度明後日上ります、後新造様お氣を付けていらつしやいまし、それ、石がありますから、危ねえ、お花どんそ、つかしいからいけねえ、坊ちやんを背負だから氣を付けないくつちやアいけません、へお静かに。と重信の影の見えなくなる迄見送つてをります。重「竹六さんあの御新造はいつ見てもお美しいね。竹「美しいなんかんて、あの御新造なんぞは美しいを通り越えたのだね。と譽めてをりましたが、最前から後の方に腰をかけて休んで居りました浪人體の立派な人が、此方へ出て参りまして「え、一寸承はりたい。

四

出しぬけに言葉をかけられましたから、竹六は悔り致し、竹「へえ、これは何方さまで、少しも後にお出でなさいますのを存じませんもんだから、失禮をいたしました、何か粗相いたしましたら御免

下さいまし。と何で言葉をかけられたのだから、頻りに詫まつてをります。かの侍は八丈の紐をといて、冠つてをつた深い笠を取りました。年の頃は二十八九位で鼻筋の通つた、色の浅黒い、瘦ぎすなお人で、此の頃は流行りましたとか申します五分月代といふ奴で、小髭に結つて少し刷毛を反らしたといふ、斜子かなどの紋附に、御納戸献上の帯、短い大小をさしまして、侍「お前に承はり度いと申したのは、今彼處へ行かれたお方は何と申す畫師の先生ぢやな。竹「へえ左様で、へえ何、あれは菱川重信先生とおつしやるお方で、ほんのお内職同様になさるので、お氣に向かなければお描きなさいません、それといふも御内福でいらつしやるからで、柳島に立派なお住居で、畫はまづ探幽をお習ひなすつたのですが、土佐もよい、浮世繪もよい、と諸流にお渡りなすつたから、一派の風で、師宣をお慕ひなさるもんですから御自分で菱川重信とお付けなさいましたが、随分御名人でいらつしやいます。侍「はア左様であつたか、實は手前至つて畫を好むゆゑ、よき師をとつて習ひたいと存じをるが、どうも所謂長し短しで、まだ師匠と頼むお人を見當らぬのぢやが、只今の重信先生とやらは、孰れかの御浪人と見えて、威あつて猛からず、中々御分別がありさうなお人に見受けた我師と頼むは重信殿ぢやと最前から御様子伺つて居つた……どうか手前彼のお方の弟子に成りたいものぢやが、何うであらうな。竹六は人品のよい人で、第一金錢に困りさうもない立派な侍ですか

ら、世話をして置いたら始終宜からうと思ひますから、如才なく直に承知しまして、竹「へえそれぢやア貴方は畫がお好きで、重信様へ御門入がなさり度いつて夫はよい心懸けで、なに私が御昨今で斯様な事を申しては變でござりますが、あのお方を師匠にお取んなさるうなんぞは凄いや、貴方はお目が強いよ、毎度重信先生も、どうか片腕になる様な弟子をほしいものだとおつしやつて、それに御都合はよし、御親造はお美しいし、貴方後門入なさい、先生も屹度お悦びでせう。と餘計な事を喋べります。竹「然しお内弟子ではどうでせうか。侍「いや、内弟子に參るのではない、手前通つて習ひたいのぢや、何うかお世話下さるまいかな。竹「それはお安い事で造作ございませぬ、譯なしでございませぬ。浪「それは早速の御承知で忝けない、今これにて承はつたには、明後日は貴公が先生方へお出でのよしぢやが、相成るべくは其節に身共を御同道下さるまいか。とかの侍は懐中から紙入の中からぞろ／＼と幾らか小粒を出しまして紙に包み是は甚だ些少ぢやがお禮の印ぢや。竹「いえこれは恐れ入りましたね、これはどうも痛み入れました譯合で、まだお世話を仕ない前からお禮を頂くとはいや、折角の思召ですからへ／＼頂戴いたして置きます。侍「何うか納めて下されば手前も重疊ぢや。竹六は悦びまして金の包を懐へもじもじやつて仕舞ひまして、竹「して貴方様のお宅は何方ですか、手前が明後日參る出がけに一寸お寄り申して直に柳島へお供を。侍「いや、必ず

お出では及ばん、手前が尊公のお宅へ伺ふからよい、手前が家は爰に手札がござるから差上げて置かう。と手札を出しますから、竹六は、竹「へエ、是はお手札を、え、成程、本所撞木橋磯貝浪江様、よろしうござります、磯貝浪江さま、へ、宜しうござります、これで分ります、屹度明後日は御同道致しませう、浪「それでは何分お頼み申す、世話であつたな。と茶代を置きまして、浪江は立出で此日は互に別れました。竹六は意の内で先づこの人を世話をして置けば、地紙は賣れる、稽古の爲だといつて礮水引の美濃紙の外に畫帖が賣れるし、書畫會などにも一人でも畫師の殖えた方が商ひが有つていゝ、兎角氏子繁昌だと、是から約束をいたしました其日に、此の浪江を同道しまして弟子入をいたしました所が、重信も殊の外悦びまして、早速畫手本を與へなどしましたが、浪江は少しは下地がありますから、一寸、器用な質で、此の日より毎日通ひます。くどくしい所は省きまして申し上げますが、此浪江は、以前は谷出羽守様の藩中で百五十石を頂戴した侍の果で、當時仔細あつて浪人はしてをりますが、身形を崩しませんで、前申し上げました通り年は二十九で、ちよつと苦み走つた男で、諸事如才なく立廻りまして、先づ師匠を大事にするのは不思議です。それに眞與太郎を頻りと可愛がりまして、かの川柳にも「子ぼんなう親ぼんなうの下心」など、申して誰も我子の愛には溺れますもので、自然と此のおきせもあゝ浪江さんは親切な人だと思つてをります。それに下女のお

花なんぞへも、折々簪や前垂などを買つてやりますから、イヤ浪江を譽めます事、御新造様本當に浪江様のやうな善いお方はございません。などと評判がよろしうござります。此の年も三月四月と暮れまして丁度五月五日の事で、御存じの通り端午の節句といふので、方々へ吹流しの鯉などが上つてをります。玄關へ二人連でやつて來た男は、小石川原町の萬屋新兵衛といふ人で、今一人は手織綿の單物に小倉の一本獨鉗の帯を猫ぢやらしの様に締めまして、これで伊勢の壺屋の紙煙草入をさしてをりますが、紐が緩んでをりますから、歩きたんに取れ掛つた金物がばくくいつて、煙草の粉が出るといふ極質朴の人で、玄關へ來まして、新兵衛「へーお頼み申します、たのもう、

五

「どうれ。と下女のお花が取次に出まして、敷臺の所へ手をつきまして、花「どちらからお出でなさいました。新兵衛「へい、私は小石川原町の萬屋新兵衛と申します者で、何卒先生様へちとお願ひ申し度い事が有つて参りましたが、御在宿でござりますならお目に懸り度いとお取次なすつて下さいまし。と丁寧に申します。お花は「はい新兵衛様と仰しやいますか、暫くお待ち下さいまし。と奥へ這入りまして重信の前へ参り、これくだと申します。重信はまだ聞いた事はない名前だが、大方畫の

事で来た人と思ひますから、重「此方へお通し申せ、さうして綺麗な煙草盆を持つて来いよ。花「はい。と玄關へ参りまして此の由を二人へ申しますから、新「左様なら御免下さい。と敷臺の處で雪駄を脱ぎ埃など拂ひまして、お花の案内に連れまして重信の居間へ通りました。重信は敷いて居りましたアンペラと唐更紗と片々割合せた座布團を取除けながら、重「いよ是はお出で、只今ちと急ぎ物を認めて居るので、取散らして後免なさい、あゝ危ない繪の具皿を彼方へ片付けて、え、なにそれでよい、アンペラの敷物を上げる、むさい處で、あア此處へお出でなさい、それでは御挨拶が出来ません。新「いえもう其の儘で、決してお構ひ下さいますな。重「いえ、何もお構ひ申さぬ、扱これはお初うに、はい私が重信で、小石川からだつて、御遠方からお出で、は嘸途中がお暑かつたらう、はい。新「是は初めてお目に懸りました、私事は小石川原町で酒を商ひ居ります萬屋新兵衛と申すもので、又これに居りますは、高田砂利場村のお百姓で。茂左衛門「へえ私は茂左衛門と申します者で。重「左様でござつたか、私が重信で……何ぞ御用でお出に成つたかね。新「へー、早速ながら申し上げますが、先生様の御高名をお慕ひ申しまして願ひ度いと申しますは、手前が壇那寺で高田砂利場村の大鏡山南藏院と云ひます眞言宗の寺がござりまするが、今度本堂から庫裏は申すに及びませんが、藥師堂迄普請出来に成りましたが、手前共は皆世話人でござりますし……いえお構ひ

下さいますな……へいこれは結構なお茶で……へいこれは……其の天井や又は杉戸襖などへ畫を描いて頂き度いと、それを願ひに兩人の者が揃ひまして願ひに出ましたのでござります、もし茂左衛門様よくお前様からも先生へお願ひ申したら宜からう。茂「あゝ、えゝ私のからも願ふだア、へいこれは先生様、今度普請がたまげて立派に出来たに付きまして、何でもはア杉戸や襖へ畫え描いて貰え申しましてえ、成るだけ畫は賑やかな物がえゝつて私い思ふには、櫻が一面に咲いて居る所へ虎が威勢よく飛んで居る所を、彩色でかう立張に描いて下せえな。重信はこれを聞きまして變な事をいふ人だと思ひますから、重「櫻が花盛りの所へ虎が飛んで居るとは面白い取合せで、櫻なら駒とか、いや、それはまアよいが、お頼みの事は承知しました、寺の格天井などは手前夙うより描いて見たいと常から心懸けて置いた物もあるが、大抵の畫師は墨畫で飛龍とか又は一疋の龍とか、えて認むるもんぢやが、拙者は雌龍雄龍と二匹を墨畫で描いて見たいと思つてをる所ぢやから、其の雌雄の龍を描いて見たいものである。新「成程、よく堂宮の天井には、八方睨みとか云ひます龍がお定まりで描いてございますが、先生のは、雌龍雄龍を二疋描いて下さるとはそれはお珍らしい。茂「何い描くつて。新「なにさ雌龍雄龍を墨畫で描いて遣らうと仰しやるのさ。茂「魂消たねそりやアお角力取の名けえ、新「分らない、角力の事ぢやアない、龍の事だよ。茂「なに龍の事ぢやツて、私い考へぢやア、襖など

へは墨畫ぢやア淋しいから、何でも彩色して、此方へ兩國橋を描いて、其方には船が大層出て、それで花火がボン／＼と上つて居る所の畫が宜かんべえ。と又をかしい事を云ひますから、重「はい、まさか寺方なんぞの襖へ左様なものは描かれんが、まア宜しい又何か趣向もござらうからお請合ひ申さう、早速明後日あたりから取懸ると致さう。新「それでは早速お取懸り下さいますか……イエそれに付きまして先生へお願いが……え、それ高田から此の柳島まで、襖や杉戸などは兎も角も、天井を持つて参るといふわけにも参りませんから、甚だ恐れ入りますが、何卒出来上りますまで、本堂もいたつて廣うござりますから、お泊り懸けに入らつしやつてお認め下さいますまいかな。重「成程御尤もぢや、イエ宜しうござる、却つて宅より氣が散らんでよい、それでは下男を一人連れて、泊つて居て描いて進ませうかな。新「それははやお聞き済みで有難うござります。と、新兵衛は懐中の胴巻より、紙に包んである二十兩出しまして、新「是はお手附といふ譯ではござりませんが、ほんの世話人から預かりました二十金、何うかお預かり下さいまし。重「イヤこれは金子で、なに二十金とえ、何こんな御心配には及ばん、後でよろしいに、然し折角だからお預かり申して置ませう。新「左様ならば明後日はお待ち受け申して居ります。茂「先生様、また明後日出逢ひますべし。重「まアよいではないか、ただ今何か……、冷麥をさう申し付けたと申すから、まあよい……では、一寸泡盛で

も……到來致した物があるから。新「いえ道が遠うござりますから、お暇を。と新兵衛と茂左衛門は、暇を告げて高田へ歸り、又重信先生は、かねて寺などの天井か杉戸へ、丹精を籠めた畫を描いて後世へ残し度いといふ了簡ゆえ、内々悦びまして、翌日より支度を致しまして、正介といふ家來に、繪具箱と着替の衣類などを包みにいたし、これを脊負はせまして、五月七日の朝柳島の宅を立出で、高田の南藏院へ赴きました。此の留守中に、大變が出来いたすといふ小口に成りますお話を、一寸一息吐きまして又申し上げませう。

六

扱、菱川重信は下男の下介を連れまして、高田の南藏院へ赴きました後は、おきせと子供の眞與太郎とお花といふ下女ばかりでござりますから、茲ぞと思ひまして、お淋しからうと云ふので、磯貝浪江が毎日缺かさず留守を見舞ひます。それに地紙折の竹六も参りましたは、いろ／＼に機嫌を取りまして、わうわと云つては、おきせやお花を笑はせますから、晝の内は随分賑やかですが、皆夕方には「また明日伺ひます、坊ちゃん、明日はよい物をお土産に上げます、左様なら、お花どんお氣をお付けよ。と云つては歸りますもので、夜に入つては寂寞と致します、殊に柳島あたりでござりますから

田畑が多くだ今このやうに家並にはなりませんから淋しうござります。と或日の事でございましたがいつもの通り、浪江と竹六が來まして、暑氣拂ひだと泡盛などを出しましたが、果は御酒が生まれて、飲む口だから竹六はぶろくに酔ひました。其内日が暮れ懸りまして、灯ともし頃浪江は歸らうと致しまして、浪江「かう竹六、今日は大分酔つたね、灯がつくよ、もう宜からう、お暇にいたさうではないか、コレサ危ない、左様酔つちやア困るの。竹「へい歸ります、これからすうつと御歸宅といたしませう、だかどうも今日は大層頂戴したもんだから大酩酊……是は強い……あゝこれはえらい、何うも名代の本所だけひどい蚊だ、これは嚴しい、先刻からはうぐ喰はれました、御新造様が竹六羽織を脱げ〜と仰しやつて下さるが、私ア態と脱ぎません、脱がぬのはかう是を足へかぶせて置くと、少しは足へ蚊がとまらぬ、即席に足だけの蚊帳を拵へるといふは、えらい竹六は智慧者だ、こんな強い蚊の中へ、この美しい御新造を残して、旦那様は高田へ入らつしやるなんて、お可哀さうだよ……、私アこの中へお一人お置き申すのはお可哀さうでなりません。浪「何でもよいからお暇をいたさう、立六もう灯がつくよ、先生がお出でならよいが、お留守のことなりあまり貴公の様に物がくどいと、御新造がお厭がり遊ばす、さア一緒に歸らう。と云へば、おきせ「いえ浪江様、まア宜しうござります、本當にいつも面白い竹六さんでござりますねえ。浪「いえ、それでもあんまり遅うな

りましては濟みません、さア竹六一緒に出懸けやう、と急ぎ立てますが、酒飲の常で中々立ちませんで落着き腐つて居り、竹「何一緒に私と歸るからつて、いえ、御一緒に歸ると仰しやつたつて、貴方は撞木橋、私は浅草田原町だから道が違ひます、私ア押上の土手をまつすぐに行きます……エエイ……のだから御免を蒙ります左様ならお暇、お花どん大きにお世話……どつこいしよ……になりましたは……とよい機嫌でひよろ〜と立上り、内玄關の所から雪駄を突っかけまして、竹「左様なら又明日伺ひます、御機嫌よう。きせ「あれ危ない、花やそこ迄見てお上げ申しな。浪「いえお構ひなさいますな、打捨〜お置き遊ばせ、構ふときりがござりませぬ。竹「あゝ眞暗になつた、え〜と一杯機嫌ゆる急いで参ります。浪江は少し後へ残りまして、浪「いや困つた奴でござります、御酒を頂くと、平生とはガラリと變りました、執拗になりますから誠に、いえ私もお暇をいたしませう。きせ「まア、貴方宜いではござりませんか、お歸りになりますと、後は女ばかりでござりますから、誠に淋しうござりまして。浪「お淋しうはござりませうが、其の代り眞與太郎様が居らつしやるからお賑やかで。きせ「なに堪にむづかれますと、誠に賑か過ぎて困ります、おほ〜と愛敬がこぼれるやうだ。浪「なんにいたせお暇いたしませう、お花どん跡をよく締りをなさいよ、左様なれば御機嫌よう。きせ「誠に今日は失禮を、花や、其のお手燭を、いえ、なければ籠ぼんぼりでも宜い

よ、お送り申して。浪「いえお構ひ下さいますな。と浪江は禮儀正しく立出でましたが、門を出たかと思ふ頃、浪「あいたゝゝ、強く差込が。と横腹を押へたなり小尻りをいたしまして、うんと云つて玄關の敷臺

浪「あいたゝゝ、強く差込が。と横腹を押へたなり小尻りをいたしまして、うんと云つて玄關の敷臺の所へ顔の色を變へて倒れました。おきせもお花も悔りいたして、花「浪江様何うなされました。

きせ「貴方お癪でも。浪「むゝ苦しい……わ……私……を……折節斯様な事が、手前の藥入れの中に熊膽が、いえ熊の膽がござりますから、何卒お湯を一つ頂戴、お早くく下さい。と男の癪と見えて、見る間に顔の色が青くなり、齒を喰ひしめまして苦しき、うんと云つて反りますから、花「浪江様貴確かりなさい。

きせ「貴方確かり遊ばせ、唯今お湯をあげますから。花「私が押してあげませう。とでくく肥満つた下女のお花、力が三人力もあるといふ眞赤な手を出しまして、「私が押してあげませう、此處でござりますか。浪「有難うこれは憚り、其處で。花「最う少つと下で。浪「宜しい、あゝこれは苦しい、うんむ。本所に蚊がなくなれば大晦日、といふ川柳がござりますが、五月といふ

のだから酷うござります、うんくくと蚊が群がりますから、きせ「あゝこれは酷い蚊で、あんまり端近だし、此處では蚊が食ふから奥へお連れ申しな。浪「いえこれで宜しうござります、決して御心配を今直に治りますから、これで宜しう。花「いえ貴方御遠慮遊ばしますなよ、斯ういふ時は仕方があり

ません。

ません。

ません。

七

浪江は油汗をかいいて餘程苦しい様子でござりますから、おきせとお花が氣の毒でなりません。

お花「さア貴方お奥へお出であそばせよ。浪江「いゝえこれで宜しうござります、あゝ苦しい、どうも痛い……いえ先生がお居でなら此方へ一泊願ひたいと存じますが、お留守ゆる矢張これで、今直に暫時落着きますまで、お置き下さい。きせ「あれお物堅い、そんな御遠慮はいりませんよ、あなた本當

でござりますよ、お差込なんぞの時は堪らないもので、あゝこれは酷い蚊でござります。花「それでは、斯う遊ばせ、此處では冷えますといけませんから、花や客間へお連れ申して、あの蚊帳を釣つて

お上げ申しな、貴方少しお横になつて緩り遊ばせ。浪「いゝ決して……あいた……お構ひ遊ばすな、矢張此處でお花どんに押してお貰ひ申すと餘程堪へようござります。花「あれまだ其様なことを仰し

やいますよ、御新造様があんなに仰しやりますから、貴方入らつしやいよ。きせ「さアせめて貴方客間へ。浪「それでは何うも心が濟みませんが。花「さア入らつしやい、さア私に確かりお撮まり遊

ばせ。不常鼻藥が飼つてあるから其の親切な事は、おきせも俱に介抱いたしまして、辭退をいたす

浪江を奥の客間へ漸々連れてまゐり、お花はまめくしく蚊帳を出しまして釣り、ちよつと郡内編かなぞの小掻巻を出して、枕元へは烟草盆に盆へ素湯を汲んで持つてゆく、能くお手當が行届きます。此の客間といふのは八疊で花月床といふやつで、此處から四尺程の梅の柱で張りました廊下を隔てまして、おきせが寝て居ります六疊の座敷で、やはりお花は浪江の胸を擦つて居ります。浪江は暫時苦しんで居りましたが大きに落着いたと見えて、癩の癖で少し落着くとすやく眠るもので、お花は擦つて居りましたが、浪江が寝た様子でございませうから、花「あの御新造様、落着きました様子ですやすやお眠り成さいましたよ。と小聲でいひます。きせ「それはまア宜かつた、そつとしてお置き、またお目が覚めでもして差込むといけない、お前そつと蚊帳を出て表を締めてお前もお寝、御病人が入らつしやるから、いつものやうに寝坊をしては困るよ、どうぞ眼ざとくしてお呉れ。花「なに貴方、今晚は本當に寝はいたしません、と目の覚めぬやうにそつと蚊帳から出ました。これから方々の戸締りを致して、花「左様ならお休み遊ばせ、御用があつたら直にお起し遊ばして。とお花は一間隔てました己が部屋へ参りました。おきせも先へ寝かしました眞與太郎が今夜はおとなしうございませうから、是も起すまいと蚊帳の中へそつと這入り、「さア坊や本當に寝んねおし。と眞與太郎を抱いてすやすやと眠に就きました。下女は一日立働いて疲れて居りますから、床へ這入るがいなや、ぐうぐうと

高軒をかいて寝てしまひます。松井町の鐘は空へ雨氣をもつてゐるせゐか、十間川の流れへ響いてポーン……、押上堤の、露を含んでをります千草のなかでは、いろ／＼な虫が啼きつれまして、何となく物淋しい……、彼の浪江は時分をはかりましてか、むつくりと起上りましたが、癩が差込むと申したのも元より作病で、日頃から惚れ切つて居ります師匠重信の妻のおきせを何うか口説き落さうと思ふので、先生は留守なり、今夜こそはと枕元に置ききした脇差を一本差しまして、そつと蚊帳を這ひ出しまして、おきせの寝てゐる蚊帳の内を覗いて見ますと、有明の行燈の灯が薄く映して、眞與太郎を抱きまして添乳をしながら眠りましたと見えて、眞白な、かう乳の所が見えまして、大抵どんな美しい女でも口を明けて寝るとか、齒ぎしりをするとか何とか疵のある物で、寝顔といふ物はあんまりよくない物で、随分首つたけ惚れてをりましたが、寝た顔を見てから愛想の盡きる事があるものだが、此のおきせは三十二相揃つて居ります美人で、別して寝顔が好いさうでござります。柳島路考と云はるゝ程器量美しだから、蚊帳越に見ました彼の浪江、暫く見とれて居りましたが、今夜こそは……、……と思ふと、流石にぶる／＼體が慄へましたが、根が大膽な浪江でございませうから、そつと蚊帳を捲くりノコ／＼中へ這入りまして、おきせの寝てをります脇の方から、そつと枕と肩の間の所へ男の方からぐつと手を入れましたから、おきせはハツと驚いて目を覺し、飛び起きましてちや

んと畏まりましたし少し聲を震はせ、きせ「あらまア、悔りましたよ、呆れかへつた、貴方、何で此處へ。浪「あゝこれ、大きな聲だ、静かになさい。きせ「いえ静かには申されません、何であなた私の所へ。浪「これ静かになさい……誠に面目次第もござらんが、私の申す事を。きせ「いえ貴方なぜ私の。浪「これさ静かになさい、誠に男子たる者が恥入つた譯で……コレサまア静かにして……ござるが實は此の三月十五日、忘れも致さぬ梅若の縁日、小梅の茶店に重信殿と御一緒にお出でなすつた所をば、私が床几に掛つて居つて初めて貴方を見た時、あゝ美しい、綺麗だ、と思ひました。此身の因果で、命をかけて惚れました此の浪江、何卒不便と思召して、……
 ……………。きせ「本當に貴方、まア呆れて物が云へない、何うぞ歸つて下さい、花やア。浪「これさ静かになさい、しいく。

八

浪江は態と落着きまして、浪江「これ静かになさい、成程、藪から棒にかやうな事を申しては、定めしお驚きでござらうが、此處の所を能くお聞き分け下さい、實は最前持病の癪だと申したのは皆作病で、もとより道ならぬ不義とは萬々承知の上の事、斯くまで男子が思ひ詰めた事、これおきせど

の、何うか叶へて、これ、うんと仰しやつても宜いではござらぬか。きせ「おだまんなさい、貴方は元は谷出羽守様の御家來、侍の祿を食んだお身の上ではございせんか、殊に夫重信は御昨今でも貴方の爲には假にも師匠。浪「それは知れて居る。きせ「其の妻に戀慕なるとは、まア貴方も見下げ果てたお人だ、そんなお方を弟子にしたのは夫のあやまり、あゝ浪江様は親切なお方と心をゆるしましたは私の見違へ、もうく貴方の顔を見るのも厭でございませす、さア直にお歸んなさい、何うぞ歸つて下さい、これ花や。浪「また聲をお立てなされる、静かになさい。きせ「いえ静かには致してをられません。浪「静かに出來んなら致し方もござらんが、それは師匠の御新造に不義をしては濟まん事も存じて居るが、それこそが此の身の因果で、恥を捨て、願ふのだから。きせ「いえ否でございませす、花や。浪「また大きな聲をなされるよ。きせ「いえ大きな聲をいたさずには居られません。浪「左様なら是程に事を分けて申しても聞き入れられんか。きせ「聞かれますか、貴方よく物を積つて御らうじませ、もう私は。と立たうと致しますから、浪江はその袂を確かり捉へまして、浪「それでは何でもお厭だと仰しやるか。きせ「知れた事でございませす。と袂を振拂ひます。浪「そんなら宜しうござる、叶へんければ手前も存じ寄りがござる。と威して思ひを遂げやうと思ひますから、持つて參つた脇差を捻くりませす。きせ「貴方脇差を持つて私を斬る氣でございませすか。浪「え、なに、それは

知れた事、いやだと云つて恥を搔かされては、此の儘に打捨つては置かん、お前を刺殺して共々此場を去らず切腹致して相果てる、それでもうんと仰しやらぬか。と、わざと鯉口をくつろげて、膝を進ませて申しますと此方も體を突付けまして、きせ「さアお斬りなさい、假令私の身が貴方のお手にかゝり殺されましても、操は破られませんが、浪「それでは宜いか、殺すと命がござらぬぞ、よいか。きせ「さアお斬んなさい。浪「宜しうござるか、只今眞つ二つに。きせ「さア早く殺して下さい。

浪「よろしいか。と刀を抜きかけてもわるびれませんから困つた。浪「だがな、私あなたを殺すのは何うも惜しいよ、どうも可愛い、から殺すのは止めに致すが、これさ、まアよくお聞きなさい、そんな詰らぬ事を致すよりか、なんと……それよりは……下さい、師匠は留守なり、假令何んしたとて、貴方の口から何も仰しやる譯はなし、又手前とても師の妻を何んしたなどと、假にもいふ氣遣ひはござらん……黙つてを待つては分らん、……えそれとも何うあつても……切腹、切腹をいたし相果てます……から座敷をお貸し下さい、切腹致す。きせ「はい、何うとも勝手になさい、切腹でも何でもなさいまし、だが此處で切られては迷惑しますから、押上の土手へお出でなすつてお死になさい。浪「それぢやア貴方は身共に切られて死んでも、操は破れないと仰しやるな。きせ「貴方それは知れた事でございます。浪「さういふ事なら最う宜しい、さう強情を仰しや

るなら斯う致す。と傍にすやく寝てをります眞與太郎の胸の邊へ手をかけまして、すらりと抜いた刀を差付けましたからおきせは驚きまして、きせ「あ、お待ちなさい、あなたは、何んで、此の子を何うなさるので。浪「何ういたすものか、貴方は殺さぬが、此の可愛い、子を刺殺して後で切腹いたす所存でござるが、是も手前相果てた後、頼みを叶へぬ許りに、只一人の可愛い、子を殺さしたと、後で思ひ出す様に此の子を殺すのだ。とびか、光る白刃を胸の所へさしつけますから、きせ「まアお待ちなさい。浪「然らばお叶へ下さるか。きせ「まア貴方何願はない子を。浪「可愛さうだと思召すなら、いふことをお聞き下さるか。何んと大膽にも、浪江は今可愛らしい正月生れの眞與太郎へ双をさしつけて、さア願を叶へんければ此の子を刺殺して後にて切腹して相果てる、と云はれた時には、流石のおきせも當惑するばかりでござりました。皆様に御相談でござりますが、可愛い、我子を刺殺さうとされました心持はどんなでござりませうか、女といふものは男と違ひまして、氣の優しいもので、かういふ時にはいふ事を聞きませうか、それとも聞きませんものでせうか、いよくといふおきせの返事は明日申し上げませう。

さア何うだ。と我子の胸へ刃を差付けられたおきせは、暫し言葉もありませんでしたが、男と違ひまして女は胸の狭いもんで、心に變な考へをつけたものか、きせ「それぢやア……………」。

浪「え、それでは得心なさるか、それは不思議、いえ、それは好い御分別ぢや。と色よい返事を聞きました浪江は屬根惚れてをるおきせが得心したから、……………」。

りますのを、きせ「まア貴方お待ちなさい、屹度貴方……………」で。浪「宜ろしい、得心さへして下されば、拙者も武士の端くれ、……………」申さぬ。きせ「それでは花でも聞くと悪うございますから、お待ち遊ばせ。と……………」おきせは立上りまして、……………」。

そつと葭戸を開けて廊下へ出ますから、逃げられてはならぬと思ひまして、裾の所をしつかり押へてをります。きせ「花はよく寝てをりますからこれで私も安心いたしました、貴方、屹度……………」。

浪「宜しいと申したら。きせ「本當にもう……………」あきらめて下さいまし。と嫌ではございますが、可愛い、子供の爲と……………」あさましい事で、誠にこれが生涯を過ります初で。さア斯ういふ中になりますと深くなるのが此の道で、浪江は猶々おきせが戀しいから先生のお見舞、または遂御近所まで参つたからお訪ね申したの、なんかと用に托付けましては参りまして、いろ／＼瞞かして、一泊を願ふなど、泊り込みましては口説きます。おきせは又嫌だといつたら、此間の様に眞與太

郎を刺殺すなど、云ひはせぬかと思ひますから、一度が二度、二度が三度と度重ります。扱、斯うなりますと可笑しなもので、初めの内は嫌で／＼ならなかつた浪江が少し可愛いく成つてまゐるのが所謂惡縁で、此頃ではおきせも滿更浪江が憎くなくなりました。成程浪江だつてまんざらな男振りではございません。色こそ少し淺黒いが、鼻筋の通つた、眼のぱつちりした、苦味ばしつた、只今の俳優ならトント左團次の様で、終には、きせ「貴方明晩も屹度いらつしやいよ、其の積りでお花をよそへ使ひに遣はしますから。など、おきせの方からいふ様になる。浪江は心中に思ひますには、おきせと斯ういふ譯に成つたもの、師匠が高田から畫を書上げて歸つて来れば、それつ切逢ふ事が出来ぬ、どうか歸つて来ぬ様にしたいものだと思へましたが、元より大膽の浪江でございませから、ふと悪心が起りまして、これは寧ろ重信を亡きものにして、おきせと天下晴れて楽しまうといふので、五月も過ぎまして六月に成りました或日のことでございましたが、浪江は黒の紗の五所紋の羽織に、何か縮の帷子を着まして、細身の大小、菓子折を風呂敷へ包んで提げまして、暑い中を高田の砂利場村の大鏡山南藏院へやつて参りました。あの寺は御案内の通り八門寺と申しまして、上様が鷹野にお成のござりました時、お拳の鷹がそれで此寺内へ這入つたといふ、名高い舊幕様の頃にはやかましい寺でございまして、浪江は折を提げて玄關へ参りまして、浪「お頼み申す、たのむ。と案内を致します

と、奥から十二三になります小坊主が取次に出まして、「へいどちらからお出で。浪「手前は先達より御當山へお出でになつてをる、菱川重信の門人磯貝浪江と申すもので、師匠の見舞にまゐつたので、どうかお取次を願ひたい。と慇懃に述べます。小坊主は「はい。と云つて奥へ入りましたが、引違へて出て参つたのは重信の所の下男で正介と申す當年五十一になる正直もので、正「やア、こりやア誰かと思つたら浪江様、まアよく訪ねてござらしやつた、さアこちらへ。浪「いや正介どのか、誠に御無沙汰を、疾うにも伺はんければならぬのぢやが、つい何や彼や繁多で存外御疎遠を致した、先生はお變りはないかな、誠に今日も暑いな。正「いや途中はさぞお暑かつたらう、此寺などはだゞつ廣いから風はえらく這入るが、それでせえ暑つくるしい、まアよく訪ねてお出でなすつただ、さア此方へ、今しがたも先生様がお前様の噂あしておいでだつた。浪「それでは御免。と玄關の脇の方から上りました浪江、天地金の平骨の扇へ何か畫が書いてあるのを取出しまして暑いから煽いで居る。正「さアすつとこちらへ、奥の方が涼しい、彼方へお出でなさい。浪「それでは御免をかうむつて奥へ。と件の包を持ちまして座敷へ通ります。正「旦那様浪江様がお出でなさいました。と、立出でました重信、重「よう是は珍らしい、よくまア此の暑さに、え歩行でお出でで……それはよくお訪ね下された。浪「これは先生、誠にはや御無沙汰を、疾にも伺はんければ相成りませんが、つい此の暑

さで、いえ暑いと申しては濟みませんが、誠にはや。と菓子折を包みました包を出しまして、正「正介どん、是は誠に輕少だが先生へ。正「へえ、是は何んでございますか。と解きまして中から折を出します。浪「いえ、召上るやうな品ではございませんが、先生は下戸でいらつしやるから、金玉精を詰めて腐らん様に致して持つて参りました、どうか召上つて、と折を出しました。

十

重信は悦びまして、重「これは誠に忝けない、私は下戸だから、菓子を喰べたいと思つても、此處らは邊鄙ゆる菓子と云つては毎朝本堂へ上つた落雁などの、とんと甲子の七色菓子のやうな物ばかり茶受に出るので、實は弱つてをつた所ぢや、そこへ金玉精とは忝けない。早速頂戴いたさう。正「浪江様、茶を上れ、まだ少しぬるい、今直に熱いのを入れて上げべい。浪「いえもうお構ひなさるな。正「だがね浪江さま、誠に先生さまア長の間だが、今度は御自分が好いた仕事だつて、此の暑いのに夜なべえかけて畫を書いて居るで、お内へもえんつう不通だから、己ちよつとお内へ参つて、御新造様や坊ちゃんのう安否を聞いて來べくと云つても、なに打捨つて置け、沙汰アねえのが變りがねえのだつて、いや畫に懸かつちやア可愛い、坊ちやまの事せえ忘れてござる、だがお前様がお内へたびた

び見舞つて下さるつて、有難うござえやす、先生さまも浪江が見舞はつて呉れべいから安心だつて。浪「いえ先生のお留守へは折節伺ひまして……然しあまりお氣をお詰め遊ばしては、却つてお身のお毒には成りませぬか、ちと御精が出過ぎは致しませぬかな。重「は、は、いやもう私も凝性でいけんが、豫て生涯に一度は何かと思つてをつた所ゆゑ、此寺などの天井などは後世に残る物だから、精神を入れて書かんければならぬが、それに杉戸や襖へも、これ爰にある様な花鳥か、または四季の耕作などを書くつもりぢや、これは皆彩色を仕なければならぬから、先へと存じて墨書に取掛かると、世話人だの何のと申す百姓衆が来てはいや先生それより兩國の花火の所がよいの、やれ役者の似顔が宜えなどとくだらぬ事を申すので煩さくつてならぬから、彩色ものはみんな後廻しにいたして、まづ是はと思ふ天井に取掛かつたのぢや、お、是は茶か、よい／＼まづ浪江殿に。浪「いえどう致して、まづ／＼お先へ。重「いや是は中々上製、久し振で味を覚えました……いや、天井の畫は大抵どの畫師が書いても、丸龍とか但し一疋の龍を認めるのが通例ぢやが、面倒でも私は雄龍雌龍の二疋の書きわけをいたさうと、いや拙い腕でとんだ望みを起して、まア漸うの事で雄龍だけは出来いたしたが、只今は雌龍の右の手を書いてをる所ぢやて、まアお前見て下さい。と重信も一生懸命に腕を磨いて書きましたから少し自慢氣で見せます。浪「いえ是は成程活きてをります様で。重「所が聞いて下さい、

畫の内は講中が見てをつていかぬから、氣の散らぬやうに二三日後から、夜分暑いが、本堂の廣い、斯う廣い所へ障子や屏風などを立廻して夜なべにやつてをるのさ、まア是を書上げれば直に彩色ものに取掛かるつもりだから、お前もちつと其時は来て何うか繪の具でも解いておくれか。浪「いえもう修行のためでござりますから、其時は是非お手傳に参じます積りで、然しどうも大した御精の出来た事で……私も先生のお側で拜見をいたしても、幾干か稽古のたそくに成りますから、疾うより上りましてお手傳をと存じてをりますが、何がはや繁多ゆる御無沙汰を……それに今日は少々據無日用事もござりますればお暇致し、また近日お邪魔でもお手傳に罷り出ますのでござりませう。と天井の畫を見まして、悪人の浪江でござりますが、よく出来たのは存じてをりますから、浪「此の雄龍のからやつた意氣込は何うも凄い様で實に恐入りましたな。重「是はまア出来ん乍らも精神を入れて書いた積りで。と重信は傍らにござります厨子へ這入つてをります佛像へ指をさしまして、重「浪江さん此の薬師如來の御像を御覽よ、何か是は聖徳太子のお作だともいひ、また役の小角の作だともいふが生きておいでなされる様で、實に靈驗あらたかの薬師佛でね、私もこの傍に朝夕をるのも何かの因縁と思へば、信仰いたしをるよ。浪「いか様、なる、これは有難い、實にお顔の容體御柔和で、南無薬師瑠璃光如來南無……などと、横着ものめ、殊勝らしく拜みなど致してをりましたが、急に身仕度

を致しまして、浪「先生、左様ならば今日は少々早稲田の親族の所へ寄ります約束もござりますから
 是でお暇を。重「まアよい。浪「いえ遠方でござりますから是でお暇を、いや先生へお願ひ申します
 が、正介どのへちと上げたいものがござりますから、一寸お借り申しても宜しうござりませうか。
 重「よい所ではない、連れていつても宜しいが、然し一泊いたしては何うだね。浪「へえ願ひたいのは
 山々でござりますが、今日は只今のわけゆゑ、一先づお暇を、また出直しまして。重「あゝ左様かえ
 それでは是非がない御隨意に、これ正介や。正「へえ、何の御用で。重「これ何か浪江殿がそちに上
 げ度いものがあると云はるゝから、御一緒にまゐるがよいぞ。正「え浪江さま、私イ上げべえ物があ
 るつて。浪「それ故只今願つたからどうか一緒に。正「へえどこ迄も行くべい。重「何の事ぢや行く
 べえなどと、困つた老爺ぢや。浪「左様ならば、何れ又近日に。と浪江は暇を告げまして、正介を連
 れまして南藏院を立出で、馬場下町の花屋といふ料理屋へ這入りました。

十一

「いらつしやいましてお二階。といふので兩人は二階へ上りました。正「浪江さま、此處は煮賣酒屋だア
 ね。浪「煮賣酒屋といふがあるものか、此處は此邊では、名代の、これでも料理で。正「料理屋だつ

て、魚なんか煮て客へ出して、さうして酒賣るから煮賣酒屋だんべい。浪「さういへば其様ものだ
 が、さう理窟詰めにしてはいかん、正「だが好え二階だ。浪「正介どん、お前を此處へ連れて來たの
 は外でもないが、田舎同様な所に暫く泊つておいで遊ばすから、定めしお魚などに御不自由で、殊に
 お寺ではあり、先生へ何うかお魚を上げたいから何か焼魚か照焼にして腐らない様に致し、折へ詰め
 て持つていつて貰はうと思つて、それでお前をお借り申して來たが、それにお前も飲める口だから、
 今日にはゆつくり一杯遣つておいでよ。正「え先生へお魚ア上げたいつて、それえ御奇特な事だ、また
 私にいつばい飲ますつて、そいつは有難え。浪「それだから遠慮せずにも好いものをさう云つて
 ……。正「え、有難え、長い間私も先生も魚ア喰ひませぬ、私なんぞはそりやア喰つても構はねえが
 たまさか鯛つ子の五疋も買つて喰ふべいと思ふと、坊様たちが羨ましいもんだから魚ア焼くなら村の
 講中の家へいつて焼いて來てくれるなぞといふので、久しく魚ア喰ひましねえのさ。浪「それはさう
 であらう、お寺方では内證はともあれ、表向は精進ぢやから、それは當然の事で、定めしお魚を上る
 まいと思ふから、先生へ上げ度いと申すので、姉さんや、あゝ、何か吸物に刺身、後は鹽焼か照焼な
 ぞが宜からう、それは折へ詰めてちよつと附合せ物を成丈腐らぬものを、よいか、それはお土産だよ
 下女「へい畏まりました。浪「おいゝそれから爰へも後で飯の菜になりさうな物を見立た、よい

か、おゝそれに一寸話があるから、用があれば呼ぶから座敷へ来ずにおいでよ。と内々の話がありま
すから、来ない様に女に言ひつけます。正介は斯様事に一向氣が付きませんで、正「だが浪江様、お
前様はまだ若い若い親切なお人だつて、浪江様見たやうな親切な人はねえつて、毎度先生がいふだ、
私、馳走になるからつて褒めるぢやアねえよ。浪「いえそれはな、お前が世辭を申すとは聞かない、
だが師匠となり弟子となれば、それが通例で何も感心をする所はない當然な事ぢや。正「まだく先
生が、それに柳島の家へも時々見廻つてくれるといふ事だから安心だつて、私、柳島のお宅へもちよ
くく行つて安否聞きてえのだが、先生一人置いてゆくわけにもなんねえから、遂無沙汰になつたが
御新造、坊ちやまはお變りはねえか。浪「ないよ、お變りはないお達者ぢや。正「ハア達者だつて、
それは宜え、だが浪江様、己が先生の様な妙な人はねえ、畫師といふものは何でも描く物に精神籠め
ねえぢやアなんねえから、此方へ来て居る内は何事も忘れてゐねえければなんねえつて、それだから
留守にどんな災難があつても夫迄よ、内の事には念慮とか有つてはいかねえといつて此方へ来てか
らまだ手紙一本出さねえのさ。浪「ハア左様か、さアこんなまづいものだがお上りよ、さア一つ頂く
から。と猪口をさします。正「イヤ、まづお前様から、浪「まア、今日はお前が上客だから、まづ：
…それでは各盃に致さう。正「エ、各盃とはなんだ。浪「成程、各盃などはお知りでなからう、ま

アそんな事はよいから一つ重ねて。正「ヤア、是は刺身だ。浪「こゝらのものは河岸が遠いから、何
ういたしても魚が古いから美味しくくない。正「イヤおいしくない所か…滅法旨い、ア、久し振りの
せいかうまい。浪「これさ、よく久し振り〜といふが、何か魚を喰はんやうで、人に聞かれると見
つともない。正「ハア、久し振りと云つては悪いか、ハイ喰ひます。と程よく酔はせて置いて云ひ出
さうと思ひますから、浪江が酌をいたしましたは正介に飲ませる。浪「イヤ正介どんや、いろ／＼お
世話になるから、疾うよりお前に何かお禮をしたいと思つてをつたが、これはな、あまり少しだが單
物でも買つておくれな。と紙入の内から金入を出しまして額を紙へ包みまして出しますから、正「エ
エ飛んだこつた。エ、どうして、今日は御馳走になつたばかりで澤山なのに此上そんな物を貰つては
罰が當るだ。浪「まア、そんな事を云はないでもよい、ほんの少しだよ、たつた五兩だよ。正「エ、
なに五兩、何てえ、まアたまげたア、大概一分も貰やア澤山でがすに五兩つてえ、それに己が先生物
堅い變屈だアから、人様から故なく物を貰うては濟まねえぞなんかと小言をいはれるから、是はよし
にさつせいまし。浪「イエ、是はよい、私がお上げるのだから、そんな事を云はないで納めてお置き、
正「イエいけねえ、お前に貰つたといふと直に先生に叱られるだ。浪「イエ、そんなら私に貰つたと云
はなければよい。正「いゝや、それは直に感づくから。浪「是は困つたね。と少し考へてをりました

が、浪「あゝ、それぢやアね、かう致さう。正「何うしべい……。浪「此のお金をお前に上げたいといふ譯を話さうから宜からう。正「そんなら呉れる譯を。浪「話したらよからう。と邊を見ましたがちよつと一間を隔てました座敷だから安心しまして。

十二

浪「正介どん、實は今日わざ／＼お前を此處に招いたのは、ちと話があることさ。正「エ、私に話があるつて、それで斯様なに御馳走をさつしやるのだつて、お前さま、よしなさればえゝに、今大めえの金貰つたあげくに、刺身に煮肴のと、おまへ様もつてえねえわな。浪「イエ折り入つて頼みたい事もあるし、まアよい、遠慮せずにもつと飲みな、どれお酌をしやう。正「おつと、おつとこぼれます／＼、あゝ勿體ねえ、一粒萬倍だ、こぼれたものは再び元へは歸らねえつて……。浪「だがの正介どん、今日此處へお前を招待したのも外ぢやアないよ、どうもお前は正直な人で、折々御主人様の先生へさえ間違つた事だつつけ／＼小言をいふ、面白い氣前、どうもあれは出來んよ、お前の様な物堅い人とかうやつて一杯も快よく飲み合ふといふのも、こりや何かの縁で、それだから私はお前の様な人と縁を組みたいと思つて此處へ呼んで來たが、何と此處で私と伯父甥の盃をして、親類に成つてはくれ

んか何うだね。正「何、おめへ様私がやうな百姓と貴方と伯父甥の盃するとね、それはまアほんたうかね。浪「何の虚言はいはぬ、決してそんな空言ではない、何を隠さう、此の浪江は谷出羽守の家來で少々は祿も頂いてをつた者ぢやが、生得わが儘もので、どうも窮屈な武家の勤めが嫌ひでならんから、暇を貰ひ浪人いたして、お前も知つての通り撞木橋に獨身で住まつてをるが、それは少々は金千の貯へもあるし、何も齷齪するにも及ばぬから遊んでをるに就いては、書道でも嗜んで世の中を氣樂に送りたいつもりでをるが、扱、親戚身寄のないのは何かにつけて心細いものでならんから、此後はお前を伯父と頼み何うか相談相手に成つて貰ひたいのぢやが。正「エ、私お前さまの親類になれつて、そりやアお前様勝つちやアいけません。浪「なに、そんな、勝るなどゝいふ事は申さぬ。正「いえ、いけねえよ、正介爺に今日馳走して酒え飲ませ、伯父になれつて云つたら、爺はほんまに受けて成るべいと云つたなんぞとお前様笑はうと思つてか。浪「いえ、それはお前の當推量といふもので、決して左様なわけではない。正「それだつてお前さま、土百姓の己などを、浪人なすつたつて立派だ、やつぱり武士だ、そのお武家様が伯父にしたつて何にもならねえから嘘だ。浪「成程、假初にも武士の片端の私が、百姓のお前を親類にしても、話が合はぬといふ所へ氣が付いたなどは感心だよ、たゞ藪から棒に、成つておくれと申したのは私が悪い、届かなかつたよ。正「エ、それぢやア、それにも